

血曼陀羅紙帳武士

国枝史郎

青空文庫

腰の物拝見

「お武家お待ち」

という声が聞こえたので、伊東頼母たのもは足を止めた。ここは甲州街道の府中から、一里ほど離れた野原で、天保××年三月十六日の月が、朧おぼろに照らしていた。頼母は、江戸へ行くつもりで、街道筋を辿たどって来たのであったが、いっどこで道を間違えたものか、こんなところへ来てしまったのであった。声は林の中から来た。頼母はそっちへ眼をやった。林の中に、白い方形の物が釣つつてあった。紙帳しちやうらしい。暗い林の中に、灰白く、紙帳が釣つつてある様子は、巨大な炭壺の中に、豆腐でも置いたようであった。声は紙帳の中から来たようであった。

塚原卜伝が武者修行の際、山野に野宿する時、紙帳を釣つつて寝たということなどを、頼母は聞いていたので、林に紙帳の釣つつてあることについては、驚かなかつたものの、突然、横柄な声で呼び止められたのには、驚きもし腹も立てた。それで黙もくっていた。すると、紙帳の裾すそが揺れ、すぐに一人の武士が、姿を現あらわした。武士の身長たけが高いので、紙帳を背後うしろ

にして立つた形は「中」という字に似ていた。

「お腰の物拝見出来ますまいかな」と、その武士は、頭巾で顔を包んだままで云った。

「黙らっしゃい」と頼母は、とうとう癩癩を破裂させて叫んだ。

「突然呼び止めるさえあるに、腰の物を見せろとは何んだ！ 成らぬ！」

「そう仰せられずに、お見せください。相当の物をお差しでござろう」

「黙れ！ 無礼な奴、ははア、貴様、追い剥ぎだな。腰の物拝見などと申し、近寄り、懐中物を奪うつもりであろう。ぶった斬るぞ！」

「賊ではござらぬ。ちと必要あつて腰の物拝見したいのじゃ。何をお差しかな。まさか天あ国はお差しではござるまいが」

「ナニ、天国？ あッはッはッ、何を申す、馬鹿な。天国や天あまのぎ座など、伝説中の人物、さような刀鍛冶など、存在したことござらぬ。鍛えた刀など、何んでであろうぞ」

すると武士は、頭巾の中で、錆さびのある、少し嘎しわがれた声で笑ったが、「貴殿も、天国不存在論者か。馬鹿者の一人か。まアよい、腰の物お見せなされ」と、近寄つて来た。

頼母は、傍若無人といおうか、自信ある行動といおうか、相手の武士が、無造作に、近寄つて来る態度に圧せられ、思わず二、三步退いたが、冠っていた編笠を刎ね退け、刀の

柄へ手をかけた。父の敵を討つまでは、前髪も取らぬと誓い、それを実行している頼母は、この時二十一歳であったが、前髪を立てていた。当時の若衆形、沢村あやめに似ていると称された美貌は、月光の中で蒼褪めて見えた。

武士は、頼母の前、一間ばかりの所で立ち止まったが、「まだお若い。若い貴殿を蜘蛛の餌食にするのも不愆、斬るのは止めといたすが、云い出したからには、腰の物は拝見いたさねばならず……眠らせて！」

「黙れ！」

鏗音がした！

「はーッ」と頼母は、思わず呼吸を引いた。武士によつて鳴らされた鏗音が、神魂に徹つたからであった。

猛然と頭巾が逼つて来た。頭巾の主の体が、怒濤のように殺到して来た。そうして次の瞬間には、頼母は、地上へ叩き付けられていた。体当たりを喰らつたのである。

俯向けに地に倒れた頼母は、（俺はここで死ぬのか。死んでは困る。俺は父の敵五味左門を討たなければならぬのだから）と思つた。

そういう彼の眼に見えたものは、彼の両刀を調べている武士の姿であった。そうして、

その武士の背後の地面から、瘤こぶのように盛り上がっている古塚であった。その古塚は、数本の松と、一基の碑いしづみとを、頂きに持つていた。そうして……しかし、頼母の意識は朦朧もうろうとなつてしまつた。

参詣おまいりに来た娘

その頼母が、誰かに呼ばれているような気がして、正気づいた時、まず見えたのは、自分の顔へ、近々と寄せている、細い新月のような眉、初々ういういしい半弓形の眼の、若い女の顔であつた。円味の勝つた頤おとがいにつづいて、剥むき胡桃くるみのような、肌理きめの細かな咽喉のどが、鹿かの子の半襟こから抜け出している様子は、艶なまめかしくもあれば清らかでもあつた。

「もし、お武家様、お気づかれましたか」と娘は云つた。

頼母は弱々しく頷いて見せ、そうして、（俺はこの娘に助けられたらしい）と思つた。しかしすぐに、紙帳から出て来た武士のことが気にかかつた。それで、まだ弛ゆるく、自由になりにくい首をやつと廻して、林の方を見た。どんぐりや櫟くぬぎや柏かしわによつて形かたちづく成なられている雑木林には、今は陽があたつていて、初葉さえ附けていない裸体はだかの幹や枝が、紫ばん

だ樺色かほに立ち並んでいたが、紙帳は釣つてなかった。(夜の間)に立ち去つたのだな。それにしてもあの武士、何者なのであろう? 突然紙帳の中から出て来て、刀を見せると云い、見せないといつたら、体当たりをくれ、俺を気絶させおつた。紙帳を林の中に釣つて寝ていたところから察すると、武者修行の者らしいが、着流しで、頭巾を冠っていた様子から推すと、そうでもないらしい) 頼母は、頭に残っている疲労の中で、こんなことを考えた。(それにしても、彼と俺との、武技うでの相違はどうだったろう) これを思うと頼母は、赧くならざるを得なかった。(大人と子供といおうか。世には恐ろしい奴があればあるものだ) この時娘が、

「野中の道了様へお詣りに参りましたところ、あなた様が気絶をしておいでなさいましたので、ご介抱申し上げたのでございます。でも正氣づかれて、ほんとうに嬉しゅうござい
ます」

と云つた。細々としていて、優しい、それでいて寂さびしみの籠もっている声であつた。

頼母は娘の顔へ眼をやり、

「忝かたじけのうございました。おかげをもちまして、命びろいいたしました」と云つたが、

(何んだ俺はまだ寝ているではないか)と気づき、起き上がろうとした。しかし、倒れた

時、体をひどく打つたらしく、節々が痛んで、なかなか起き上がれなかった。

「いえいえ、そのままでおいでなさいませ。お寝よつたままで。どうせそのお体では、すぐにご出立は出来ませう。むさくるしい所ではございませうが、妾わたしの家で、二、三日ご逗留し、ご養生なさいませ。いえいえご遠慮には及びませぬ。よく妾の家へは、旅のお武家様がお立ち寄りでございます。父が大変喜びますので。でも、家は一里ほど離れておりますので、お徒歩ひろいではお困りでございます。乳母ばあやがおりますゆえ、町へやり、駕籠をひろわせて参りましょう。……乳母！」と、娘は立ち上がりながら呼んだ。

五十あまりの、品のよい婦おんなが、古塚のような小丘の裾に佇んでいたが、すぐに寄つて来た。それへ娘は何やら囁いた。

「はい、お嬢様、かしこまりましたでございます」乳母はそう云つたかと思うと、雑木林を巡つて歩いて行つた。

娘は、しばらくそれを見送つていたが、やがて屈かがむと、地に置いてあつた線香の束を取り上げ、「どれ、それでは妾は、ちよつと道了様へ。……」と云い、古塚のような、小丘の方へ歩いて行つた。

(あれが道了様なのか)と、頼母は、それでもようやく起き上がった体を、小丘の方へ向

け、つくづくと眺めた。それは、高さ二間、周囲十間ぐらいの大岩で出来ている塚であったが、その面に、苔だの枯れ草だの枯れ葉だのがまとい付いている上に、土壌が蔽うているので、早速には、岩とは見えなかった。塚の頂きに立っている碑には、南無妙法蓮華經と、髭題目が刻まれていた。碑は、歳月と風雨とに損われて、諸所欠けている高さ六尺ぐらいの物で、色は黝かったが、陽に照らされ、薄光つて見えた。その碑の面を、縫れたり縫れたりしながら、蒼白い、漠とした物が立ち昇つて行つた。娘が供えた線香の煙りであった。煙りの裾、碑の前に、つましく屈み、合掌しているのが娘で、その姿が、数本の小松に遮られていたので、かえつて趣き深く眺められた。

「絵だ」と、頼母は、娘の赤味の勝つた帯などへ眼をやりながら、呟いた。

古屋敷の古浪人

乳母が雇つて来た駕籠に乗り、頼母が、娘の家へ行つたのは、それから間もなくのことだ、娘の家は、府中から一里ほど離れたところにあつた。鋌打ちの門や土塀などに囲まれた、それは広大な屋敷であつたが、いかにも古く、住人も少ないかして、森閑としていた。

頼母は、古びた衝立^{ついで}ての置いてある玄関から、奥へ通された。

さて、この日が暮れ、夜が更けた時、屋敷の間から、話し声が聞こえて来た。

畳も古く、襖も古く、広いが取り柄の客間に、一基の燭台が置いてあったが、その灯の下で、四人の武士が、酒を飲み飲み、雑談しているのであった。

「我輩は、ここへ逗留して三日になるが、主人^{あるじ}薪左衛門殿の姿を見たことがない。気がかりともいえれば不都合ともいえるな」と云ったのは、頬に刀傷のある、三十五、六の、片岡という武士で、片手を枕にして、寝そべっていた。

「不都合とはどういう訳か」と、怪訝^{けげん}そうに訊いたのは、それと向かい合って、片膝を立て、盃をチビチビ嘗めていた、山口という三十年輩の武士で、「只で泊めて貰い、朝酒、昼酒、晩酌まで振る舞われて、まだ不平なのか」

「そうではない。縁も由縁^{ゆかり}もない我らを、このように歓待してくれながら、主人が顔を出さぬのは不都合……いや、解せぬというのじゃ」

「それは貴公、世間の噂を知らぬからじゃ」

と云ったのは、膝の前にある皿の肴^{さかな}を、なお未練らしくせせていた、五十五、六の、頬髯を生やした、望月角右衛門という武士で、「世間の噂によれば、薪左衛門殿は、ここ

数年来、誰にも逢わぬということじゃ」

すると、二十五、六の、南京豆のような顔をした、小林紋太郎という武士が、「それは何故でございましょうかな？ ご病気なので？ それとも……」

「解らぬ」と、角右衛門が云った。「解らぬのじゃ。さよう、病気だとの噂もあれば、いつも不在じゃという噂もある」

「いよいよ変じや」と云つたのは、片岡という武士で、「そういう薪左衛門殿が、見ず知らずの浪人でも、訪ねて行きさえすれば、泊めてくれ、ご馳走をしてくれるとは……」

「よいではないか」と、角右衛門が、抑えるような手つきをし、

「主人がどうあろうと、我らにとつては関わぬことじゃ。泊めてくれて、ご馳走してくれて、出立の際には草鞋錢までくれる。いやもう行き届いた待遇。それをただ我らは、受けておればよい。我らにとつては大旦那よ。主人の秘密など、剖かぬこと剖かぬこと」

「そうともそうとも」と合い槌を打つたのは、山口という武士で、「その日その日を食べいつなぐだけでも大わらわの我ら、他人の秘密事など、どうでもよかよか。いや全くこの頃の世間、世智辛くなつたぞ。百姓や町人めら、なかなか我らの威嚇や弁口に、乗らぬうになつたからかう」

「以前はよかつた」と感慨深く云つたのは、例の望月角右衛門という武士で、「百姓も町人も、今ほど浪人慣れていず、威嚇などにも乗りやすく、よく金を出してくれたものよ。それに第一、浪人の氣組が違つていた。今の田舎稼ぎの浪人など、自分の方からビクビクし、怖々強請りかけているが、以前の浪人となると、抜き身の槍や薙刀を立て、十人十五人と塊まつて、豪農だの、郷士だのの屋敷へ押しかけて行き、多額の金子を、申し受けたものよ」

義兄弟の噂

しばらく話が途絶えた。春とはいつても、夜は小寒かつた。各自に出されてある火桶に、炭火は充分にいけられていたが、広い部屋は、それだけでは暖まらないのであろう。と、横手の襖が開いて、老僕がはいつて来、新しい酒を置き無言で立ち去つた。浪人たちは、ちよつと居住居を直したが、老僕の姿が消えると、また横になつたり、胡坐を掻いたりした。一番年の若い武士が、爛徳利を取ると、仲間の盃へ、次々と注いだ。燭台の皿へ、丁字が立ったらしく、燈火が暗くなつた。それを一人が、箸を返して除去した。

明るくなつた燈に照らされ、床の間に置いてある矢筒の矢羽根が、雪のように白く見えた。「その時代には、ずば抜けた豪傑もいたものよ」と、角右衛門が、やがて回顧の想いに堪えないかのような声で、しみじみと話し出した。「もつとも、これは噂で聞いただけで、わしは逢つたことはないのだが、来栖勘兵衛、有賀又兵衛という二人でな、義兄弟であつたそう。この者どもとなると、十人十五人は愚か、三十人五十人と隊を組み、槍、薙刀どころか、火繩に点火した鳥銃をさえ携え、豪農富商屋敷へ、白昼推参し、二日でも三日でも居坐り、千両箱の一つぐらいを、必ず持ち去つたものだそうじゃ。ところが、不思議なことには、この二人、甲州の大尽、鴨屋方に推参し、三戸前の土蔵を破り、甲州小判大判取り雑まぜ、数万両、他に、刀劍、名画等を幾いくばく何ともなく強奪したのを最後に、世の中から姿を消してしまつたそうじゃ」

「召し捕られたので？」

「それが解らぬのじゃ」

この時、庭の方から、轍わだちでも軋きしるような、キリキリという音が、深夜の静寂しじまに輝ひびでも入れるかのように聞こえて来た。武士たちは顔を見合わせた。この者どもは、永の浪人で、仕官の道はなく、生活たつきの法に困こじたあげく、田舎の百姓や博徒の間を巡り歩き、強請ゆすりや、

賭場防ぎをして、生活くらしをしている輩やからであつたが、得体の知れない、この深夜の軋ねり音には
気味が悪いと見え、呼吸いきを呑んで、ひっそりとなつた。軋り音は、左の方へ、徐々に移つ
て行くようであつた。不意に角右衛門が立ち上がった。つづいて三人の武士が立ち上がり、
揃つて廊下へ出、雨戸を開けた。四人の眼へはといったものは、月夜の庭で、まぼらの植え
込みと、その彼方あなたの土塀とが、人々の眼を遮つた。しかし、軋り音の主の姿は見え、ず
つと左手奥に、はみ出して作られてある部屋の向こう側から、音ばかりが聞こえて来た。
でも、それも、次第に奥の方へ移つて行き、やがて消え、吹いて来た風に、植え込みに雑
じつて咲いている桜が、一斉に散り、横撲りに、四人の顔へ降りかかった。四人の者は、
そつと吐息をし、府中の町が、一里の彼方、打ち開けた田畑の末に、黒く横よこたわ仆っている
のを、漠然と眺めやつた。町外れの丘の一所が、火事かのように赤らんでいる。

「そうそう」と角右衛門が云つた。「今日から府中は火祭りだつたのう。あの火がそうじ
や」

「向こう七日間は祭礼つづき、町はさぞ賑わうことであろう——これは片岡という武士
であつた。

「府中の火祭り賭場は有名、関東の親分衆が、駒箱こまばんを乾兒衆に担がせ、いくらともなく出

張つて来、掛け小屋で大きな勝負をやる筈。拙者、明日は早々ここを立って、府中へ参るつもりじゃ」これは山口という武士であつた。

「わたくしも明日は府中へ参ります所存。この頃中不漁で、生物にもありつかず、やるせのうござれば、親分衆に取り持つて貰つて……」

と、紋太郎が云つた。生物というのは女のこころらしい。

血蜘蛛の紙帳

それを聞くと、角右衛門は笑つたが、

「貴殿方は、どの親分のもとへ参らるる気かな。拙者は、松戸の五郎蔵殿のもとへ参るつもりじゃ。関東には鼻を突くほど、立派な親分衆がござるが、五郎蔵殿ほど、我々のような浪人者を、いたわつてくださる仁はござらぬ」

「それも、五郎蔵殿が、武士あがりだからでございましょうよ」

酔つた頬を、夜風に颯なぶられる快さからか、四人の者は、雨戸の間に、目白のように押し並び、しばらくは雑談に耽つたが、やがて部屋の中へはいつた。とたんに、

「やツ、腰の物が見えぬ！」と、角右衛門が、狼狽したように叫んだ。

皿や小鉢や爛徳利の取り散らされてある座敷に突つ立ったまま、四人は、また顔を見合
わせた。わずかな時間あいだに、四人の刀が、四本ながら紛失しているではないか。

「盗まれたのじや」

「家の者呼んで……」

「いやいやそれ前に、一応あたりを調べて……」と、年嵩かさだけに、角右衛門は云い、燭台
をひっさげると、次の間へ出た。次の間にも刀はなかった。その次の間へ行つた。そこに
も刀はなかった。そこを出ると廊下で、鉤の手に曲がっていた。その角にあたる向こう側
の襖をあけるや、角右衛門は、

「おお、これは！」と云つて、突つ立った。

続いた三人の武士も、角右衛門の肩ごしに部屋の中を覗いたが、「おお、これは！」と、
突つ立った。

その部屋は十畳ほどの広さであつたが、その中央なかほどに、紙帳しちやうが釣つてあり、燈火ともしびが、
紙帳の中に引き込まれてあるかして、紙帳は、内側から橙黄色だいだいいろに明るんで見え、一個ひとつの
人影が、その面おもてに、朦朧もうろうと映つていた。総髪で、鬚を太く結んでいるらしい。鼻は高い

らしい。全身は痩せているらしい。そういう武士が、刀を鑑定み定みているらしく、刀身が、武士の膝の辺りあたから、斜めに眼の辺りへまで差し出されていた。——そういう人影が映っているのであつた。それだけでも、四人の武士たちにとつては、意外のことだったのに、紙帳おもての面に、あるいはえんえん蛇々えんえんと、あるいはベツトリと、あるいは斑々と、または飛沫しぶきのように、何物か描かれてあつた。その色の気味悪さというものは！ 黒に似て黒でなく、褐色に似て褐色でなく、人間の血が、月日によつて古びた色！ それに相違なかつた。描かれてある模様は？ 少なくとも毛筆ふでで描かれた物ではなかつた。もし空想を許されるなら、何者か紙帳の中で屠腹とふくし、腸はらわたを掴み出し、投げ付けたのが紙帳へ中あたり、それがうね蛇り、それが飛び、瞬時にして描出したような模様であつた。一所にベツトリと、大きく、楕円形に、血痕が附いている。巨大な蜘蛛くもの胴体どうと見れば見られる。まずあそこへ、腸を叩き付けたのであろう。瞬間に腸が千切れ、四方へ開いた。蜘蛛の胴体から、脚のように、八本の線が延びているのがそれだ。蜘蛛の周囲を巡つて、微細こまかい血痕が、霧のように飛び散つている。張り渡した蜘蛛の網と見れば見られる。ところどころに、耳ほどの形の血痕が附いている。網にかかつて命を取られた、蝶や蟬なきがらの屍なきがらと見れば見られる。血描きの女郎蜘蛛！

これが紙帳に現われている模様であつた。では、その蜘蛛を背の辺りに負い、網の中ほど

に坐っている紙帳の中の武士は、何んといったらよいだろう？ 蜘蛛の網にかかって、命を取られる、不幸な犠牲といふべきであろうか？ それとも、その反対に、蜘蛛を使い、生物の命を取る、貪婪どんらん、残忍の、吸血鬼といふべきであろうか？ と、紙帳に映っていた武士の姿が崩れた。斜めに映っていた刀の影が消え、やがて鐸音がした。鞘に納めたらしい。横を向いていた武士の顔が、廊下に突っ立っている、四人の浪人の方へ向いた。

「鈍なまくら刀じゃ、四本とも悉ことごとく鈍刀じゃ。お返し申す」

四本の刀が、すぐに、紙帳の裾から四人の方へ抛ほうり出された。この時まで息を呑み、唾を溜めて、紙帳を見詰めていた四人の浪人は、不覚にも狼狽した声をあげながら、刀へ飛びかかり、ひっ掴み、腰へ差した。その時はじめて怒りが込み上げて来たらしく、

「これ、そんな武士、無礼といおうか、不埒ふらちといおうか、無断で我らの腰の物を持ち去るとは何事じゃ！ 出て来い！ 出て来て謝罪いたせ！」と、角右衛門が怒鳴った。

すると、それに続いて、南京豆のような顔をした紋太郎が、

「出て来い！ 出て来て謝罪いたせ！」と鸚鵡おうむ返しのように叫び、「それに何んぞや鈍刀とは！ 我らの刀を鈍刀とは！」

「何者じゃ！ 名を宣なのれ！ 身分を明かせ！」

とさらに角右衛門が怒鳴った。

すると、紙帳の中の武士は、少し暖しわがれた、錆さびのある声で、「拙者の名は、五味左門と申す、浪人じゃ。当家が浪人を厚遇いたすと聞き、昨夜遅く訪ねて参り、一泊いたしたものだ。疲つかれていたがゆえに、この部屋へ早く寝た。しかるにさつきから、遠くの部屋から、賑やかな、面白そうな話し声が聞こえて来た。一眠りして、疲つかれの癒えた拙者、眼が冴えて眠れそうもない。会話はなしの仲間へはいり、暇を潰そうと声をするべに尋ねて行ったところ、広い部屋へ出た。酒肴が出ておる。悪くないなと思ったぞ。が、見れば、四本の刀が投げ出してあり、刀の主らしい四人の者が、廊下に立って、夜景を見ておる。長閑のどかの風景だったぞ。そこでわしの心が変わった。貴殿方と話す代りに、貴殿方の腰の物を拝見しようとな。悪気からではない。わしの趣味このみからじゃ。そこでわしは貴殿方の腰の物をひとまとめにして持つて参り、今までかかって鑑定いたした。さあ見てくれといわぬばかりに投げ出してあった刀、四本のうち一本ぐらい、筋の通った銘刀ものがあるかと思つたところ、なかつたぞ。フ、フ、フツ、揃いも揃って、関の数打ち物ばかりであつたよ」

蜘蛛の犠牲にえ

「チエツ」と舌打ちをしたのは、短気らしい山口という武士で、やにわに刀を抜くと、
「他人の腰の物を無断で見るさえあるに、悪口するとは何事じゃ。出て来い！ 斬つてく
れる！」

「斬られに行く酔狂者はない。出て行かぬよ。用があらば、そっちから紙帳の中へはいつて参れ。ただし、断わつておくが、紙帳の中へはいつたが最後、男なら命を女なら……」

「黙れ！」と、山口という武士は、紙帳に映っている影を目掛け、諸手突きに突いた。

瞬間に、紙帳の中の燈火が消え、紙帳は、経帷子のような色となり、蜘蛛の姿も――

――内側から描かれていたものと見え、燈火が消えると共に消えてしまった。そうして、突かれた紙帳は、穏しく内側へ萎み、裾が、ワングリと開き、鉄漿をつけた妖怪の口のよ
うな形となり、細い白い手が出た。

「――」

悲鳴と共に、山口という武士はのけぞり、片足を宙へ上げ、それで紙帳を蹴った。しかし、すぐに、武士は、足から先に、紙帳の中へ引き込まれ、忽ち、断末魔の聲が起こり、
バーツと、血飛沫が、紙帳へかかる音がしたが、やがて、森然と静まってしまった。角右

衛門は、持っていた燭台を抛り出すと、真つ先に逃げ出し、つづいて、紋太郎が逃げ出した。

しかし片岡という武士は、さすがに、同宿の誼よしある浪人の悲運を、見殺しに出来ないと思つたか、夢中のように、紙帳へ斬り付けた。とたんに、紙帳の裾ひるがえが翻り、内部うちから掬すくうように斬り上げた刀が、廊下にくろがつたまま燃えている、燭台の燈に一瞬間輝いた。「わ、わ、わーッ」と、苦痛の聲が、片足を股から斬り取られ、四つ這いになって、廊下を這い廻っている武士の口から迸ほとぼしつた。紙帳の中はひっそりとしていた。

こういう間も、キリキリという、轍わだちでも軋まわりるような音は、屋敷の周囲を巡つて、中庭の方へ移つて行つた。

(何んの音だろう?)と、四人の浪人が不審を打つたように、その音に不審を打つたのは、中庭に近い部屋に寝ていた、伊東頼母たのもであった。

頼母は、この屋敷へ来るや、まず朝飯のご馳走になった。給仕をしてくれた娘の口から聞いたことは、この屋敷が、飯塚薪左衛門という郷士の屋敷であることや、娘は、その薪左衛門の一人娘で、葉しおりという名だということや、今、この屋敷には、頼母の他に五人の浪

人が泊まっているということや、父、薪左衛門は、都合があつて、どなたにもお眼にかかれないが、皆様がお泊まりくだされたことを、大変喜んでいられるということなどであつた。「どうぞ、幾日でもご逗留くださりませ」と葉は附け加えた。

頼母は、忝けなく礼を云つたが、こんな不思議な厚遇を受けたことは、復讐の旅へ出て一年になるが、かつて一度もなかつたと思つた。

彼はしもうさ下総の国、佐倉の郷士、伊東忠右衛門のせがれ倅であつた。伊東の家柄は、足利時代に、ひたち下総、常陸等を領していた、管領千葉家の重臣の遺流ながれだったので、現在の領主、堀田ほったびつち備中守も粗末に出来ず、客分の扱いをしていた。しかるに、同一家柄の郷士に、五味

左衛門という者があり、忠右衛門と不和であつた。理由は、二人ながら、国学者で、尊王家であつたが、忠右衛門は、本居宣長の流れを汲む者であり、左衛門は、平田篤胤あつたねの門下をもつて任じている者であり、二人ながら

「大日本は神国なり。天祖始めてもと基を開き、日神長く統を伝え給う。我が国のみこの事あり。異朝にはその類なし。このゆえに神国というなり」という、日本の国体に関する根本思想については、全然同一意見であつたが、その他の、学問上の、瑣末の解釈については、意見を異にし、互いにそしりあ詈言あい、不和となつたのであつた。もちろん、性格の相違も

その因をなしていた。忠右衛門は、穩和で寛宏であつたが、左衛門は精悍せいかんで狷介けんかいであつた。

敵討ちの原因

ところが、去年の春のことであつたが、忠右衛門と左衛門とは、備中守殿によつて、観桜の宴に招かれた。その席で二人の者は、国学の話については、遠慮し、大事を取り、云い争わなかつたが、刀劍の話になつた時、とうとう云い争いをはじめてしまつた。忠右衛門が、天国あまくにという古代の刀工などは、事實は存在しなかつたもので、したがつて鍛えた刀などはないと云つたのに対し、左衛門は、いや天国は決して伝説中の人物ではなく、実在した人物であり、その鍛えた刀も残つておる、平家の重宝こがらすまる小烏丸などはそれであり、我が家にもかつて一振り保存したことがあつたと主張し、激論の果て、左衛門は「水掛け論は無用、この上は貴殿と拙者、この場において試合をし、勝つた方の説を、正論と致さう」と、その精悍の氣象から暴論を持ち掛けた。忠右衛門は迷惑とは思つたが、引くに引かれず承知をし、試合をしたところ、劍技うでは左衛門の方が上ではあつたが、長年肺を患わずらつ

ていて、寒気を厭い、紙帳の中で生活しているという身の上で、体力において忠右衛門の敵でなく、忠右衛門のために打ち挫かれ、自分から仕掛けた試合に負け、これを悲憤し、自宅へ帰るや、紙帳の中で屠腹し、腸を紙帳へ叩き付けて死んだ。しかるに左衛門には、左門という忤があつて、「父上を自害させたのは忠右衛門である」と言い、遊学先の江戸から馳せ帰り、一夜、忠右衛門を往來に要して討ち取り、行衛を眩ました。こうなつてみると、伊東家においても、安閑としてはいられなくなり、

「頼母、そち、左門を探し出し、討つて取り、父上の妄執を晴らせ」

ということになり、さてこそ頼母は、復讐の旅へ出たのであつたが、困つたことには、彼は討つて取るべき、左門という人間を知らなかつた。と云うのは、この時代の風習として、家庭にいないで、江戸へ出、学問に精進していたからである。そう、頼母も左門も、幼少の頃から江戸に遊学し、頼母は、宣長の門人伴信友の門に入り、国学を修め、左門は、平田塾に入つて、同じく国学を究める傍ら、戸ヶ崎熊太郎の道場に通い、神道無念流を学び、二人は互いにその面影を知らないのであつた。

キリキリという、轍の軋るような音を聞き、頼母は、枕から顔を放し、耳を聳てた。

(何んの音だろう?)

音は、中庭まで来たようであつた。

頼母は、夜具から脱け出し、枕もとの刀を握ると、立ち上がった。彼の眼は、すっかり覚めていた。彼は、朝飯を食べるや、すぐに床を取つて貰い、ぐつすりと眠り、疲労を癒し、今は元気を恢復してもいるのであつた。有り明けの燈に、刀の鞘を照らしながら、頼母は部屋を出、廊下を右の方へ歩き、それが、さらに右の方へ曲がっている角の雨戸を、そつと開けて見た。海の底かのように、庭は薄蒼く月光に浸つていた。庭は、まことに広く、荒廢れていた。庭の一所に、頼母の眼を疑がわせるような、物象が出来ていた。古塚のような形の、巨大な岩が、碑と小松とをその頂きに持つて、瘤のように立っているのであつた。それはまったく、頼母が、紙帳から出て来た武士によつて、氣絶させられた地点に——そこに出来ていた、野中の道了様そつくりのものであつた。酷似といへば、塚の左手、遙か離れた所に、植え込みが立っていて、それが雑木林に見えるのも、あの場所の景色とそつくりであつた。

(紙帳が釣つてはあるまいか?) ゴツとするような気持ちで、頼母は、植え込みを見た。しかし紙帳は釣つてはなかつた。あの場所の景色と異うところは、あそこでは、塚と林との彼方が、広々と展開けた野原だつたのに、ここでは、土塀が、灰白く横に延びている

だけであつた。

(碑には、髭題目が刻ほられてあるに相違ない) こう思つて、頼母は、縁から下り、塚の方へ歩いて行き、碑を仰いで見た。碑は、鉛めいた色に仄ほの見えていたが、はたして、南無妙法蓮華經という、七字の名号が、鯁なますの髭のような書体で、刻られてあつた。(不思議だなあ)と呟なきながら、頼母は、少し湿つてはいるが、枯れ草が、氈かのように軟らかく敷かれている地に佇たみ、(道了様の塚を、何んのために、中庭などへ作つたのであろう?)
急に彼は地へ寝た。

老幽鬼出現

(こうここへ俺が気絶して仆たおれば、あそこでの出来事を、再現したことになる)
彼はしばらく寝たままで動かなかつた。二十一歳とはいつても、前髪は立てており、それに、氏素姓よく、坊ちゃんとして生お長つて来た頼母は、顔も姿も初う々うしくて、女の子のようであり、それが、雲一片ない空から、溢れるように降り注いでいる月光に照らされ、寝ている様子は、無類の美貌と相俟あつて、艶なかしくさえ見えた。

と、例の、キリキリという音が、植え込みの方から聞こえて来た。頼母は飛び起きて、音の来る方を睨んだ。昨夜は、雑木林の中から、剣鬼のような男が現われて来たが、今夜は、植え込みの中から、何が現われて来るのだろうか？ 頼母は、もう刀の柄を握りしめた。おお何んたる奇怪な物もの象かたちが現われて来たことであろう！ 蹩り車いざぎが、耳の下まで白髪を垂らした老人を乗せ——老人が自分で漕こいで、忽然と、植え込みの前へ、出て来たではないか！ やがて、植え込みの陰影かげから脱け、蹩り車は、月光の中へ進み出た。月光ひかりの中へ出て、いよいよ白く見える老人の白髪は、そこへ雪が積もっているかのようであり、洋犬のように長い顔も、白く紙のようであった。顔のひとつころ所に黒い斑点しみが出来ていた。窪んだ眼窩くぼみであった。その奥で、炭火おきのように輝いているのは、熱を持った眼であった。老人の体は、これ以上痩せられないというように、痩せていた。枯れ木で人の形を作り、その上へ衣裳を着せたといったら、その姿を、形容することが出来るだろう。左右の手が、二本の棒を持ち、胸と顔との間を、上下に伸縮のびちぢみし、そのつど老人の上半身が、反そつたり屈かがんだりした。二本の棒を櫂かいにして、地上を、海のように漕いで、蹩り車いざぎを進ませるのであった。長方形の箱の左右に附いている、四つの車は、鈍のろく、月光の波を分け、キリキリという音を立てて、廻まわっていた。と、車は急に止まり、老人の眼が、頼母へ据え

られた。

「おお来たか！」

咽喉のどで押し殺したような声であつた。極度の怒りと、恐怖おそれとで、嘎しわがふるれ顫ふるえている声でもあつた。そう叫んだ老人は、棒を手から放すと、片手を肩の上へ上げ、肩の上へ、背後うしろからはみ出していた刀の柄へかけた。刀を背しよ負よつていたのである。それが引き抜かれた時、月光が、一時に刀身へ吸い寄せられたかのように、どぎつく光つた。刀は青眼に構えられた。

「来たか、来栖勘兵衛！ 来るだろうと思つていた！ が、この有賀又兵衛、躰いざり者にこそなつたれ、やみやみとまだ汝おのれには討たれぬぞ！ それに俺の周囲まわりには、いつも警護の者が附いている。今夜もこの屋敷には、六人の腕利きが宿直とこのいしている筈だ。勘兵衛、これ、汝に逢つたら、云おう云おうと思つていたのだが、野中の道了での斬り合い、俺は今に怨みに思つておるぞ！ 事実を誣しい、俺に濡れ衣ぎぬを着せたあげく、俺の股へ斬り付け、躰いざり者になる原因を作つたな。おのれ勘兵衛、もう一度野中の道了で立ち合い、雌雄を決しようと、長い長い間、機会の来るのを待つていたのだ！ さあここに野中の道了がある、立ち合おう、刀を抜け！」それから屋敷の方を振り返つたが、「葉しおりよ、葉よ、勘兵衛が来たぞよ、

用心おし、葉よ！」

と悲痛に叫んだ。

老人はそう叫びながら、やがて、片手で棒を握り、それで漕いで、甕くるま者車を前へ進め、片手で刀を頭上に振りかぶり、頼母の方へ寄せて来た。頼母は、唾あぜん然とした。しかし、唾然とした中にも、自分が人違いされているということは解った。それで、刀の柄へ手をかけたまま、背後うしろへジリジリと下がり、

「ご老人、人違いでござる。拙者は来栖勘兵衛などという者ではござらぬ。拙者は、伊東頼母と申し、今朝より、ご当家にご厄介になりおる者でござる」と云い云い、つい刀を抜いてしまった。

娘の悲哀

すると、その時、屋敷の兩戸の間に、女の姿が現われ、こつちを見たが、急に、悲鳴のような声を上げると、駈け寄つて来、

「お父様、何をなさいます。そのお方は、お父様を警護のため、今日、お家うちへお泊まりく

「ださいました、伊東頼母様と仰せになる、旅のお武家様ではございませんか。おお、お父様お父様、正気づかれてくださいまし！」

と叫び、老人の刀持つ手に取り縋った。葉であった。しかし老人は、

「娘か、用心おし！ 来栖勘兵衛が、わしを殺しに来たぞよ！ そこに勘兵衛がいる！」
と叫び、尚、車を進めようと、片手の棒で、地上を漕ごうとするのであった。

「いえいえお父様、あのお方は来栖勘兵衛ではございません。よくご覧なさいまし、お年が違います。勘兵衛より、ずっとお若うございます」

こう云われて老人は、はじめて気づいたように、つくづくと頼母を見たが、

「なるほどのう、年が違う、前髪立ちじや。勘兵衛はわしより一つ年上だった筈じや。勘兵衛ではない」

落胆したように、また、安心したように、老人は、急に首を垂れ、振り上げていた刀を下げると、弱々しく、子供のように、葉へもたれかかった。赤い布のかかった艶々しい髪の下、葉の肩へ、老人の白髪頭しらがが載っている。白芙蓉のような葉の顔が、頬が、老人の頬へ附いている。秩父絹に、花模様を染め出した衣裳の袖から、細々と白い葉の手が延びて、老人の肩へかかっているのは、車の上の老人を、抱だきかか介えているからであった。いつ

か老人の手から、刀も棒も放され、刀は、車の前の、枯れ草の上に落ちた。何んと老人は眠っているではないか。刀を構え、この様子を眺めていた頼母は、危険はないと思つたか、刀を鞘に納め、二人の方へ寄つて行つたが、

「葉殿、そのご老人は？」と、探るように訊いた。

「父でございます」——葉の声は泣いている。

「ご尊父？ では、薪左衛門殿で？」

葉は黙つて頷いた。

「それに致しても、ご尊父には、ご自身を、有賀又兵衛じやと仰せられたが？」

「父は乱心いたしおるのでございます」

「ははあ」頼母はやつと胸に落ちたような気がした。狂人きちがいでもなければ、深夜に、甍いぎり車などに乗り、刀を背負い、現われ出で、自分を来栖勘兵衛などと見誤り、ガムシヤラに斬つてなどかかるとは思はない。（俺は、狂人を相手にしていたのか）頼母は、鼻白むような思いがしたが、

「ご乱心とはお気の毒な。していつ頃から？」

「五年前の、ちようど今日、府中の火祭りの日でございましたが、松戸の五郎蔵と申す、

博徒の頭かしらが参り、父と、密談いたしおりましたが、突然父が、『汝おのれ、来栖勘兵衛、執念深くもまだ、この有賀又兵衛を、裏切り者と誣しいおるか！』と叫びましたが、その時以来……』

葉は、片袖を眼にあてて泣いた。

屋根ばかりに月光を受けて、水のような色を見せ、窓も雨戸も、一様に黒く、廃屋のように見えている屋敷は、不幸な人々を見守るかのようには、庭をへだてて立っていた。

（有賀又兵衛、来栖勘兵衛？）と、頼母は、考え込んだ。頼母は、有賀又兵衛、来栖勘兵衛という、伝説的にさえなっている、二人の人物の噂を、亡き父から聞かされていた。

「浪人組の頭での、傑物であった。わしの家などへも、徒党ひきを率いてやって来て、金などを無心したものだ。五味左衛門の屋敷などへも再三出かけて行って、無心したらしい。又兵衛の方は、わけても人物で、仁義なども心得ており、大義名分などにも明らかで、王道を尊び、霸道を憎む議論などを、堂々と述べて、男らしいところを見せたので、ついわしなど、進んで金を出してやったものじゃ」と、父は語った。

しかし、その勘兵衛や又兵衛は、亡父ちちの話によれば、とうの昔に——二十年も以前まえに、世間から姿を消してしまった筈であった。しかるに、薪左衛門殿が、その有賀又兵衛だと

いう。(何故だろう?)しかし、頼母は、すぐ苦笑した。(相手は狂人きちがいなのだ、狂人の云うことなどに、何故も不思議もあるものか)

「葉殿」と、頼母は、塚の方をチラリと見たが、「お訊きいたしたいは、ここに作られてあります古塚、どうやらこれは野中の道了の……」

云われて葉も、眼にあてていた袖の隙から、塚の方を眺めたが、

「は、はい」

「野中の道了の塚を、お屋敷の庭へ作られるとは、何か仔細が……」

道了塚の秘密は

葉の泣き声は高くなり、しばらくは物を云わなかった。肥ふとりざかりの、十七の娘にしては、瘦せぎすに過ぎる葉の肩は、泣き声につれて、小刻みに顫えるのであった。

「それもこれも……」と、葉は、やがて、途切れ途切れに云った。「父の心を……正体ない父の心を……少しなりとも慰めてやりたさに……才覚わたくししまして……妾むすめが……」

顔から袖をとり、塚の頂きの碑を眺めた。南無妙法蓮華経という、七字だけが黒く、そ

の周囲の碑の面は、依然、月の光で、鉛色に仄めいて見えていた。

「父は」と、葉は、またも途切れ途切れに云った。「妾、物心つきました頃から、一里の道を、毎日のように、野中の道了様まで参りまして、塚の周囲を廻っては、物思いに耽りましたが……乱心しましてからは、それが一層烈しくなり、日に幾度となく……それですのに、父は躰者になりましたでございます」

嗚咽おえつの声はまた高くなつた。娘は、父親を抱き締めたらしい。白髪おえつの頭が、肩から外れて、葉の胸にもたれている。

「父には以前から、股に刀傷がございましたが、弱り目に祟り目とでも申しませうか、乱心しますと一緒に、悪化わるくなり、とうとう躰者いざりに……」

草に落ちてゐる抜き身は、氷のように光っている。庭のそちこちに咲いてゐる桜は、微風に散っている。

「躰者になりましたも、道了様へは行かねばならぬと……そこは正気でない父、子供のように申して諾ききませぬ。躰車くるまなどに乗せてやりましては、世間への見場悪く、……いつそ、道了様を屋敷内へお遷座うつしたらと……庭師に云い付け、同じ形を作らせましたところ、虚うつろ妄ごころの父、それを同じ道了様と思ひ、このように躰車くるまに乗り、朝晩にその周囲まわりを廻り

……」

悲しそうに、また葉は、眠りこけている父親を見やるのであった。

身につまされて聞いていた頼母は、いつか、葉の前へ腰を下ろし、腕を組んだ。

急に葉は、怒りの声で云った。

「父を脅かす者は、松戸の五郎蔵なのでございます。父は妾に申しました。『五郎蔵が殺しに来る。彼奴には大勢の乾児があるが、俺には乾児など一人もない。味方が欲しい、旅のお侍様などが訪ねて参ったら、泊め置け』と。……」

（そうだったのか）と頼母は思った。（不思議に厚遇されると思ったが、さては、いつの間にか俺は、この屋敷の主人の、警護方にされていたのか）しかし事情が事情だったので、怒りも、笑いも出来なかった。

更けて行く夜は、次第に寒くなつて来た。老人をいつまでも捨てておくことは出来なかった。二人は、躰車を押して、屋敷の方へ行くことにし、頼母は、まず、草に捨ててある刀を拾い取り、老人の背の鞆へ差してやった。それから躰車を押しにかかった。

「勿体のうございます」

葉が周章てて止めた。手が触れ合った。

「あつ」

葉の聲が情熱をもつて響いた。

「ああ」

思春期の処女おとめというものは、男性おとこのわずかな行動によつて、衝動を受けるものであり、
そうしてその処女が、愛と良識みわとに恵まれてゐる者であつたら、衝動を受けた瞬間、相手
の男性の善悪を、直観的に識別みわけ、その瞬間に、将来を托すべき良人おととを——恋人を、認識みとめ
るものである。狂人の、孤独の父親に仕え、化物ばけもの、物屋敷のような廢れた屋敷すたに住み、荒ら
くれた浪人者ばかりに接してゐた、無垢むく純情の葉が、今宵はじめ、名玉のように美しく
清い、若い武士と、不幸な一家のことについて語り合つたあげく、偶然手を触れ合つたの
であつた。その一触が、彼女の魂を、根底から揺り動かし、「叫び」となつて、彼女の口
から出たのは、無理だとは云えまい。頼母は、葉の叫び声に驚いて、葉を見詰めた。葉の
眼に涙が溢れてゐた。しかしその涙は、さつき、父親や、自分の家の不幸のために泣いた
涙とは違い、歡喜と希望と愛情とに充ちた涙であつた。葉の頬は夜眼にも著しるく赤味注さして
いた。頼母は、何が葉をそうまで感動させたのか解らなかつた。手と手と触れ合つたこと
など、彼は、気がつかなかつたほどである。それほど彼は無邪氣なのであつた。しかし、

葉の感動が、自分を愛してのそれであるということは直覺された。このことが今度は彼を感動させた。

(この娘がわしを！)

その娘は、自分にとつては命の恩人と云えた。この娘の介抱がなかったら、自分は今朝死んでいたかもしれない！

(この娘がわしを！)

頼母の心へ感謝の念が、新たに強く湧き、それと一緒に、愛情がヒタヒタと寄せて来るのを覺えた。

立ち尽くし、見詰め合っている二人の頭上には、練り絹に包まれたような朧おぼろの月がかかつてい、その下辺したべを、帰かえる雁かりの一連ひとつらが通っていた。花吹雪が、二人の身を巡った。

「勘兵衛！」と、不意に老人が叫んだ。「天あまくに国の剣を奪ったのも汝おのれの筈じゃ！ それをこの身に！」

(天国?)と、頼母は、ヒヤリとし、恍惚の境いから醒めた。

(この老人も、天国のことを云う！)

父、忠右衛門が、横死をとげ、自分が復讐の旅へ出るようになったのも、元はといえば、

天国の剣の有無の議論からであった。頼母は、天国の名を聞くごとに、ヒヤリとするのであった。

(紙帳から出て来て、俺に体あたりをくれた武士も、天国のことを云ったが、薪左衛門殿も、天国のことを……)

頼母は、薪左衛門を見た。薪左衛門は眠っていた。眠ったままの言葉だったのである。

五郎蔵の賭場

こういうことがあつてから、三日経った。

ここ、府中の宿は、火祭りで賑わっていた。家々では篝かがりび火を焚き、夜になると、その火で松たいまつ明を燃やし、諏訪神社の境内を巡まわった。それで火祭りというのであるが、諏訪神社は、宿から十数町離れた丘つづぎの森の中にあり、その森の背後の野原には、板囲いの賭場とばが、いくらともなく、出来ていて、大きな勝負が争われていた。

伊東頼母が、この一劃へ現われたのは、夕七ツ——午後四時頃であった。歩いて行く両側は賭場ばかりで、場内なかからは景氣のよい人声などが聞こえて来た。夕陽を赤く顔へ受け

て、賭場へはいつて行く者、賭場から出て来る者、いずれも昂奮しているのは、勝負を争う人達だからであろう。総州松戸の五郎蔵持ちと書かれた板囲いを眼に入れると、頼母は、足をとめ、

「これが五郎蔵の賭場か、どれはいつてみようかな」と呟いた。

というのは、不幸な飯塚薪左衛門親子を苦しめる、五郎蔵という、博徒の親分の正体を見究め^{きわ}ようために、やって来た彼だからである。そうして、彼としては、機会を見て、五郎蔵と話し、何故薪左衛門を脅^{おし}すのか？ 事実、薪左衛門は有賀又兵衛であり、五郎蔵は来栖勘兵衛なのか？ 野中の道了塚で、二人は斬り合ったというが、その動機は何か？ 野中の道了塚の秘密は何か？ 等をも確かめようと思っっているのであった。

それにしても飯塚薪左衛門の屋敷から、この府中までは、わずか一里の道^{みちのり}程なのに、なぜ三日も費やして来たのであろう？

彼は三日前のあの夜、薪左衛門の屋敷で、ああいう事件に逢ったが、それから甍^{いざ}り車を押して、栞共々、庭から屋内へ、薪左衛門を運び入れた。屋敷の中は大変であった。五人泊まっていたという浪人のうち、一人は斬り殺されてい、一人は片足を斬られてい、後の

三人の姿は消えてなくなっていた。片足を斬られた浪人の語るところによれば、紙帳を釣つて、その中にいた五味左門と宣る武士なのによつて、この騒動が惹き起ひこされたということであつた。

この事を聞くと、頼母は仰天し、娘の栞へ、そのような武士を泊めたかと訊いてみた。すると栞は、「五味左門と宣り、一人のお武家様が、宿を乞いましたので、早速お泊めいたしましたがお寝やすみになる時、紙帳を釣りましたかどうか、その辺のところは存じませぬ」と答えた。それで頼母は、どつちみち、紙帳の中から出て来て、自分を体あたりで気絶させた、武道の達人が、自分の父の仇の、五味左門であるということを知つたが、そんな事件が起こつたため、その処置を、栞と一緒に付けることになり、三日を費やし、三日目の今日、ようやく府中へ来たのであつた。

「なかなか立派な小屋だな」

と眩つぶやきながら、頼母は、改めて五郎蔵の賭場を眺めた。

板囲いは、ひときわ大ぶりのもので、入り口には、二人の武士が、襷たすきをかけ、刀を引き付け、四斗樽に腰かけていたが、いうまでもなく賭場防ぎで、一人は、望月角右衛門であり、もう一人は、小林紋太郎であつた。この二人は、あの夜、薪左衛門の屋敷で、ああい

う目に逢い、恐怖のあまり、暇も告げず、屋敷を逃げ出し、ここの五郎蔵の寄人になつたものらしい。同じ屋敷に泊まつたものの、顔を合わせたことがなかつたので、頼母は、二人を知らず、そこで目礼もしないで、入り口をくぐつた。

賭場は、今が勝負の最中らしく、明神へ参詣帰りの客や、土地の者が、数十人集まつてい、盆を圍繞とりまいて、立つたり坐つたりしていた。世話をする中盆が、声を潤からして整理に努めているかと思うと、素裸すはだか体に下帯一つ、半紙を二つ折りにしたのを腰に挟んだ壺振りしとねが、鉢巻をして、威勢のよいところを見せていた。正面の褥の上にドツカリと坐り、銀造りの長脇差しを引き付け、盆を見ている男があつたが、これが五郎蔵で、六十五歳だといふのに、五十そこそこにししか見えぬ、髪など、小鬢へ、少し霜を雑まじているばかりであつた。段鼻の、鷲のような眼の、赧あじら顔は、いかにも精力的で、それに、頤あじなどは、二重にくくれているほど肥えているので、全体がふくよかであり、武士あがりというだけに、品があり、まさに親分らしい貫禄を備えていた。甲州紬つむぎ茶ぢや微みじん塵の衣裳に、紺献上の帯を結んでいゝものも、よく似合つて見えた。その横に女が坐っていた。以前から五郎蔵が、自分のものにしよと苦心し、それを、柳に風と受け流し、今に五郎蔵の自由にならないところから、博徒仲間このしやかいで、噂の種になつていゝ、お浦という女であつた。二業——つまり、

料理屋と旅籠屋はたしとを兼ねた、武蔵屋というのへ、一、二年前から、流れ寄つて来ている、いわゆる茶屋女なのである。年は二十七、八でもあろうか、手入れの届いた、白い、鞣なめし革のような皮膚は、男の情緒こころを悩ますに足り、受け口めいた唇は、女形おやまのように濃情のうじょうであつた。結城の小袖に、小紋縮緬ちりめんの下着を重ね、厚板あついたの帯を結んでいる。こんな賭場へ来ているのは、五郎蔵が、

「おいお浦、祝儀はずむから、小屋へ来て、客人の、酒や茶の接待をしてくんな」と頼んだからであるが、その実は、五郎蔵としては、片時もこの女を、自分の側そばから放したくないからであつた。

（賭場に神棚が祭つてあるのは変だな）

と、盆の背後、客人の間に雑じつて立つていた頼母は、五郎蔵やお浦から眼を外し、五郎蔵の背後、天井に近く設けられてある、白木造りの棚を眺めた。紫の幕が張つてあり、燈明が灯してあつた。

（何かの縁起には相違あるまいが）

ゆすり浪人

この間にも、五百両胴のチョボ一は、勝負をつづけて行った。胴親、五郎藏の膝の前に積まれてある、二十五両包みが、封を切られたかと思うと、ザラザラと賭け金が、胴親のもとへ掻き寄せられもした。

一人ばかりしいほど受け目に入っている客人があつた。編笠を冠ったままの、みすぼらしい扮装みなりの浪人であつたが、小判小粒とり雑まぜ、目紙めがみの三へ張つたところ、それが二回まで受け、五両が百二十五両になつた。それだのに賭金かねを引こうともせず、依然として三の目へ張り、

「壺！」と怒鳴っているのであつた。

客人たちは囁ささやき出した。

「お侍さんだけに度胸があるねえ」

「今度三が出たらどうなると思う」

「胴親が、四倍の、五百両を附けるまでよ」

「元金もとぎんを加えて、六百二十五両になるってわけか」

「それじゃア、五百両胴は潰れるじゃアねえか」

染八という乾児こづんが中盆をしていたが、途方にくれたように、五郎蔵の顔を見た。との時まで、小面憎そうに、勝ち誇っている浪人を、睨にらみ付けていたお浦が、

「親分」と例の五郎蔵へ囁いた。

「喜代三を引つ込めなさいよ」

喜代三というのは、壺振りの名であった。

「喜代三にやア、三が振り切れそうもないじゃありませんか」

「大丈夫だ」

五郎蔵の声は自信に充ちていた。

「天あまくに国様が附いている」

それから神棚の方へ頤をしやくつたが、「五郎蔵の賭場、一度の疵きずも附いたことのねえのは、天国様が附いているからよ。喜代三、勝負しろ」

（天国様？）

と、五郎蔵の言葉ことばを小耳に挟んで、不審を打ったのは、頼母で、

（それじゃあの神棚には、天国の剣が祭つてあるのか？）

改めて神棚を眺めた。燈明の火が明るく輝き、紫の幕が、華やかに栄はえ、その奥から、

真しんちゆう 鍬びようの鍬ほこらを持った祠とほその、扉とほそが覗のぞいていた。

(あの祠の中に天国があるのではあるまいか)

彼がここへ来たもう一つの目的は、五郎蔵が来栖勘兵衛だとして、はたして、天国の剣を持つているかどうか、それを知ることであった。

頼母はじつと神棚を見詰めた。

と、

「わーッ」

という声が聞こえ、

「一びんだーッ」

「お侍さむれえ、やられたのーッ」

という声が聞こえた。

頼母は、はつとして、盆の方を見た。

毘さいころ子の目めが、一を出して、目紙の上に、ころがっている。

(態ざまア見ろ!) というように、染八が、浪人の前から、百二十五両を掻き集めようとして

いるのが見えた。

「待て！」

浪人が刀を抜き、ピタリと目紙の上へ置いた。

「その金、引くことならぬ！」

「何を！」

「賭場荒らしだーッ」

場内総立ちになった。

瞬間に浪人は、編笠を刎^はね退け、蒼黒い、痩せた、頬骨の高い、五十を過ぎ、兇暴の顔を現わし、落ち窪^{くぼ}んで、眼隈^{めくま}の出来ている眼で、五郎蔵を凝視^{みつ}めたが、

「お頭^{かしら}ア、いや親分、お久し振りでござんすねえ」と、言葉まで侍らしくなく、渡世人じみた調子で、「いつも全盛で、おめでとうございます」

五郎蔵は、相手の顔を見、不審^{いぶか}しそうに眼をひそめたが、そろりと脇差しを膝へ引き付けると、

「汝^{わりや}ア？」

「渋江典膳^{しぶえてんぜん}で。……お見忘れたア情ねえが、こう痩せ涸れてしまっっちゃア、人相だつて変る筈で。……それにさ、お別れしてつから、月日の経つこと二十年！ ハッハッ、お解

りにならねえ方が本当かもしれねえ」

「……………」

「お頭ア、いや親分、あの頃はようござんしたねえ、二十年前は。……来栖勘兵衛、有賀又兵衛といやア、泣く児も黙る浪人組の頭、あつしやア、そのお頭の配下だったんですからねえ。……徒党を組んでの、押し借り強請りの薬が利きすぎ、とうとう幕府から、お触れ書きさえ出されましたつけねえ。あつしやア、暗記で覚えておりやす。『近年、諸国在々、浪人多く徘徊いたし、槍鉄砲をたずさえ、頭分、師匠分などと唱え、廻り場、持ち場などと号し、めいめい私に持ち場を定め、百姓家へ参り、合力を乞い、少分の合力銭等やり候えば、悪口乱暴いたす趣き、不届き至極、目付け次第擲め捕り、手に余らば、斬り捨て候うも苦しからず、差し押さえの上は、無宿、有宿にかかわらず、死罪その外重科に処すべく候云々』……勘兵衛とも又兵衛とも、姓名の儀は出ておりませんが、勘兵衛、又兵衛を目あてにしてのお触れ書きで。そうしてこのお触れ書きは、今に活きている筈で。……ですから、勘兵衛、又兵衛が、今に生きていて、この辺にウロウロしていると知れたら、忽ち捕り手が繰り出され、捕らえられたら、首が十あつたって足りやアしねえ。……それほどこの勢力のあつた浪人組も、徒党も、二十年の間に、死んだり、殺されたり、ご処刑受

けたりして、今に生きている者、はて、幾人ありますかねえ。……三人だけかもしれないねえ。……一人は私で。一人は、ここから一里ほど離れている古屋敷に、躰者いざりになって生きている爺さんよ。……もう一人は……」

「お侍さん」と、五郎蔵が云った。「いい度胸ですなえ」

「何んだと」

「あつしゃア、どういふものか、ご浪人が好きで、これまで随分世話を見てあげましたが、ご浪人に因縁つけられたなア今日が初めてで」

「つけるだけの因縁が……」

「いい度胸だ」

「褒められて有難え」

「百二十五両お持ちなすつて。……お浦、胴巻でも貸してあげな」

「親分！」と、お浦は齒切りし、「あんな乞食浪人こじきに……」

「いいつてことよ」それからお浦の耳へ口を寄せたが、

「な！……」

「なるほどねえ。……渋谷さんとやら、それじゃアこれを……」

お浦の投げた縞の胴巻は、典膳の膝の辺へ落ちた。それへ、金包みを入れた典膳は、ノツシリと立ち上がったが、礼も云わず、客人を掻き分けると、場外へ出て行つた。その後を追つたのは、お浦であつた。

典膳の運命は

この日が夜となり、火祭りの松明が、諏訪神社の周囲を、火龍のように廻り出し、府中の宿が、篝かがりび火の光で、昼のように明るく見え出した。

この頃、頼母は、物思いに沈みながら諏訪神社と府中とを繋いでいる隙道を、府中の方へ歩いていった。賭場で見聞いたことが、彼の心を悩ましていたのであつた。渋江典膳という浪人が、五郎蔵を脅かした言葉から推すと、いよいよ五郎蔵は来栖勘兵衛であり、飯塚薪左衛門は、有賀又兵衛のように思われてならなかつた。そうして、五郎蔵が来栖勘兵衛だとすると、神棚に祭られてあつたのは、天国の剣に相違ないように思われた。このことは頼母にとっては、苦痛のことであつた。

(天国の剣が、存在するということが確かめられれば、父の説は、誤りということになる。

しかるに父は、その誤った説で、五味左衛門と議論したあげく、試合までして、左衛門を打ち挫き、備中守様のご前で恥をかかせた。そのために左衛門は悲憤し、屠腹して死んだのであるから、左衛門を殺したのは、父であると云われても仕方がなく、左衛門の忤左門が、父を討つたのは、敵討ちということになる。その左門を、自分が、父の敵として討つということは、はつとご法度の、「又敵討ち」になろうではあるまいか）

（いつそ、天国を手に入れ、打ち砕き、この世からなくなしてしまつたら）

こんな考えさえ浮かんで来るのであつた。

（天国のような名刀が、二本も三本も、こんにち現代に残っている筈はない。あの天国さえ打ち砕いてしまつたら）

枯れ草に溜つている露を、足に冷たく感じながら、頼母は、府中の方へ歩いて行つた。

と、行く手に竹藪があつて、出たばかりの月に、はむら葉叢を、薄白く光らせ、そよかぜ微風にそよいでいたが、その藪蔭から、男女の云い争う声が聞こえて来た。頼母は、（はてな？）と思ひながら、その方へ足を向けた。

府中の方へ流れて行く、幅十間ばかりの、髪川という川が、竹藪の裾を巡って流れていて、淵も作れないほどの速い水勢が、ながれ月光を銀箔のように砕いていた。その岸を、男と女

とが、酔っていると見え、あぶなっかしい足どりで歩き、云い争っていた。

「これお浦、どうしたものだ。どこまで行けばよいのだ。蛇の生殺しは怪しからんぞ。これいいかげんで……」

渋江典膳であった。五郎蔵の賭場で、百二十五両の金を強請り、場外へ出ると、賭場で、五郎蔵の側にいたお浦という女が、追っかけて来て、親分の吩咐で、一献献じたいといった。こいつ何か奸策あつてのことだろうと、典膳は、最初は相手にしなかつたが、田舎に珍しいお浦の美貌と、手に入った籠絡の手管とに誘惑かされ、つい府中の料理屋へ上がった。酒を飲まされた。酔つた。酔つたほどに、下根の典膳は、「お浦、俺の云うことを諾げ」と云い出した。

お浦はお浦で、五郎蔵から、

「あんな三下に、大金を強請られたは心外、さりとて、乾児を使って取り返すも大人気ない。お浦、お前の腕で取り返しな。取り返したら、金はお前にくれてやる」と云われ、その気になり、出かけて来た身だったので、「ここではあんまり内密の話も出来ないから……ともかくも外へ出て」と、連れ出して来たのであった。

「どこへ行くのだお浦、ひどく寂しい方へ連れて行くではないか……」

と、典膳は、お浦の肩へ手をかけようとした。

お浦は、それをいなししたが、

「何をお云いなのだよ。この人は……」

そのくせ、心では、（一筋縄ではいけそうもない。……それにこんな破落戸ならず武士、殺したところで。……そうだ、いつそ息の根止めて……）と、思っているのであつた。

典膳がよろめいて、お浦の肩へぶつかつた時、お浦は、何気なさそうに、典膳の懐中ふところへ手をやつた。

「これ！」

「胴巻かえ？」

「うん」

「重たそうだねえ」

「百二十五両！」

「ああ、昼間の金だね」

「うん。……五郎蔵め、よく出しおつた。旧悪ある身の引け目、態さまア見ろだ。……お浦、いうことを諾いたら、金をくれるぞ。十両でも二十両でも」

「金なら、妾だつて持つているよ」

「端はした金だろう」

「鋼鉄はがねさ、斬れる金さ」

お浦は、片手を懐中へ入れ、呑んでいたあいくちヒ首を抜くと、「そーれ、斬れる金を！」と、典膳の脇腹へ突つ込んだ。

「ヒエーッ、お浦アーツ、さてはおのれ汝！」

「汝も蜂の頭もありやアしないよ」

胴巻をグルグルと手繰り出し、背を抱いていた手を放すと、典膳は、弓のようへのけ反つたまま、川の中へ落ちて行つた。

(止どめを刺さなかつたがよかつたかしら?)

お浦は、岸から覗き込んだ。急の水は、典膳を呑んで、下流へ運んで行つたと見え、その姿は見えなかつた。

「案外もろいものだねえ」

草でヒ首の血糊を拭つた時、

「お浦殿、やりましたな」

という声が聞こえて来た。さすがにお浦もギョツとして、声の来た方を見た。竹藪を背にして、編笠をかむった武士が立っていた。

「どなた？」

「旅の者じゃ」

「見ていたね」

「さよう」

「突き出す気かえ」

「役人ではない」

「話せそうね」

と、お浦は、構えていたヒ首を下ろし、

「見遁がしてくれるのね」

「殺して至当の悪漢じゃ」

「ご存知？」

「賭場で見ていた」

「まあ」

お浦の恋情

「昼の間、五郎蔵殿の賭場へ参つた者じゃ」

「あれ、それじゃア、まんざら見ず知らずの仲じゃアないのね」

「それに、同宿の誼よじみもある」

「同宿？」

「拙者は、府中の武蔵屋に泊まつておる」

編笠の武士、すなわち、伊東頼母は、そう、今日、府中へ来ると、五郎蔵一家が、武蔵屋へ宿を取つてしていると聞き、近寄る便宜にもと、同じ旅籠はたごへ投じたのであつた。しかるに、五郎蔵はじめその一家が、もう賭場へ出張つたと聞き、自分も賭場へ出かけて行つたのであつた。

「まあ。武蔵屋に。それはそれは。妾も、武蔵屋の婢女おんなでござんす」

「賭場で、典膳という奴、五郎蔵殿へ因縁つけたのを見ていた。殺されても仕方ない」

「それで安心。……妾アどうなることかと。……でも、芳志こころざしには芳志を。……失礼な

がら旅用の足しに……」

と、お浦が、胴巻の口へ手を入れたのを、頼母は制し、

「他に頼みのござる」

「他に……」お浦は、意外に思ったか、首を傾げたが、何か思いあたったと見え、やがて、月光の中で、唇をゆがめ、酸味ある笑い方をしたかと思うと、「弱いところを握られた女へ、金の他に頼みといつては、さあ、ホッ、ホッ」

「誤解しては困る」

と、頼母は、少し周章あわてた。しかし厳肅の声で、「不躰ぶしつけの依頼をするのではない」

「では……」

「賭場に神棚がありましたのう」

「ようご存知」

「ご神体は？」

「はい、天国とやらいふ刀……」

「天国!? おお、やつぱり! ……お浦殿、その天国を拝見したいのじゃが」

「天国様を? ……異いなお頼み。……何んで?」

「拙者は武士、武士は不断に、名刀を恋うるもの。天国は、天下の名器、至宝中の至宝、武士冥利、一度手に取つて親しく」

「なるほどねえ、さようでございますか。……いえ、さようでございますとも、女の身の妾などにしてからが、江戸におりました頃、歌舞伎を見物、水の垂れそうに美しい、吉沢あやめの、若衆姿など眼に入れますと、一生に一度は、ああいう役者衆と、一つ座敷で、盃のやり取りしたいなどと。……同じ心持ち、よう解ります。……では何んとかして、あの天国様を。……おおちようど幸い、五郎蔵親分には、あの天国様を、賭場へ行く時には賭場へ持つて行き、宿へ帰る時には宿へ持つて帰ります。……今夜妾がこつそり持ち出し、あなた様のお部屋へ……」

「頼む」

「お部屋は？」

「中庭の離座敷はなれ」

「お名前は？」

「伊東頼母」

「お顔拝見しておかねば……」

頼母は、そこで編笠を脱いだ。

お浦はその顔を隙かして見たが、「まあ」と感嘆の声を上げた。「ご繚繚きりようよしな！

……お前髪立ちで！ 歌舞伎若衆といおうか、お寺お小姓と云おうか！ 何んとまアお美しい！」

見とれて、恍惚うっとりとなったが、

「女冥利、妾アどうあろうと……」

と、よろめくように前へ出た。

若衆形吉沢あやめに似ていると囁かれた、無双の美貌の頼母が、月下に立った姿は、まこと舞台から脱け出した芝居の人物かのようで、色ごのみの年増女などは、魂を宙に飛ばすであろうと思われた。前髪のほつれが、眉のあたりへかかり、ポツと開けた唇から、揃った前歯が、つつましく覗いている様子など、女の子よりも艶なまめかしかつた。

「天国様は愚か、妾ア……」

と、寄り添おうとするのを、

「今夜、何時に？」

と、頼母は、お浦を押しやった。

「あい、どうせ五郎蔵親分が眠ってから……子の刻頃……」

「間違いござるまいな」

「何んの間違いなど。……あなた様こそ間違いなく……」

「お待ちしましょう」

と、云い棄て、頼母は歩き出した。お浦は、その背後姿を、なお恍惚とした眼付きで見送ったが、

(妾ア、生き甲斐を覚えて来たよ)

紙帳の中

この夜が更けて、子の刻になった時、府中の旅籠屋、武蔵屋は寝静まっていた。

と、お浦の姿が、その廊下へ現われた。廊下の片側は、並べて作つてある部屋部屋で、襖によつて閉ざされていたが、反対側は中庭で、月光が、霜でも敷いたかのように、地上を明るく染めていた。質朴な土地柄からか、雨戸などは立ててない。お浦は廊下を、足音を忍ばせて歩いて行つた。廊下が左へ曲がつた外れに、離座敷が立っていた。藁葺き屋根

の、部屋数三間ほどの、古びた建物で、静けさを好む客などのために建てたものらしかった。離座敷は、月に背中を向けていたので、中庭を距てた、こっちの廊下から眺めると、屋根も、縁側も、襖も、一様に黒かった。お浦は、その一間に、自分を待っている美しい若衆武士のことを思うと、胸がワクワクするのであった。（早くこの天国様をお目にかけて、その代りに……）と、濃情のこの女は、刀箱を抱えていた。

やがて、離座敷の縁側まで来た。お浦は、年にも、茶屋女という身分にも似ず、闇の中で顔を赧らめながら、部屋の襖をあけ、人に見られまいと、いそいで閉め、

「もし。……参りましたよ」

と虚うつろのような声で云い、燈火ともしびのない部屋を見廻した。と、闇の中に、灰白く、方形の物が懸かっていた。

（おや？）とお浦は近寄って行った。紙帳であった。（ま、どうしよう、部屋を間違えたんだよ）

と、あわてて出ようとした時、紙帳の裾から、白い、細い手が出て……、

「あれ！」

しかし、お浦は、紙帳の中へ引き込まれた。

附近ちかくの農家で飼つていると見え、家にわとく鶏の啼き声が聞こえて来た。

部屋の中も、紙帳の中も静かであつた。

紙帳は、闇の中に、経帷きようかたびら子のように、気味悪く、薄白く、じつと垂れている。

家鶏とりの啼いた方角から、今度は、犬の吠え声が聞こえて来た。祭礼の夜である、夜盗さすまよなどの彷徨さまよう筈はない、参詣さんぎ帰りの人が、遅く、その辺を通るからであろう。

やがて、燧石いしを切る音が、紙帳の中から聞こえて来、すぐにボツと薄黄いろい燈ひのひかり火が、紙帳の内側から射して来た。

さてここは紙帳の内部なかである。――

唐草の三揃いの寝具に埋もれて、お浦が寝ていた。夜具の襟が、頤の下まで掛かつて、濃化粧をしている彼女の顔が、人形の首かのように、浮き上がって見えていた。眼は細く開いていて、瞳うわまぶたが上瞼かみそりに隠され、白眼ばかりが、水気を帯びた剃刀みの刀身かみそりかのように、凄く鋭く輝いて見えた。呼吸をしている証拠として、額から、高い鼻の脇を通して、頬にかかつている後れ毛おくが、揺れていた。しかし尋常の睡眠ねむりとは思われなかつた。気を失っているのらしい。

そのお浦の横に、夜具から離れ、畳の上に、膝を揃え、端然と、五味左門が坐っていた。

ふと手を上げて鬢びんの毛を撫でたが、その手を下ろすと、ゆるやかに胸へ組み、

「蜘蛛くもはただ網を張っているだけだ」と、呟いた。

「その網へかかる蝶や蜂は……蝶や蜂が不注意わづらひからだ」

と、また、彼は呟いた。

ひとりごと
独言を云うその口は、残忍と酷薄とを現わしているかのように薄く、色も、赤味な

どなく、薄墨のように黒かった。

それにしても、紙帳に近寄る男は斬り、紙帳に近寄る女は虐遇さいなむという、この左門の残

忍性は、何から来ているのであろう？

紙帳生活から来ているのであつた。

彼の父左衛門は、生前、春、秋、冬を、その中に住み、夏は紙帳きれを畳んで蒲団の上に敷き、寝莫塵代りにしたが、左門も、春、秋、冬をその中に住み、夏は寝莫塵代りに、その上へ寝た。そういうことをすることによつて、亡父ちちの悩みや悶えを体得したかつたのである。そう、彼の父左衛門は、紙帳に起き伏ししながら、天国の剣を奪われて以来衰えた家運について、悩み悶えたのであつた。……しかるに左門は、紙帳の中で起き伏しするようになってから、だんだん一本気いっぴきとなり、狭量せうりやうとなり、残忍殺伐じんにころとなった。何故だろう？

狭い紙帳を天地とし、外界そとと絶ち、他を排し、自分一人だけで生活くらすようになったからである。そういう生活は孤独生活であり、孤独生活が極まれば、憂鬱となり絶望的となる。

その果ては、気の弱い者なら自殺に走り、気の強いものなら、鬱積している気持ち、突発的に爆発させて、兇暴の行為をするようになる。左門の場合はその後者で、無意味といいたいほどにも人を斬り、残忍性を発揮するのであった。

「突然はいつて来たこの女は？ ……」

呟き呟き彼は、女の寝顔を見た。その眼は、疋しんにゆうの最後の一面を、眉の下へ置いたかのように、長く、細く、尻刎ねしていた。

「これは何んだ？」と、女の枕もとに転がっている、白い風呂敷包みの、長方形の物へ眼を移した時、彼は呟いた。やがて彼は手を延ばし、風呂敷包みを引き寄せ、包みを解いた。白木の刀箱が現われた。箱の表には、天国と書いてある。

「天国？」

彼は、魘うなされたような声で呟いた。瞬間に、額こそ秀でていいるが、顛こめかみ顛かみの低い、頬の削けた、鼻が鳥の嘴くちばしのように鋭く高い、蒼白の顔色の、長目の彼の顔が、注した血で、燃えるように赧かくなつた。烈しい感動を受けたからである。

「天国？」

彼の肩がまず顫え、その顫えが、だんだんに全身へ伝わって行った。

「天国？ ……まさか！」

にわかには、彼は口を歪め、眼尻へ皺を寄せた。嘲笑ったのである。

「まさか、こんな所に天国が！」

しかも彼の眼は、刀箱の箱書きの文字に食い付いているのであった。

彼が天国の剣に焦がれているのは、親譲りであった。彼の父、左衛門は、生前彼へこう云った。「我が家には、先祖から伝わった天国の剣があつたのじゃ。それを今から二十年前、来栖勘兵衛、有賀又兵衛という、浪人の一党に襲われ、奪われた。……どうともして探し出して、取り返したいものだ」と。——その左衛門が、自殺の直後、悴左門へ宛てて認めた遺書には、万難を排して天国を探し出し、伊東忠右衛門一族に示せよとあつた。父の敵として忠右衛門を討ち取り、父の形見として紙帳を乞い受け、故郷を出た左門が、日本の津々浦々を巡っているのも、天国を探し出そうためであつた。その天国がここにあるのである。

「信じられない！」

彼はまた驚されたような声で云った。そうであろう、蜘蛛の網にかかった蝶のように、紙帳の中へはいって来た、名さえ、素姓さえ知らぬ女が、天下の至宝、劍の王たる、天国を持つていたのであるから。

「……しかし、もしや、これが本当に天国なら……」

それでいて彼は、早速には、刀箱の蓋ふたを開けようとはしなかった。開けて、中身を取り出して見て、それが贗物にせものであると証明された時の失望！ それを思うと、手が出せないのであった。まさか！ と思いつながら、もし天国であつたなら、どんなに嬉しかろう！ この一縷ゆるの希望を持つて、左門は、尚も刀箱を見据えているのであった。

「これが天国なら、この天国で、伊東頼母めを返り討ちに！」

また、呻うめくように云った。

恩讐壁一重

彼は、故郷くにからの音信たよりで、忠右衛門の悴せむしの頼母が、自分を父の敵だと云い、復讐の旅へ出たということを知った。彼は冷笑し、（討ちに来るがよい、返り討ちにしてやるばかり

だ）とその時思った。そうして現在いまでは、天国を求める旅のついでに、こつちから頼母を探し出し、討ち取ろうと心掛けていたのであった。

正氣かえに甦ると見えて、お浦が動き出した。肉附きのよい、ムツチリとした腕を、二本ながら、夜具から脱ぎ、敷き布団の外へ抛り出した。

と、左門は、刀箱を掴んだが、素早く、自分の背後へ隠し、その手で、膝脇の自分の刀を取り上げた。女が正氣に返り、騒ぎ出したら、一討ちにするつもりらしい。武道で鍛えあげた彼の体は、脂肪あぶらも贅ぜい肉にくも取れて、痩せすぎるほどに痩せていた。それでいて硬くはなく、撓しないようなほどにも軟らかく見えた。そういう彼が、左の手に刀を持ち、それを畳の上へ突き及び腰をし、長く頸を延ばし、上からお浦を覗き込んでいる姿は、昆虫——蜘蛛が、それを見守っているようであった。紙帳の中へ引き入れられてある行燈あんどんの、薄黄いろい光は、そういう男女を照らしていたが、男女を蔽うている紙帳をも照らしていた。内部うちから見たこの紙帳の気味悪さ！ 血蜘蛛の胴体どうは、厚味を持って、紙帳の面に張り付いていた。左衛門が投げ付けた腸はらわたの、皮や肉が、張り付いたままで凝結こどつたからであった。それにしても、蜘蛛の網が、何んとその領分を拡大ひろめたことであろう！ 紙帳の天井にさえ張り渡されてあるではないか。血飛沫ちしぶきによって作られた網が！ 思うにそれは、先夜、

飯塚薪左衛門の屋敷で、左門によつて討たれた浪人の血と、片足を斬り取られた浪人の血によつて、新規あらたに編まれた網らしく、血の色は、赤味を失わないで、今にも、糸のように細い滴しずくを、二人の男女ものへ、したたらせはしまいかと思われた。

お浦は、夜具からはみ出した腕を、宙へ上げ、何かを探すような素振りをしたが、
「頼母様！ 天国様を持つて参りました！」

と叫んだ。もちろん、夢中で叫んだのである。

その頼母は、ずっと以前まえから、壁一重へだてた隣りの部屋へやに、お浦を待ちながら、肅然と坐り、「一刀齋先生剣法書」を、膝の上へ載せ、行燈の光で、読んでいた。

下婢おんなの敷いて行つた寝具よるのものは、彼の手で畳まれ、部屋の片隅に置かれてあつた。女を待つに寝ていてはと、彼の潔癖性が、そうさせたものらしい。前髪を立てた、艶々しい髪に包まれた、美玉のような彼の顔は、淡く燈火の光を受けて、刻ほりを深くし、彫刻のような端麗さを見せていた。

「事ノ利ト云フハ、我一ヲ以テ敵ノ二ニ応ズル所也。譬バ、撃チテ請ケ、外シテ斬ル。是レ一ヲ以テ二ニ応ズル事也。請ケテ打チ、外シテ斬ルハ、一八一、二八二ニ応ズル事也。」

一ヲ以テニニ応ズル時ハ必ず勝ツ」

彼は口の中で読んで行った。

(すなわち、積極的に出れば必ず勝つということなのだ)

彼は、本来が学究的の性格だったので、剣道を修めるにも、道場へ通って、竹刀しなひや木刀で打ち合うことだけでは満足しないで、沢庵禅師の「不動智」とか、宮本武蔵の「五輪の書」とか、そういう聖賢や名人の著書をひもと繙くことによつて、研究を進めた。今、「一刀齋先生剣法書」を読んでいるのもそのためであつた。

(積極的に出れば必ず勝つということだな……少なくとも、五味左門と出合った時には、この法で、この意気で、立ち合わなければならぬ)

(お浦はどうしたものであろう?)

頼母は、「一刀齋先生剣法書」から眼を放し、考えた。

さつき、縁側で人の気配がしたので、それかと思つたところ、隣りの部屋の襖が開き、そこへはいつて行つたらしく、音沙汰なくなつた。その後は、人の来る様子もなかつた。

(浮気者らしかつたお浦、俺のことなど忘れてしまったのかも知れない)

時が経つて行つた。寝静まつている旅籠はたごからは、何んの物音も聞こえて来なかつた。

立ち向かった左門と頼母

突然、隣りの部屋から、女の叫び声の聞こえて来たのは、さらにそれからしばらく経つた後のことであつた。（はてな？）と頼母は耳を澄ました。（変だ！）……というのは、その女の叫び声が「頼母様！」と聞こえ、「天国様を」と聞こえたからであつた。しかしそれだけで、後は聞こえて来なかつた。

（空耳だつたかな）

そのくせ頼母は、傍^{かたわ}らの刀を掴み、立ち上がった。襖をあげて縁側へ出た。すぐ眼にはいったのは、月光で、霜でも降つたように見える広い中庭と、中庭を距^{へだ}てて立っている母屋^{もや}とであつた。縁側を左の方へ数歩あゆめば隣り部屋の前へ行けた。そこで頼母は足音を忍ばせ、隣り部屋の前まで行き、また、耳を澄ました。たしかに人のいる気配はあつたが、声は聞こえなかつた。

（これからどうしたものだろう？）

不躰^{ぶしつ}けに襖をあげることは出来なかつた。とはいえ、女の声で、自分の名を呼び、天国

様をと云つたからには、——空耳でないとして——声の主を確かめたかった。

(まさかお浦が、こんな部屋へ来ていようとは思われないが……)

しかし……いや、しかし何も無い、声の主を確かめさえすればよいのだ！ ……しかし、それをするには、やっぱり襖をあげなければ……。

(咎められたら、部屋を間違えたと言えばよい)

頼母は、わざと無造作に襖をあげた。

「あッ」

声と一緒に、ほとんど夢中で、頼母は、庭へ飛び下り、これも夢中で抜いた刀を、中段に構え、切つ先越しに、部屋の中を覗んだ。

見誤りではなかった。帳内で灯っている燈の光で、橙黄色に見える紙帳が、武士の姿を朦朧と、その紙面へ映し、暗い部屋の中に懸かっている。

(林の中に釣つてあつた紙帳だ。では、あの中にいる武士は、五味左門に相違ない。……先夜は、知らぬこととはいえ、同じ飯塚薪左衛門殿の屋敷へ泊まり合わせ、今夜は、同じこの旅籠の、しかも壁一重へだてた部屋に泊まり合わせようとは)

運命の不思議さ気味悪さに、頼母は、一瞬間茫然としたが、

(左門は親の敵、あくまで討ち取らなければならぬのであるが、あの凄腕前では……) 体の顫えを覚えるのであった。

しかし彼にとつて、一抹の疑惑があった。紙帳は、左門ばかりが釣つていとは限らない。紙帳の中の武士は、左門ではないかもしれない……。

(何んといつて声をかけたらよかろうか?)

彼はしばらく紙帳を睨んで躊躇った。

紙帳は、そういう彼を、嘲笑うかのように、そよぎもしないで垂れている。

「卒爾ながら、紙帳の中のお方にお訊ね致す」

と、とうとう頼母は、少し強^{こわ}ばつた声で云つた。

「貴殿、先夜、飯塚薪左衛門殿の屋敷へ、お泊まりではなかったかな」

こう云つてから、これはいいことを訊いたと思つた。泊まったといえ、紙帳の中の武士は、五味左門に相違ないからであつた。何故というに、左門は、先夜、自分の本名^{なの}を宣つて、薪左衛門の屋敷へ泊まったということであるから。

しかし紙帳の中からは、返辞がなく、紙帳に映っている人影も、動かなかつた。

頼母は焦心^{あせり}を感じて来た。それで、ジリジリと、縁側の方へ歩み寄りながら、

「貴殿はもしや、五味左門と仰せられるお方ではござらぬかな？」と訊いた。すると、ようやく、紙帳に映っている人影が動き、しわが唸れた声で、

「そう云われる貴殿は、どなたでござるかな？」

と訊き返した。

「拙者は……」

と、頼母は云ったが、当惑した。本名を宣るものだろうか、それとも、偽名を使ったものだろうか？

（相手が五味左門なら、当然宣りかけて討ち取らなければならないし、もしかた人違いなら、無断に襖をあけ、抜き身をさえ構えて誰すいか何した無礼を、これまた、本名を宣って詫びなければならぬのだから……）

頼母は、本名を宣ることにした。

「拙者ことは、伊東頼母と申し、隣りの部屋へ泊まり合わせたものでござる」

俄然騒動が起こった。

「おお頼母様でございますか！ 妾わたしはお浦でございます！ ……部屋を取り違えて……」
という声が、紙帳の中から起こり、すぐに、女の立ち上がる影法師が、紙帳の面へ映っ

た。が、それは一瞬間で、たちまち悲鳴が起こり、女の姿が仆れるのが見え、つづいて燈火が消え、部屋の中、ぼんやりと白く紙帳ばかりが残った。

しかし、やがて、紙帳の裾が、鉄漿おはぐろをつけた口のようにワングリと開き、そこから、穴から出る爬虫類ながむしかのように、瘦せた身長せいせいの高い武士が出て来た。刀をひっさげた左門であつた。左門は、縁先まで一氣に出、その氣勢に圧せられ、後へ退り、抜き身を構えている頼母を睨にらんだが、

「貴殿が伊東頼母殿か、拙者は五味左門、巡り逢いたく思いながら、これまでは縁なくて逢いませなんだが、天運拙つたなからず今宵逢い申したな。本懐！……貴殿にとつては拙者は、父の敵でござろうが、拙者にとつても貴殿は、父の敵の嫡宗ちやくそう、恨みうらみがござる！ 果たし合いましよぞ！」

と、例の、噎れた、陰湿とした声で云つた。

難劍「逆ノ脇」

左門は急に驚いたように、

「貴殿とは、今宵が初対面と思いましたが、そうではござらぬな。過ぐる夜拙者、道了塚のほとりの、林の中で野宿をいたし、通りかかりのお武家呼び止め、腰の物拝見を乞いましたところ、拒絶ことわられ、やむを得ず、一当てあてて……フツフツ、若衆武士殿を気絶させましたが、どうやらそれが貴殿らしい。……頼母殿、さようでござろう」

痛いところへさわられた頼母は、赤面し、切齒し、黙っていた。しかし彼には左門が気味悪く思われてならなかった。黒く大きく立っている離座敷はなれ、——壁と襖とは灰白はいしろかつたが、その襖の開いている左門の部屋は、洞窟ほらの口のように黒く、そこに釣つてある紙帳は、これまた灰白く、寝棺のように見え、それらの物像ものを背後うしろにして、痩せた、身長せいの高たかい左門が、左手に刀を持ち、その拳を腰の上へあて、右手の拳も腰の上へあて、昆虫むしが飛び足を張つたような形で、落ち着きはらつて立っている姿は、全く気味悪いものであつた。左門は云いつづけた。

「ところで、先刻さきほど、一人の女子が、拙者の巢へ——寝所へ、迷い込んでござる。美しい女子ではあり、先方から参つたものではありして、拙者、遠慮いたわなく、労り、介抱いたわいたし……女子も満足まんじくいたしたかして眠つてござる。……しかるにその女子、貴殿が姓名を宣のたまはれるや、眼覚め、叫なびましたのう。『頼母様でございますか、妾はお浦でございます。……

部屋を取り違えてこんな目に』と。……さては、お浦という女子、貴殿の恋人そうな。……
 ……気の毒や、拙者、貴殿の恋人を……」

ここで左門は例の含み笑いをしたが、

「それにいたしても、不思議のことがござったよ。……そのお浦という女子、天国の剣を所持し参ったことじゃ。……おお、そうそう、そういえば、そのお浦儀、夢の中で『頼母様、天国様を持つて参りました』と叫びましたっけ。……さては、貴殿へお渡ししようため、天国を持参したものと見える。……今もお浦儀、その天国を、大事そうに抱いて寝てゐる」

こう云つて来て左門は、お浦がああ叫んで立ち上がったところを、一当てあてて気絶させ、気絶したお浦が、刀箱の上へ仆れた姿を、脳裡へ描き出した。

「天国の剣を欲しがるは拙者で、貴殿ではない筈。その理由は申すまでもござるまい。……拙者といたしては、天国の剣をもつて、貴殿はじめ、伊東家の一族を、族滅ぞくめついたしたのでござる。……とはいえ、ああまで大切そうに、お浦殿が抱きしめている天国を、もぎ取るも気の毒。では、この関ノ孫六で、貴殿の息の根を止めることと致そう。行くぞーッ」

と叫んだ時には、左門は庭へ飛び下りてい、関ノ孫六は引き抜かれていた。

ハーツとばかりに呼吸を呑み、思わず数歩飛び退いた頼母は、相手の構えを睨んだ。何んと、左門の刀身が見えないではないか！ 見えているものは、肩から、左の胴まで湾曲している右の腕と、踏み出している右足とであった。そう、そういう姿勢で、ノビノビと立っている左門の体であった。

（何んという構えだ！ おお何んという構えだ！）

頼母は、怯えた心でこう思った。（あれが反対なら、脇構えなのだが）

そう、刀を自分の右脇に取り、切っ先を背後にし、斜め下にし、刀身を相手に見えないようにし、左足を一步踏み出したならば、五法の構えの一つ、脇構えになるのであるが、左門の構えは、反対なのであった。

（では反対の脇構え——「逆ノ脇」なのであろうか？）

それにしても、あの構えは、どう変化することであろう？ こっちが、彼奴の真つ向へ斬り込んだならば、それより先に、彼奴は、背後に隠している刀で、こっちの胴を払うかもしれない。こっちから相手の胴へ斬り込んだならば？ それより先に、相手は、こっちの頸へ、刀を飛ばせるかもしれない。突いて出たならば？ 払い上げて、胸を突くだろう

！ どう変化するか解らない隠された刀の恐ろしさ！

紙帳を巡って

左門に逢ったなら「我の一を以つて敵の二に応じ」よう。すなわち、攻撃的に出て、機先を制しようなどと考えていた頼母は、相手の構えを見ただけで、萎縮してしまった。しかし、心中の怒りは、その反対に昂たかまった。恋人などではないお浦が、どう左門に扱われようと、意に介するところではなかったが、しかし、左門が、お浦をこの身の恋人と解し、その恋人を……そうしてこの身を嘲笑していることが、怒りに堪えなかった。天国を左門に取られたことも、鬱うつぶん忿ぶんであった。自分の手へ渡ったなら、打ち砕くべき天国なので、刀そのものに執着があるのではなかったが、左門の手へ渡ったとあっては、自分の父忠右衛門の、天国不存在説が、あまりにもハッキリと破壊されたことになる。鬱うつぶん忿ぶんを感じざるを得なかった。

（父の敵、自分の怨み、おのれ汝左門、討たいで置こうか！）

怒りは頼母を狂気させた。

しかし左門の凄さ！

(どうしよう?)

この時、忽然と思ひ出されたは、やはり伊藤一刀齋の、劍道の極意を詠った和歌であった。

(切り結ぶ太刀の下こそ地獄なれ身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ。……そうだ、身を捨ててこそ!)

頼母は猛然と斬り込んだ。

と、その瞬間、左門は、水の引くように、滑らかに後へ退いた。

(逃げるぞ!)

頼母は驚喜した。自分の氣勢に恐れて、左門が逃げたと思つたからであつた。頼母は追つた。

何んたる軽捷! 左門は、背後ざまに縁の上へ躍り上がった。構えは? 依然として逆ノ脇! そこへ柳が生えたかのように、嫺かに、少し傾き、縁先まで追つて来た頼母を見下ろしている。危ないかな頼母! 左門の、例の、肩から左胸まで柔らかに湾曲している腕が延び、その手に握られて、背後ざまに隠されている刀が、電光のように閃めき出

た時、お前の脳天は、鼻から頤まで、切り割られるのを知らないのか！

それにしても左門は、何んのために縁まで退いたのであろう？ 暗い部屋の中の、灰白い紙帳を背後にして立っている左門が、心の中で叫んでいる声を聞いたなら、その理由を知ることが出来よう。

「父上よ父上よ、あなたを辱^{はず}かしめ、あなたを憤死させました、忠右衛門の忤頼母めを、今こそ討ち取りまして、父上の怨みの残りおります紙帳へ、その血を注ぐでございましょう。止どめは、天国の剣で致しまする」

つまり左門は、頼母の血を、亡父の怨恨^{うらみ}の残っている紙帳へ注いでやろうと、紙帳間近まで、頼母を誘^{おび}き寄せて来たのであった。

そうと知らない頼母は不幸であった。自分の氣勢に圧せられて逃げる左門、たかが知れている！ もう一息だ！ こう思った頼母は不幸であった。

微塵^{みじん}になれ！ と、頼母は、縁へ躍り上がり、斬り付けた。

「あッ」

左門の姿が消え、眼前に紙帳が、風に煽^{あお}られたかのように、戦^{そよ}いでいた。

(部屋の中へ逃げ込んだのだな)

頼母は突嗟とつさに思った。

(紙帳の中へはいった筈はない。……では、背後に?)

さすがに用心をし、頼母はソロソロと部屋の中へはいって行った。敷居を跨またぎ左右を見た。正面三、四尺の間隔へだたりを置いて、紙帳が釣つてあり、その左右は闇であり、闇の彼方あなたには、部屋の壁が立っている筈であった。……左門の姿はどこにも見えなかった。

(紙帳の背後に隠れているのか、それとも、左右どつちかの、紙帳の横手に、身をひそめているのか?)

頼母は、紙帳を巡って、敵を討とうと決心しながらも、右へ行こうか、左へ行こうかと迷った。しかしとうとう、左手へ心を配りながら、右の方へ進んだ。紙帳の角がすぐ前にあった。角の向こう側に、左門が隠れているかもしれない。頼母は、やにわに刀を突き出して見た。闇を突いたばかりであった。額に、冷たい汗を覚えながら、頼母はホツと息を洩らし、紙帳の角まで進んだ。前方むこうを睨んだ。部屋の壁と、紙帳の側面とで出来ている空間が、ただ、暗く細長く見えるばかりで、敵の姿は見えなかった。頼母は、ソロソロと進んだ。すぐに、紙帳の二つ目の角まで来た。

頼母の足は動かなくなつた。(あの角の向こう側にこそ) こう思うと、居縮いすくむのであつ

た。ほんのさつきまで、左門など何者ぞと、氣負い込んでいた彼の自信も勇氣も、今は消えてしまった。技倆うでの相違がそうさせるのであり、十畳敷きほどの狭いこの部屋の中に、恐ろしい相手が確かにおりながら、その姿が見えないということが、そうさせるのであった。

(どうしたものか?)

この時、靈感のようなものが心に閃めいた。

頼母はやにわに刀を空に揮ふるつた。紙帳の釣り手を切つたのである。紙帳の一角が、すぐに崩れ出した。やわやわと撓たわみ、つづいて沈み、方形であつた紙帳が、三角の形となつて、暗い中に懸かつて見えた。しかし、左門の姿は見えなかつた。三つ目の紙帳の角へ来て、その釣り手を切つた時にも、左門の姿は見えなかつた。紙帳は今や、二つの釣り手を切られ、庭に面した残りの二筋の釣り手によつて、掲げられているばかりとなり、開けられてある襖を通し、中庭が見えていた。

(左門の隠れ場所が解つた。紙帳の四つ目の角の蔭だ) 頼母はこう思った。

左門はたして何処いずこ

それに相違なかるうではないか。頼母は、部屋へはいるや、右手へ進み、第一、第二、第三、と、三つまで、紙帳の角を通つたのであつた。しかも、左門はいなかつた。では、残つた、最後の紙帳の四つ目の角の向こう側に、おそらく膝を折り敷き、刀を例の逆ノ脇に構え、豹のような眼をして、狙つているに相違ないではないか。

こう思うと頼母は、また新たに恐怖を感じたが、刀を中段にヒタとつけ、その角を睨み、様子をうかがつた。

ところが、これより少し以前から、母屋に近い中庭に、二つの人影があつて、こつちを眺め、囁いていた。

角右衛門と紋太郎とであつた。

さつきから中庭で、人の云い争うような声が聞こえた。そこは五郎蔵一家の用心棒である二人であつた。身内同士間違ひを起こしたのではあるまいかと、二人して寝所から脱け出し、様子を見に来たところ、向こう側の離座敷の襖が開いて、紙帳の釣つてあるのが見えた。

「紙帳だーッ」

「うむ、紙帳が！」

二人ながら呻くように云った。

先夜、飯塚薪左衛門の屋敷で、紙帳の中の武士に、同僚二人を討たれたことを思い出したからである。

と、紙帳の釣り手が、次々に二カ所まで切られたのが見えた。

(何か事件が起こっている) と、二人ながら思った。

「小林氏」と、角右衛門は、汗を額へ産みながら、「これは、あの時の武士らしゅうござるぞ」

「さよう」と、紋太郎は、若年だけに、一層怯え、地に敷かれている影法師が揺れるほどに顛えながら、「其奴がまた誰かを……どっちみち、あの部屋で切り合いが……」

「彼奴とすれば同僚の敵、……討ち取らいでは……と云って、あの凄い剣技では……こりやア親分にお話しして……」

「乾児衆にも……」

「うむ。……では貴殿……」

「心得てござる……」

と、紋太郎は、母屋の縁へ駈け上がり、五郎蔵一家の寝ている、奥座敷の方へ走って行った。

それを見送ろうともせず、怯えた眼で、角右衛門は、紙帳ばかりを見ていた。

と、また、釣り手が一筋切られた。

切ったのは頼母であった。

頼母は、あるいは左門が、最初の位置から身を移し、紙帳の、第一の角の背後に隠れていようもしれぬと思ひ、ソロソロと紙帳の裾を巡り、引き返し、真つ先に自分が曲がった紙帳の角まで近付き、釣り手を切つて落としたのであった。

「出る！ 左門！」

と頼母は叫んだ。しかし、叫んだものの、飛びかかつて行こうとはせず、反対に、飛び退くと、部屋の背後の壁へ背をもたせ、刀を、例の中段に構え、眼前を睨んだ。

釣り手を切られた紙帳の角は、やわやわと撓み、やがて崩れ、今は一筋の釣り手に掲げられている紙帳は、^{しぼ}凋んだ朝顔の花を、^{さか}逆さに懸けたような形に、斜面をなして懸かっていた。

左門の姿は見えなかった。

いよいよ左門の居場所は確実に解った。やはり、最後に残った釣り手の背後——釣り手の角の背後にいたのであった。

その方へグツと切つ先を差し付け、頼母は息を吐いた。

さよう、左門はその位置に、片膝を敷き、片膝を立て、刀を逆ノ脇に構え、最初から現在まで、寂然と潜んでいたのであった。一方は、隣り部屋と境いをなしている壁であり、一方は、閉めのこされてある襖であり、正面は紙帳である。——この三つのものによって、濃い闇を作っているこの場所は、何んと身を隠すに屈竟な所であろう。

彼は、頼母が、自分の方へは来ないで、反対の方へ進み、紙帳の釣り手を、次々に切つておとすのを見ていた。走りかかり、背後から、一刀に斬り斃すことは、彼にとつては何んでもないことであつた。しかし、彼はそれをしなかつた。何故だろう？ 蜘蛛が、自分の張つた網へ、蝶が引つかかろうとするのを、網の片隅に蹲居りながら、ムズムズするような残忍な喜悦をもつて、じつと眺めている。——それと同じ心理を、左門が持っているからであつた。

まだ彼は動かなかつた。

しかし彼には、紙帳の彼方に、刀を構え、斬り込もうと斬り込もうとしながらも、こつち

の無言の気合いに圧せられ、金縛りのようになってい、頼母の姿が、心眼に映じていた。彼は、姿を見せずに、気合いだけで、ジリジリと、相手の精神を疲労れさせているのであつた。

斬り下ろした左門

神気の疲労が極点に達した時、相手は自然に仆れるか、自暴自棄に斬りかかつて来るか、二つに一つに出ることは解っていた。そこを目掛け、ただ一刀に仕止めてやろう。――これが左門の狙いどころなのであつた。

彼の観察は狂わなかつた。頼母は、凋んだ朝顔を逆さに懸けたような形の紙帳の、その萼にあたる辺を睨み、依然として刀を構えていたが、次第に神気が衰え、刀持つ手にしこりが来、全身に汗が流れ、五体に顫えが起こり、眼が眩みだして来た。……と、不意に一足ヒョロリと前へ出た。蝦蟇が大きく引く呼吸をするや、空を舞っている蠅が、弾丸のようその口の中へ飛び込んで行くであろう。ちょうどそのように、頼母は、眼に見えない左門の気合いに誘引せられたのであつた。ハツと気付いた頼母は、背後へ引いた。が、

次の瞬間には、ヒヨロヒヨロと、もう二足前へ誘きだされていた。

猛然と頼母は決心した。

(身を捨ててこそ！)

畳の上に敷かれてある紙帳を踏み、例の蓐にあたる一点を目ざし、真一文字に突っ込んだ。

グンニヤリとした軟らかい物を蹠あしうらに感じた。蓐が崩れ落ちた。一筋の釣り手が、切つて落とされたのである。その背後へ、巨大な丸太がノシ上がった。自分で釣り手を切つて落とし、その刀を上段に振り冠り、左門が突つ立つたのであった。闇の夜空を縦に突ん裂く電光の凄さを見よ！ 左門は斬り下ろした！ 悲鳴が上がって頼母の体が紙帳の上へ仆れた。しかし悲鳴は女の声であった。斬り損じた刀を取り直し、再度頭上へ振り冠った左門の足もとを、坂を転がり落ちる丸太のように、頼母の体が転がり、縁側の方へ移って行った。紙帳の中の、気絶しているお浦の体を踏んだのは、頼母にとっては天祐であった。それで彼は足を掬われて仆れ、左門の太刀を遁がれることが出来たのである。左門は、転がって逃げる頼母を追った。しかし縁まで走り出た時には、既に頼母は起き上がり、庭を走っていた。

「逃げるか、卑怯者、待て！」

左門は追い縋った。

喊ときのかえ声こえが起こつた。

十数人の人影が、抜き身を芒すすきの穂のように揃え、一団となり、庭を、こつちへ殺到して来ようとしていた。

五郎藏の乾兒こぶん達であつた。

その中から角右衛門の声が響いた。

「彼奴きやつこそ、先夜、飯塚殿の屋敷で、我々の同僚二人を、いわれなく討ち果たしました悪侍でござる！」

つづいて、紋太郎の声が響いた。

「我々同僚の敵かたき、お討ち取りくだされ！」

その人数の中へ、駈け込んで行く頼母の姿が見えた。

頼母の声が響いた。

「彼は五味左門と申し、拙者の実父忠右衛門を討ち取りましたる者、本日巡り逢いましたを幸い、復讐いたしたき所存……」

群の中には、松戸の五郎蔵もいた。寝巻姿ではあるが、長脇差しを引っ下げ、抜け上がっている額を月光に曝らし、左門の方を睨んでいた。

彼は、紋太郎によつて呼び立てられ、眼覚めるや、乾児たちと一緒に、庭へ出て来たのであった。彼は、来る間に、紋太郎から、紙帳武士のどういう素姓の者であるかを聞かされた。飯塚薪左衛門の屋敷で、角右衛門や紋太郎の同僚を、二人まで、いわれもないのに討ち果たした悪侍とのことであつた。しかし彼としては、その言葉を、どの程度まで信じてよいか解らなかつた。が、庭へ出て来て、前髪立ちの武士から、その武士が、親の敵だと叫ばれ、その武士が、前髪立ちの武士を追つて走つて来、自分たちの姿を見るや、刀を背後へ隠して下げ、右腕を左腕まで曲げて柄を握り、右足を踏み出した異様な構えで、全身から殺気を迸らせながら、しかも寂然と静まり返つて立った姿を見ると、容易ならぬ相手だと思ひ、いかさま、人など、平気で幾人でも殺す奴だろうと思つた。

「野郎ども」と五郎蔵は、乾児たちに向かつて怒鳴つた。「あの三ピンを、引つ包んで臆に刻んでしまえ！　しかし殺しちゃアいけねえ。止どめはお若衆に刺させろ！　やれ！」
 声に応じて乾児たちは、一本の杭を目差して、黒い潮が、四方から押し寄せて行くように、左門を目掛け、殺到した。

黒い潮が、渦巻き、沸き立つように見えた。飛沫が、水銀のように四方へ散った。――白刃が前後左右に閃めくのであった。数声悲鳴が起こった。渦潮は崩れ、一勢に引いた。杭は、わずかにその位置を変えたばかりで、同じ姿勢で立って、その前の地面に、三個の死骸が――波の引いた海上に、小さい黒い岩が残ったかのように、転がっていた。左門に斬られた五郎蔵の乾児たちであった。

子供を産む妖怪蜘蛛

五郎蔵は地団駄を踏み、いつか抜いた長脇差しを振り冠り、左門へ走りかかったが、にわかには足を止め、離座敷の方を眺めると、

「蜘蛛が！ 大蜘蛛が！」

と喚き、脇差しをダラリと下げてしまった。

畳数枚にもあたる巨大な白蜘蛛が、暗い洞窟の中から這い出すように、今、離座敷の、左門の部屋から、縁側の方へ這い出つつあった。背を高く円く持ち上げ、四本の足を引き摺るように動かし、やや角ばって見える胴体を、縦に横に動かし――だから、太い、深

い皺を全身に作り、それをウネウネと動かし、妖怪蜘蛛は、やがて縁から庭へ下りた。と、離座敷が作っている地上の陰影から、蜘蛛は、月の光の中へ出た。蜘蛛の白い体に、無数に附着^ついてる斑点^{まだら}は、五味左衛門の腸^{はらわた}によつて印^つけられた血の痕であり、その後、左門によつて、幾人かの人間が斬られ、その血が飛び散つて出来た斑点でもあつた。そうして、この巨大な妖怪蜘蛛は、紙帳なのであつた。では、四筋の釣り手を切られ、さつきまで、部屋の中に、ベツタリと伏し沈んでいた紙帳が、生命^{いのち}を得、自然と動き出し、歩き出して来たのであろうか？ 幾人かの男女が、その内外で、斬られ、殺されて、はずかしめられ、怨みの籠^{かご}つている紙帳である、それくらいの怪異は現わすかもしれない。

庭を歩いて行く紙帳蜘蛛は、やがて疲労^{つか}れたかのように、背を低めて地へ伏した。しかしすぐに立ち上がった。背が高く盛り上がった。と、それに引き絞られて、紙帳の四側面が内側へ窪み、切られ残りの釣り手の紐^{ひも}を持った四つの角が、そのためかえつて細まり、さながら四本の足かのようにになった。窪んだ箇所は黒い陰影を作り、隆起している角は骨のように白く見えた。紙帳蜘蛛は歩いて行く。と、蜘蛛は、地面へ、子供を産み落とした。彼が地面へ伏し沈み、やがて立つて歩き出したその後へ、長い、巾の小広い、爬虫類を—
—蛇^{くちなわ}を産み落としたのである。しかしそれは、黒繻^{くろじゆす}子と、紫縮緬とを腹合わせにした、

女帯であった。女帯は、地上に、とぐろを巻き尻尾しっぽにあたる辺を裏返し、その紫の縮緬の腹を見せていた。蜘蛛は、自分の影法師を地に敷きながら、庭を宛あてなく彷徨さまよって行った。と、また子供を産み落とした。紅裏をつけた、藍の小弁慶の、女物の小袖であった。蜘蛛は、庭の左手の方へ、這って行った。

やがて、母屋と離座敷はなれとの間の通路みちから、この旅籠はたご、武蔵屋の構外そとへ出ようとした。そうしてまたそこで、地上へ、血溜りのような物を——胴抜きの緋の長襦袢を産み落とした。三個の死骸を間に挟み、左門と向かい合い、隙があつたら斬り込もうと、刀を構えていた頼母も、その背後に、後見でもするように、引き添っていた五郎蔵も、刀を逆ノ脇に構え、頼母と向かい合っていた左門も、その左門を遠巻きにしていた五郎蔵の乾兒たちも、そうして、この中庭の騒動に眼を覚まし、母屋の縁や、庭の隅などに集まっていた、無数の泊まり客や、旅籠おんなの婢や番頭たちは、この、紙帳蜘蛛の怪異に胆を奪われ、咳一つ立てず、手足を強張こわばらせ、呼吸いきを呑んでいた。不意に、左門の口から、呻くような声が迸ったかと思うと、紙帳を追って走り出した。

「遁のがすな！」という、五郎蔵の、烈しい声が響いた。瞬間に、乾兒たちが、再度、四方から、左門へ斬りかかって行く姿が見えた。しかし左門が振り返りざま、宙へ刀を揮うや、

真つ先に進んでいた乾児の一人が、左右へ手を開き、持っていた刀を、氷柱のように落とし、反げざまに斃れた。

蜘蛛の姿は消えていた。

その蜘蛛が、しばらく経つて姿をあらわしたのは、武蔵屋から数町離れた、瀬の速い川の岸であつた。その岸を紙帳蜘蛛は、よろめきよろめき、喘ぎ喘ぎ、這つていた。でも、とうとう疲労れきつたのであろう、四足を縮め、胴体に深い皺を作り、ベタベタと地へ腹這つた。円く高く盛り上がつていた背も撓み、全体の相が角張り、蜘蛛というより、やはり、一張りの紙帳が、地面へ捨てられたような姿となつた。川面を渡つて、烈しく風が吹くからであつたが、紙帳は、瘻を起こしたかのように、顫えつづけた。と、不意に紙帳は寝返りを打つた。風が、その内部へ吹き込んだため、紙帳が一方へ傾き、ワングリと口を開けたのである。忽然、紙帳は、一間ほど舞い上がった。もうそれは蜘蛛ではなく、紙鳶であつた。巨大な、白地に斑点を持った紙鳶は、蒼々と月の光の漲っている空を飛んで、三間ほどの彼方へ落ちた。でも、また、すぐに、川風に煽られ、舞い上がり、藪や、小丘や、森や、林の点綴られている、そうして、麦畑や野菜畑が打ち続けている平野の方

へ、飛んで行つた。

怨恨上と下

最初、紙帳の舞い上がった地面に、一人の女が仆れていた。お浦であつた。水色の布きぬを腰に纏まとっているばかりの彼女は、水から上がった人魚のようであつた。

彼女は疲労つかれ果はてていた。左門によつて気絶させられたところ、頼母に踏まれて正氣まごころづいた、そこで彼女は夢中で遁にげがれようとした。が、彼女を蔽おほうている紙帳が、彼女にまつわり、中から出ることが出来なかつた。冷静に考えて、行動したならば、紙帳から脱のがれ出すことなど、何んでもなかつたのであろうが、次から次と——部屋の間違い、気絶、斬り合あひの叫喚さけび、次から次と起おこつて来た事件のため、さすがの彼女も心こころを顛倒てんとうさせていた。そのため、紙帳を冠かぶつたまま、無二無三に逃げ廻まわつたのである。体をもがくにつれて、帯や衣裳は脱ぬげて落ちた。

藻屑もくずのように振り乱した髪を背に懸かけ、長い頸うなじを延のびるだけ延のばし、円い肩から、豊かな背の肉を、弓形にくねらせ、片頬を地面へくっ付けたまま、今にも呼吸が切れそうなほ

ども、烈しく喘いでいるのであった。

(咽喉のどが乾く！ 水が飲みたい！)

彼女はこればかりを思っていた。

(川があるらしい、水の音がする)

この時まで、小脇に抱いていた天国の刀箱を、依然小脇に抱いたままで、彼女は川縁の方へ這つて行つた。

一方は宿の家並みで、雨戸をとぎした暗い家々が、数町の彼方あなたに立ち並んでおり、反対側は髪川で、速い瀬が、月の光を砕いて、銀箔を敷いたように駛はしつてい、その対岸に、今を盛りの桜の老樹が、並木をなして立ち並んでい、烈しい風に、吹雪のように花を散らし、花は、川を渡り、お浦の肉体の上へまで降つて来た。そうして、その桜並木の遙か彼方むこうの、斜面をなしている丘の上の、諏訪神社の辺りでは、火祭りの松たいまつ明の火が、数百も列をなし、蛭うねり、渦巻き、揉みに揉んでいるのが、火龍が荒れまわっているかのように見えた。

お浦は、やつと川縁まで這い寄つた。彼女は、崖の縁を越して、前の方へ腕を延ばした。すぐそこに川が流れているものと思つたかららしい。

(水が飲みたい、水を！)

しかし川は、彼女のいる川縁から、一丈ばかり下の方を流れていた。そうして、川縁から川までの崖は、中窪みに窪んでい、その真下は岩組であった。

その岩組の間に挟まり、腰から下を水に浸し、両手で岩に取り縋り、半死半生になっている男があった。渋江典膳であった。

彼は、この髪川の上流、竹藪の側で、お浦のため短刀で刺された上、川の中へ落とされた。女の力で刺したのと、衣裳の上からだつたのとで、傷は浅かった。しかし、川へ落ちた時、後脳を打ち、気絶した。でも、気絶したのは、典膳にとっては幸運だった。水を飲まなかった。その典膳は、ここまで流されて来、この岩組の間に挟まり、長い間浮いているうちに蘇生した。蘇生はしたが、衰弱しきっている彼は、川から這い上がることを出来なかった。助けを呼ぶにも、声さえ出なかった。彼はただ、岩に取り縋っているだけで精一杯であった。

彼の心は、五郎蔵とお浦とに対する、怒りと怨みとで一杯であった。

（彼奴ら二人に復讐する**きやつ**ためばかりにも、生き抜いてやらなけりやア）

こう思っているのであった。

（昔の同志、同じ浪人組の仲間を、頭分たる彼奴が、女を使って殺そうとしたとは！ 卑

怯な奴、義理も人情も知らない奴！ ……そっちがその気なら、こっちもこっち、彼奴の素姓をあば発ぎ、その筋へ訴え出てやろう。即座に縛り首だ！ 五郎蔵め、思い知るがいい！ ……お浦もお浦だ、女の分際で、色仕掛けで俺をたばか騙り、殺そうとは！ どうともして引つ捕らえ、なぶ騙り殺しにしてやらなけりやア！

川から上がりた、水から出たいと、彼は縫っている手に力をこめ、岩を這い上がろうとした。しかし、腰から下を浸している水の、何んと粘つくく、もち糺かのように感じられることか！ どうにも水切りすることが出来ないのであった。

と、その時、頭上から、つちくれ土塊と一緒に、何物か崖をすべ這って落ちて来、岩に当たり、かす幽かな音を立て、水へ落ちた。

典膳は、水面を見た。細い長い木箱はこが、月光で銀箔のように光っている水に浮いて、二度漂い廻ったが、やがて下流の方へ流れて行った。

典膳は、崖の上を振り仰いだ。

なまなま生々

々と白く、肥えて円い、女の腕が、長く延びて差し出されてい、指が、何かを求めるように、閉じたり開いたりしていた。

「あ」

と、典膳は、思わず声を上げた。意外だったからである。しかし、次の瞬間には、誰か、女が、この身を助けよう、引き上げようとして、手を差し出してくれたのだと思った。

「お助けくださいまするか、忝かたじけのうござる。生々しやうじやうよよ世々よよ、ご恩に着まするぞ」

と、典膳は、咽喉のどにこびりついて容易に出ない声を絞って云い、一気に勇気を出し、川から岩の上へ這い上がった。

葉の恋心

腕の主はいうまでもなくお浦で、お浦は、この期ごになっても、恋しい男の頼母へ渡そうと、抱えていた天国の刀箱を、不覚にも川の中へ落としたので驚き、延ばしている腕を一層延ばし、思わず指を蠢うごめかしたのであった。その時彼女は、崖下から、人声らしいもの、聞こえて来るのを聞いた。彼女は狂喜し、地を摺って進み、肩と胸とを、崖縁からはみ出させ、崩れた髪で、額縁のように包んだ顔を覗かせ、崖下を見下ろし、

「もし、どなたかおいででございますか。刀箱を落としましてございます。その辺にありはしますまいか？ ……あ、水が飲みたい！ 水を汲んでくださいまし」

典膳は、この時、もう岩の上に坐りこんでいたが、女の声を聞いても、耳に入れようとはせず、ただ、女の腕に縋り、それを手頼りに、崖の上へあがろうと、ひしと女の手を握った。

「お願いでございませす。この手を、グツとお引きくださいませ。それを力に、私、崖を上がるでございませす。ご女中、さ、グツとこの手を……」

お浦は、突然手を握られて、ハツとしたが、咽喉の渴きがいよいよ烈しくなつて来たので、握られた手を振り放そうとはせず、

「水を！　まず、水を！　……その後にお力になりませす。手をお引きいたすでございませす。……おお、水を！」

この二人を照らしているものは、練絹ねりぎぬで包んだような、朧おぼろの月であつた。

典膳は、やっと、ヒヨロヒヨロと立ち上がった。お浦の体は、いよいよ崖の方へはみ出した。

二人の顔はヒタと会つた。

「……………」

「……………」

鶉うがらす鳥が、川面を斜はすに翔けながら、啼こぼき声を零した。

こういう事件があつてから三日の日が経つた。

その三日目の朝、飯塚薪左衛門の娘の葉しおりは、屋敷を出て、郊外を彷徨さまよつた。さまよいながらも彼女の眼は、府中の方ばかりを眺めていた。連れんぎよう翹すももと李の花で囲まれた農家や、その裾を丈低い桃の花木で飾つた丘や、朝陽を受けて薄瑠璃色うすめいろに輝いている野川や、鶯う菜いすなや大根の葉に緑濃いろうどく彩色いろどられている畑などの彼方あなたに、一里の距離へだたりを置いて、府中の宿が、その黒つばい家並みを浮き出させていた。

(今日あたり頼母様にはお帰りあそばすかもしれない)

(いいえ、頼母様、是非お帰りあそばしてくださいまし)

山水のように澄んでいる眼には、愛情の熱が燃え、柘榴ざくろの蕾つぼみのように、謹ましく紅い唇には、思慕の艶おとめが光り、肌理きめ細かに、蒼いまでに白い皮膚には、憧憬あこがれの光沢つやさえ付き、恋を知つた処女おとめ葉の、おお何んとこの三日の間に、美しさを増し、なまめかしさを加えたことだろう！ 彼女は過ぐる夜、屋敷の中庭で、頼母と会つて以来、それまで、春をしらずに堅く閉ざしていた花の蕾はなびらが、一時に花はな弁びらを開き、色や馨かおりを悩ましいまでに発散はなす

ように、葉も、恋心を解放し、にわかには美しさを加えたのであった。

(妾の良人は頼母様の他にはない)

処女の一本気が、恋となつた時、行きつくところはここであつた。まして葉のように、発狂している父親を看病し、老いたる僕や乳母や、荒々しい旅廻りの寄食浪人などばかりに圍繞かれ、陰鬱な屋敷に育つて来た者は、型の変つた箱入り娘といふべきであり、箱入り娘は、最初にぶつかつて来た異性に、全生涯を委かそうとするものであるにおいてをや。殊に相手が、若く、凜々しく、頼り甲斐のある、無双の美丈夫であるにおいてをや。

(頼母様、早くお帰りなされてくださりませ)

その頼母は、自分たち飯塚家に、わけても父薪左衛門に仇をする、松戸の五郎蔵という博徒の親分が、何故父親に仇をするのか、五郎蔵の本当の素姓は何か？ それを、自分たちのために探り知るべく、出かけて行つてくれたのであつた。

(頼母様、お会いしようございます。早くお帰りなされてくださいまし)

五郎蔵の素姓も、五郎蔵が、何故父親に仇をするのかをも、頼母の口から聞きたくはあつたが、しかしそれよりも、狂わしいまでに恋している処女は、ただひたむきに、恋人の顔が見たいのであつた。

髪川から、灌漑用に引かれている堰の縁には、葦や、紫雲英や、碇草やが、精巧な織り物を展べたように咲いてい、水面には、水馬が、小皺のような波紋を作つて泳いでい、底の泥には、泥鰌の這つた痕が、柔らかい紐のように付いていた。ことごとく春の景色であつた。

「おや」と呟いて、葉は、堰の縁へ、赤緒の草履の足を止めた。水面に、水藻をまとい、目高の群に囲まれながら、天国と箱書きのある刀箱が、浮いていたからである。

名刀天国

（天国といえ、氣を狂わせておられるお父様が、狂氣の中でも、何彼と仰せられておられた名劍の筈だが……）

それが、こんな堰に浮いているとは思議だと、葉は、しばらく刀箱を見ていたが、やがて蹲むと、刀箱を引き上げた。箱からしたたるビードロのような滴を切り、彼女は、両手で刀箱を支え、じつと見入つた。ゆかしい古代紫の絹の打ち紐で、箱は結えられていた。箱は、柁の細かい、桐の老木で作つたものであり、天国と書かれた書体も、墨色も、古く

雅みやびていた。

(ともかくもお父様へお目にかけて……)

その裾の辺りへ去年の枯れ草を茂らせ、ところどころ壁土を落とした築地ついで。鋳は錆び、瓦は破損いたみ、久しく開けないために、扉に干割れひわの見える大門。——こういうものに囲まれた彼女の屋敷は、廃屋の見本のようなものであったが、葉は、その大門の横の潜門くぐりをくぐって屋敷の中へはいつて行つた。

その葉が、しばらく経つた時には屋敷の奥の、古びた十畳ばかりの部屋に、父、薪左衛門と向かいあつて坐つていた。

葉は、膝の上の刀箱を、父の方へ差し出したが、

「ただ今お話し申し上げました、堰の水に浮いておりました刀箱は、これでございます。ご覧なさりませ、天国と、箱書きしてございます」

と云い、緞子どんすの厚い座布団の上へ坐り、蒔絵まきえの脇息へ倚っている、父親の顔を見た。

薪左衛門は、その卯の花のように白い総髪を、肩の上でユサリと揺り、おちつきなく、キョトキョト動く眼を、グツと据えたが、やっと咽喉から押し出したような嗄れ声で、

「十二、天国!? ……まことか! ……まことなりやお手柄、我ら助かる! 身の面目に

なる！」

と云つたが、突然、棚から陶器すえものが転げ落ちるような声で笑い出し、

「贗物にせものであろう、贗物であろう、贗物の天国、鑑定してやろうぞ！」

と、鉤のように曲がつている左右の指で、ムズと箱を掴んだ。紐が解かれ、蓋が開けられた。箱の底に沈んでいたのは、古錦欄の袋に入れられた白鞘の剣であつた。やがて鞘は払われ、刀身があらわれた。

薪左衛門は、狂人ながら、さすがは武士、白木の柄を両手に持ち、柄頭を丹田たんでんへ付け、銚子ぼし先を、斜はすに、両眼の間、ずっと彼方むこうに立て、ジツと刀身を見詰めた。立派であつた。

それにしても、この奥まった部屋の暗いことは！ 年中陽の光が射さないからであつた。それで、この部屋にあつて、鮮明あざやかに見えているものといえ、例の、卯の花のように白い薪左衛門の頭髪かみと、化粧を施さないでも、天性雪のように白い、葉の顔ばかりであつた。いや、もう一つあつた。薪左衛門によつて保持たもたれている天国の剣であつた。

おお、この「持つ人の善悪に關わらず、持つ人に福德を与う」とまで、云い伝えられている、日本最古の刀匠——大宝年中、大和やまとに住していた天国の作の、二尺三寸の刀身の、何んと、部屋の暗さの中に、煌々こうこうたる光を放していることか！ その刀身の姿は細く、

肌は板目で、女性を連想おもわせるほどに優美であり、鉞にえ多く、小乱れのだれ刃も見えていた。そうして、切っ先から、四寸ほど下がった刃あたりから、両刃もろはになつていた。何より心を搏たれることは、それが兇器の剣でありながら、微塵みじんも殺伐の気のないことで、剣というよりも、名玉を剣の形に延べた、気品の高い、匂うばかりに美しい、一つの物像ものかたちといわなければならぬことであつた。

「まあ」と、葉は、思わず感嘆の声を上げ、水仙の茎のような、白い細い頸うなじを差し延べ、眼を見張り、刀身を見詰めた。

それにも増して、刀身へ穴でも穿あけるかのように、その刀身を見詰めているのは、燠おきのように熱を持った薪左衛門の眼であつた。

薪左衛門も葉も、時の経つのを忘れているようであつた。どこに居るのかも忘れて居るようであつた。

人は往々にして、真の驚異や、真の感激や、真の美意識に遭遇ぶつつた時、時間ときと空間ところとを忘却わすれるものであるが、この時の二人がまさにそれであつた。

名刀の威徳

「栞や」と、不意に、薪左衛門は、優しい穏おだやかな声で云った。

「これは、天国の剣に相違ないよ。私には見覚えがある。遠い昔に——二十年もの昔でもあろうか、五味左衛門という者の屋敷から、天国の剣を強奪……いやナニ、頂戴したことがあるが、それがこの剣なのだよ。……ゆえあつてその天国の剣は、今まで行衛不明となり、同志、来栖勘兵衛からは……いやナニ、誰でもよい、同志の一人からは、わしがその剣を隠匿したように誣しいられたが……それにしても、栞や、よくそなた、この剣を目付け出してくれたのう」

その云い方は、全然、正氣の人間の云い方であり、その声音は、これこわねも正氣の人間の、五音の調った、清すがすが々しい声音であつた。

「まあお父様！」と、栞は叫ぶように云い、父親が、正氣に返つたらしいのに狂喜し、のめるように膝で進み、薪左衛門の膝へ取り縋すがつた。

「そのお顔は！ そのお声は！ ……おおお、お父様、すっかり正氣の人間に！ ……」
いかさま、ほんのさつきまでは、薪左衛門の顔は、狂人特有の、顰ひそんだ眉、上擦つた眼、食いしばった口、蒼白の顔色、そういう顔だったのに、何んと現いま在の顔は、のびのびとし

た眉の、沈着おちついた眼の、穏かに軽く結んだ口の、尋常の人の容貌に返っているではないか。これはどうしたことなのであろう？ 奇蹟的事件にぶつかった時、人は往々、濁った気持ちや、狂った精神こころを、本来の正気に戻すことがあるものであるが、薪左衛門にとっては、天国の剣の出現は、その奇蹟的事件と違っていいらしく、そのため、烈しい感動を受け、日頃の狂疾が、一時的に恢復したのかもしれない。

「ナニ正気の人間に？」

と、薪左衛門は、栞の言葉を、不審いぶかしそうに聞き咎めた。

「栞や、正気の人間とは？」

「おお、お父様お父様、あなた様は、長らくの間、ご乱心あそばしておいでなされたのでございます」

「乱心？」

「はい、過ぐる年、松戸の五郎蔵という、博徒の親分が参りまして、お父様と、お話しいたしましてございますが、その時、突然お父様には、『汝おのれ、来栖勘兵衛、まだこの俺を苦しめるのか！』と叫ばれまして、その時以来、ずっとご乱心……」

「……………」

「そればかりか、お父様には、以前からお持ちの、腰の刀傷が元で、いざり 躰者に……」
「ナニ、躰者に？」と、叫んだかと思うと、薪左衛門は、腰を延ばし、ノツと立ち上がった。立てなかつた。

「おおおお葉や、わしは躰者じゃ！ ……躰者じゃ躰者じゃ、わしは躰者じゃ！ ……ワ、わしは、イ、躰者じゃーッ」

時が沈黙のまま経って行つた。天井裏で烈しい音がし、悲しそうな鼠の啼き声が聞こえた。こういう古屋敷の天井裏などには、大きな蛇が住んでいるものである。それが梁はりから落ちて、鼠を呑んだらしい。

時が経って行つた。

薪左衛門の顔には、恐怖、悲哀、絶望、苦悶の表情が、深刻に刻まれていた。当然といえよう。乱心していたということだけでさえ、恥ずかしいことなのに、躰者にさえなつたという。生まれもつかぬ躰者に。

薪左衛門は眼を閉じた。その瞼が痙攣を起こしているのは、感情を抑えているからであらう。葉の肩を抱いている手が、烈しく顫えているのも、感情を抑えているからであらう。父の苦悶の顔を、下から見上げている葉の顔にも、恐怖と不安と悲哀とがあつた。

(烈しいお父様の苦悶が、お父様を駆って、また乱心に……)

これが葉には恐ろしく悲しいのであった。

やがて薪左衛門は弱々しく眼を開けた。その眼についたのは、右手に捧げている天国の剣であった。剣は、依然として、珠を延べたかのように、気高い、穏かな光を放し、宙に保たれていた。この剣の威徳には、煙りさえも近寄れないのであろうか？ と云うのは、少しでもお父様の狂ったお心を静めてあげようと、優しい娘心から、葉は、毎日この部屋で香を焚くのであって、今も床の間に置いてある唐金の香炉から、蒼白い煙りが立ち昇つてい、その一片が、刀の切っ先をクルクルと捲いた。しかし何かに驚いたかのように、煙りの輪は、急に散り、消え、後には、暗い空間に、刀身ばかりが、孤独に巖おこぼかに輝いてい
るではないか。

それを見詰めている薪左衛門の眼は、次第に平和になり、顔からも、悲哀や苦悶や絶望の色が消えた。

返らぬ記憶

「栞や」

と、ややあつてから、薪左衛門は、おちつきのある、しみじみとした声で云った。

「わしが乱心中に、どんなことを云ったか、どんな事をしたか、話しておくれ」

栞は、お父様が沈着な態度に返つたので、ホツと安心し、

「それはそれはお父様、ご乱心中には、何んと申したらよいやら、いろいろ変つたことをなさいました。また、おつしやいもなさいました。……何から申し上げてよいやら。……

おおそうそう、来栖勘兵衛という男が、お父様を討ちに来るなど……」

「来栖勘兵衛がわしを討ちに？ ……うむ、栞や、それは正気になつた今のわしでも云うよ。……そういうことがあるような気がするよ」

「そうしてお父様には、ご自分を、有賀又兵衛じやおつしやいました」

「……………」

「それからお父様は、来栖勘兵衛がわしを討ちに来るから、旅の浪人などが訪ねて来たら、逗留させて、加担人かとうびとにしろと。……それで妾わたしは、訪ねて参られた浪人衆を、お泊めいたしましてございます」

「そうかえ、それはいいことをしておくれだったねえ。……来栖勘兵衛は強い男なのだか

ら、わしには、どうしても加担人かとうどが入用いなのだよ」

「それからお父様は、そのようにお御足みあしが不自由みになられてからも、毎日のように、野中の道了様へ、お参詣まいりに行かねばならぬとおっしゃいますので、いつそ道了様を屋敷内に勸か請んじょういたしたらと存じ、道了様そっくりの塚を、お庭へ築きましたところ……」

「おおおお、そんな苦労まで、葉や、お前にかけてのかねえ。……野中の道了!! うむ、道了塚!」

と、薪左衛門は、グツと眼を据えた。

「するとお父様には、それを真の道了様と思われ、毎晩のように、甕かめり車くるまに乗られ、塚の周まわりをお廻りなさいましてございます」

「あさましいことだったのう」

「ところが、数日前の晩のことでございますが、加担人として、お泊まりくださいました、伊東頼母様と仰せられるお方が、その塚のあたりを逍遙さまよっておられますと、お父様が、来栖きせ勘兵衛と勘違いされ、『勘兵衛、これ、汝おのれに逢あつたら、云おう云おうと思つていたのだが、野中の道了での決闘、俺は今に怨恨うらみに思つているぞ。……事実を誣しい、俺に濡ぬれ衣ぎぬを着せたあげく、股へ一太刀! ……おのれ勘兵衛、もう一度野中の道了で決闘し、雌雄を

決しよう、長い長い間、機会の来るのを待っていたのだ』とおっしゃったそうでございます」

「野中の道了での決闘？ フーム……」

と、薪左衛門は考え込んだ。

（野中の道了で、来栖勘兵衛と、俺は、決闘した覚えはある。……だが何んの理由で、決闘したのだろうか？）

彼には、肝心のことが解らなかつた。

（わしの頭脳あたまは、まだ本当に快癒なほりきっていないのかもしれない）

大病をして、大熱を発し、人事不省に落ち入ったものや、乱心して恢復した者のある者が、過去の記憶を、一切忘却してしまうことがある。一切忘却しないまでも、その幾個いくつかを、忘れてしまうことがある。薪左衛門の場合はその後者らしかった。

（何んの理由で、俺は、勘兵衛と、野中の道了で決闘したのだろうか？）

思い出そう、思い出そうと、薪左衛門は焦心あせした。

「葉や」と、薪左衛門は、傷いたましい声で云った。

「わしを野中の道了へ連れて行つておくれ。……あそこへ行つたら、わしの記憶が蘇よみがえ生

るかもしれないから」

「甕いざり車に乗った薪左衛門と、それを引いた葉とが、野中の道了塚へ着いたのは、正午まひるであつた。春陽に浸っている道了塚は、その岩にも、南無妙法蓮華經と刻ほつてある碑いしづみにも、岩の間にこめてある土壌つちにも、花卉や花粉やらがちりばめられていた。この高さ二間周囲十間の道了塚は、いわば広々とした平野の中に出来ている瘤こぶのようなものであつた。しかし、この一見平凡の道了塚も、過去に多くの秘密を持つている薪左衛門にとつては、重大な記念物らしく、葉に助けられて、それを甕りのぼる彼の顔には、複雑な深刻な表情があつた。やがて彼は碑を正面まえにして坐つた。彼の手には、鞘に納められた天国が、握られていた。

「葉や、わしはここで一人で考えごとをしていきたいのだよ。一人しておいてくれ」

薪左衛門は、握っている白鞘の剣の周囲を、黄色い蝶が、謎めいた飛びかたをしているのを、無心で眺めながら、何んとなく放心したような声で云つた。

塚の中からの声

「はい」

と葉は、素直に答えて、衣裳の赤い裾裏と、草履の赤緒との間に、白珊瑚しろさんごのように挟まっている可愛らしい素足を運ばせ、塚を下りた。そうして、塚の裾に、蕨黄色もえぎいろの座布団を敷いた甕り車が、もうその座布団の上へ、落花を受けて、玩具おもちゃ具かのように置いてある横に立って、父親の方を振り返って見たが、やがて所在なさそうに、道了塚の背後に、壁のように立っている雑木林——かつて、五味左門が、紙帳を釣って野宿した、その雑木林の中へはいって行つた。

一人となつた薪左衛門は、碑を見上げて、じつとしていた。裾に坐つて、見上げているためでもあろう、六尺の碑が、二丈にも高く思われ、今にも、自分の上へ、落ちかかつて来はしまいかと案ぜられた。陽に照らされて、その碑の面は、軟らかく艶めてさえ見えだが、精悍に刎ねて刻ほつてある七字の題目は、何かを怒いかつて、叱咤しているかのように思われた。

薪左衛門の記憶は徐々に返つて来た。自分が有賀又兵衛と宣り、兄弟分の来栖勘兵衛と一緒に、浪人組の頭として、多勢の無頼の浪人を率い、関東一帯を荒らし廻つた頃の、いろいろさまざまの出来事が、次から次と思ひ出されて来た。

(幾万両の財宝を強奪したことやら)

奪った財宝の八割までを、自分と勘兵衛とが取り、後の二割を、配下の浪人どもへ分配してやった悪辣あくらつの所業しわざなども思い出された。そうして、大仕事をすると、官おかみの探索の眼をくらすため、一時組を解散し、自分は今の屋敷へ帰つて来、真面目な郷土、飯塚薪左衛門として、穏しく生活したことなども思い出されて来た。

(下しもうさ総そうの五味左衛門方を襲い、天国の剣と財宝とを奪い、さらに甲州の鴨屋を襲つて、巨額の財宝を手に入れたのを最後として、全ま然たく組を解散したつけ)

(その後、来栖勘兵衛は、故郷の松戸へ帰り、博徒の頭になつた筈だ)

こんなことも思い出された。

(だが、何んの理由で、俺と勘兵衛とは、この道了塚で決闘したのでらう?)

決闘の現場の道了塚へ来て考えても、その理由ばかりは思い出されないのであつた。

(わしの頭脳あたまはまだ快癒なほりきらないのかもしれない)

淋しくこう思つた。

と、その時、何んたる怪異であろう! 坐っている道了塚の下から、大岩を貫き、銀の一本の線のような、恐怖と悲哀とを緬ない雑まぜにした男の声が、

「秘密は剖かない！ 裏切りはしない！ 助けてくれーッ」

と、聞こえて来たではないか。

「う、う、う！」

と薪左衛門は、呻き声をあげたが、やにわに天国の剣を引き抜き、春の白昼まひるに現われた、

「声の妖怪もののけ」を切り払うかのように、頭上に振り、

「あの声！ 聞き覚えがある！ ……二十年前に聞いた声だ！ ここで、この道了塚で！

……秘密はあの声にあるのだ！ 決闘の秘密は！ ……おおおお、それにしても、二十

年前に聞いたあの声が、二十年後の今日聞こえて来るとは？」

一つの影が、碑を掠め、薪左衛門の肩へ斑ふを置き、すぐ消えた。鳶が、地上にある鼠の

死骸を目付け、それをくわえて、翔び上がったのであった。道了塚を巡って、酩たけなわの春は、

華麗な宴うたげを展開ひらしていた。耕地には菜の花が、黄金の筵むしろを敷き、灌漑用の水路には、水の

銀箔が延べられてい、地平線を劃かきつて点々と立っている村落からは、犬の吠え声と鶏の啼

き声とが聞こえ、藁家の垣や庭には、木蓮や沈しん丁ちよう花げや海かい棠とうや李りが咲いていたが、紗を

張つたような霞の中では、ただ白く、ただ薄赤く、ただ薄黄色く見えるばかりであった。

でも、それは、この季節らしい柔らかかみを帯びた風景として、かえって美しく、万物を受

胎に誘う春風の中に、もろもろの香気においの籠こもっているのと共に、人の心を恍惚とさせた。それにも関わらず、薪左衛門ばかりは、ふたたび乱心に落ち入るかのように思われた。振り廻まわっていた天国の剣を、今は額に押し当て、沈痛に肩を締め、全身をガタガタ顫ふるわせた。

（声の秘密を解かなければならない！ どうあろうと解かなければならない！）

その声はまたも岩の下から、いや、岩の下の地の底から、一本の銀の線かのように、土つち壊ちを貫き、岩を貫いて聞こえて来た。

「秘密は剖かない！ 裏切りはしない！ 助けてくれーッ」

（あの声は、渋江典膳の声ではない！ しかし典膳と一緒に働いていた男の声だ！）

薪左衛門は呻うめいた。

葉の発見した物

この頃葉は、林の中を逍遙さまよっていた。

父親の乱心が癒なごったことと、恋人の頼母が、今日あたり帰かえって来るだろうという期待とで、彼女の心は喜よろこびと希望のぞみとに燃えているのであった。

(頼母様といえ、あのお方とはじめてお逢いしたのは、道了様の塚の裾辺りだったつけ) 葉は、過ぐる日、氣絶していた頼母を、この手で介抱して、蘇生させたことを思い出した。

(妾、あの方の命の恩人なのよ。……頼母様、妾を粗末にははいけないわ) つい心の中で甘えたりした。

林の中は、光と影との織り物をなしていた。木々の隙を通って、射し込んでくる陽光は、地上へ、大小の、円や方形の、こがねいろ黄金色の光の斑を付け、そこへ萌え出ている、すみれ菫や土筆や薺の花を、細かい宝石のように輝かせ、その木洩れ陽の通り路の空間に、ぶよ蟻子やかげろう蜻蛉や蜂が飛んでいたが、それらの昆虫の翅や脚などをも輝かせて、いかにも楽しく躍動している「春の魂」のように見せた。

心に喜悦を持つている葉は、何を見ても楽しかった。

栗や柏や檜などが、その幹や枝に陽光を溜め、陽光の溜っている所だけが、生き生きと呼吸しているように見えるのも、蕾を沢山持った山吹が、うつぎ卯木と一緒に、小丘のように盛り上がっている、その裾に、栗色の兎が、長い耳を捻るように動かしながら、うずくま蹲居っている、さくらんぼ桜実のような赤い眼で、葉の方を見ていたが、それも葉には嬉しくてならなかった。

葉は木々を縫つて目的なく彷徨つて行つた。

一つの林が尽き、別の林へはいろいろとする処に、木立ちのない小さい空地があり、そこまで来た時、

「あれ」と云つて、葉は足を停めた。

その空地に、巨大な白蝶の死骸かのように、一張の紙帳が、バツタリと地に、張り付いていたからである。

「紙帳だよ、……まあ紙帳！」

どうしてこんな林の中などに紙帳が落ちているのか、不思議でならなかったが、それと同時に、数日前、自分の屋敷へ泊まった五味左門と云う武士が、部屋へ紙帳を釣つて寝、その中で、同宿の武士を殺傷したことを思い出した。

（その紙帳ではあるまいか？）

（まさか！）

と思ひ返したものの、気味が悪かったので、葉は立ち去ろうとした。しかし、紙帳とか蚊帳とかを見れば釣りたくなり、布団を見れば敷いてみたくなるのが女心で、葉も、その心に捉えられ、立ち去るどころか、怖々ではあつたが、あべこべに紙帳へ近寄つた。紙

帳には、泥や藁屑が附いていた。そうして血痕らしいものが附いていた。

(気味が悪いわ)と葉は、またも逃げ腰になったが、でも、やっぱり逃げられなかった。短く切られてはいたが、紙帳には、四筋の釣り手がついていた。

いつか葉は、その釣り手を、木立ちにむすびつけていた。

間もなく紙帳は、葉の手によって、空地へ釣られ、ところどころ裂け目を持ったその紙帳は、一杯に春陽を受け、少し弛だるそうに、裾を地に敷き、宙に浮いた。

(この中で寝たら、どんな気持ちするものかしら?)

この好奇心も、女心の一つであろう。

葉は、紙帳の中へはいろいろとして、身をかがめ、その裾へ手をかけた。

しかし葉よ、その紙帳こそは、やはり、五味左門の紙帳なのであり、三日前の夜、風に飛ばされて、ここまで来たものであり、そうして、その中へはいったものは、男なら殺され、女なら、生命いのちより大切の……そういう紙帳なのに、葉よ、お前は、その中へはいろいろとするのか?

そんなことを知る筈のない葉は、とうとう紙帳の中へはいった。

処女の体を呑んだ紙帳は、ほんのちよつとの間、サワサワと揺れたが、すぐに何事もな

かつたように静まり、その上を、眼白や頬白が、枝移りしようとして翔けり、その影を、
 剎那剎那映した。

戸板の一団

ちようどこの頃のことであるが、この林から一里ほど離れた地点に、だだっ広い前庭を
 持った一構えの農家が立って、家鶏の雛が十羽ばかり、親鶏の足の周囲を、鬱金色
 の綿の珠が転がるかのように、めまぐるしく転がり廻っていた。と、筵をかけた戸板を担
 い、それを取り巻いた十人の男が、街道の方から走つて来、庭の中へはいつて来た。戸板
 から滴が落ちて、日和つづきで白く乾いている庭の礫の上へ滴り、潰れた苳のような色を
 作した。

血だ！

「咽喉が渴いてたまらねえ。水だ水だ」

と喚いて、一人の男が、一団から離れ、母屋と隠居家との間にある井戸の方へ走つて行
 った。すると、母屋の縁側近くに集まって、餌をあさりはじめていた、例の家鶏の一群は、

これに驚いたか、けたたましく啼き出し、この一団が侵入して来た時から、生け垣の隅で臆病らしく吠えつづけていた犬は、今は憤怒したように猛りたつた。

「俺おらも水だ」

と、云つて、もう一人の男が、井戸の方へ走つた。

そういう二人にはお構いなく、戸板を担つた一団は、庭の外れ、街道に添つて建ててある、大きな納屋の方へ走つて行つた。

農事がそろそろ忙しくなる季節であつた。この家の人々は、おおかた野良へ出て行つたとみえて、子守娘こもりと、老婆とが、母屋の入り口に莫塵を敷き、穀物の種よを選び分けていたが、その一団を見ると、呆氣にとられたように、眼を見合させた。

咽喉が渴いてたまらねえ、水だ水だと喚いた最初の男が、井戸端まで行つた時、井戸の背後の方に、藁葺きの屋根を持った、古い小さい隠居家が、破れ煤すすぶれた障子を陽あびに焙あぶらせて立っていたが、その障子が、内側から細目に開き、一人の武士が、身を斜めに半身を現わし、蒼味がかつた、幽鬼じみた顔を覗かせた。けたたましく啼きたてた家畜の声に、不審を打つたかららしい。

「わッ、わりやア、五味左門！」

と、井戸端まで辿りついた男は喚いた。松戸の五郎蔵の乾児の、中盆の染八であった。
「野郎！」

と染八は脇差しへ手をかけた。遅かった。

この時、もう左門は、その独活うどの皮を剥いたように白い足で、縁板えんを踏み、地へ下り、染八の面前へまで殺到して来ていた。

「わッ」

染八の肩から、こう蹴鞠けまりの毬まりのような物体ものが、宙へ飛びあがり、それを追って、深紅の布が一筋、ノシ上がった。切り口から吹き上がった血であった。染八の首級くびは、碇いかりづな綱なのように下がっている撥ね釣瓶はつるべの縄つるべに添い、落ちて来たが、地面へ届かない以前まえに消えてしまった。年月と腐蝕むしくいとのためにボロボロになっている井桁を通し、井戸の中へ落ちたのであった。

「夕、誰たれか、来てくれーッ」

染八の後を追って、これも水を飲みに来た壺振りの喜代三は、染八の死骸が、片手を脇差しの柄へかけたまま、自分の前へ転がって来たのに躓つまずき、夢中で両手を上げて、そう叫んだ。しかし誰も来ない以前まえに、左門の刀が、胴から反対側の脇下まで斬っていた。死骸

となつて斃れた喜代三の傷口から、大量の血が流れ出、地に溜り、その中で蟻が右往左往した。啓あなを蟄をて間のない小蛇が、井戸端の湿地しめじに、灰白い紐のように延びていたが、草履を飛ばせ、跣足はだしとなり、白い蹠あしうらをあらわしている死骸の染八の、その蹠の方へ這い寄つて行つた。そうしてその、小蛇が、染八の足首へ搦み付いた頃には、五味左門は、道了塚の方へ続いている林の一つへ、その長身を没していた。

彼は道了塚の方へ歩いて行くのであつた。

悩みの殺人鬼

懐ふところ手でをし、少し俯うつむ向き、ゆるゆると歩いて行く左門の姿は、たった今、人を殺した男などとは思われないほど、冷静であつたが、思いなしか、淋しそうではあつた。顔色もいくらか蒼味を帯びていた。林の中はひっそりとしていて、小鳥の啼き声ばかりが、頭上から、左右から聞こえて来た。山鳩が幾羽か、野の方から林の中へ翔かけ込んで来たが、人間の姿を見て驚いたように、一斉に棹のように舞い立ち、木々の枝へ停まつた。

木々を巡り、藪よを避け、左門は、道了塚の方へ歩いて行く。

それにしても、どうして彼は、農家の隠居家などにいたのであろう？ 何んでもなかつた、三日前の夜、府中の武蔵屋で、ああいう騒動を惹き起こしたが、切り抜けて遁がれた。遁がれたものの、伊東頼母を、返り討ちにすることが出来なかつたことが残念であつた。（いずれば彼奴も、この左門を討とうと、この界隈を探し廻っていることであらう、そこを狙つて討ち取つてやろう）

こう思い、あの農家に頼み込み、しばらく身を隠して貰つていたのであつた。出かけて行つて、頼母の居場所を探りたくはあつたが、松戸の五郎蔵一味が、まだ府中にいて、この身の現われるのを待ち、討ち取ろうとしているらしかつたので、今日までは外出しなかつたのである。

左門には、あの夜以来、心にかかることがあつた。紙帳を失つたことである。何物にも換えがたい大切な紙帳を！

そう、紙帳は、左門にとつては、ちょうど、かたつむり 蝸牛 における殻のようなものであつた。肉体の半分のようなものであつた。その中で住み、眠り、考え、罪悪さえも犯した紙帳なのだから！ 恋人のような離れ難いものと云つてもよかつた。それに紙帳は、彼にとつては、一つの大きな目的の対象でもあつた。頼母を殺し、その血を注ぎ、憤死された父上の

妄執を晴らしてあげたい！ その血を注ぐ対象が紙帳なのであるから。

その紙帳を紛失した彼であった。淋しそうに、氣抜けしたように歩いて行くのは、当然といつてよからう。

（あの夜紙帳が、独り^{ひと}りで歩いたのは、中にお浦がいて、紙帳から出ようとしたが出られず、もがきながら走ったからだ。それは、あの女の着ていた物が、次々に脱げて、地へ落ちたことで知れる）

しかし、その後、紙帳やお浦はどうなったことか？

それが解らないからこそ、左門は憂鬱なのであった。

林を縫って流れている小川があり、水が清らかだったので、底の礫^{こいし}さえ透けて見えた。

それを左門が跨いで越した時、水に映った自分の姿を見た。顔に精彩がなかった。

（家を喪った犬は、みすぼらしいものの代表のように云われているが、俺にとっては紙帳は家だ。それを失ったのだからなア）

顔に精彩のないのも無理がないと思つた。

（どうぞして紙帳を探し出したいものだ）

彼は黙々と歩いて行つた。

それにしても、何故彼は、道了塚の方へ行くのであろう？ たいした理由があるのではなく、数日前ここの林へ紙帳を釣って野宿したところがあり、それが懐かしかったのと、五郎蔵の乾児二人を斬り、身をかくしたところが林で、その林が道了塚の方へつづいていたので、それで道了塚の方へ足を運ぶまでであった。

彼は、どうして五郎蔵の乾児二人が、自分の隠れている農家などへやって来たのか、解らなかつた。

(やはり五郎蔵一味め、俺の行衛を探しているのだな)

こう思うより仕方なかつた。彼には五郎蔵の乾児たちが、筵むしろをかけた戸板を担って、あの農家の納屋なやの方へ行つたことを知らなかつた。それは、その一団の姿が、母屋の蔭になつていて、見えなかつたからである。

(どっちみち油断はならない)

こう思った。

やがて彼は、記憶に残っている、かつての夜、紙帳を釣って寝た、道了塚近くの林へ来た。突然彼は足を止め、茫然として前方を見据えた。無数の血痕を附けた、紛れもない自分

の紙帳が、林の中の空地に釣られてあるではないか。紙帳は、主人に邂逅めくりあつたのを喜ぶかのように、落葉樹や常磐木ときわぎに包まれながら、左門の方へ、長方形の、長い方の面を向け、微風に、その面へ小皺を作り、笑った。

左門は、紙帳が、どうしてこんなところへ来ているのか、誰が紙帳を釣ったのか？ と、一瞬間不思議に思ったが、それよりも、恋していると云つてもよいほどに、探し求めている巣を——紙帳を、発見したことの喜びに、肌に汗がにじむほどであった。

彼は、何をおいても、紙帳の中へはいり、この平和を失った、イライラしている心持ちを鎮めたいと思つた。

彼は、声をさえ発し、紙帳へ走り寄つた。それが生物いきものであつたならば、彼は紙帳を抱き締めたであろう。彼はやにわに紙帳の裾をかかけた。

「あッ」

彼は驚きで胸を反らせた。

新鮮な果実このみ

紙帳の中に、彼の眼前に、彼以外の紙帳の主がいるではないか。そう、紙帳を箱とすれば、箱へ納まった京人形のように、一人の美しい娘が、謹ましくはあつたが、充分寛くつろいだ姿で、安らかに、長々と寝て、眠っているではないか。

(無断で俺の巢へ入り込んだ女め！)

憤怒いかりが勃然ぼつぜんと左門の胸へ燃え上がった。

(だが、女だ、綺麗な娘だ！)

左門の、少し黒ずんで見えていた唇へ、赤味が注さし、眼へ光が射した。

左門は紙帳の中へはいった。彼は娘の顔をつくづくと見た。

(見覚えがある。飯塚薪左衛門の娘、葉だ！)

事の意外に左門はまたも驚いた。

過ぐる夜、飯塚家へ泊まった時、挨拶に出た葉という娘が、この紙帳の中に眠っているよ
うとは！

(不思議だなア)

左門は両眉の間へ皺を畳んだ。

(しかし、葉であろうと誰であろうと……)

左門は、やがて地に腹這い、蛇が鎌首を持ち上げるように、首を上げ、頤の下へ両手を支い、葉の姿をながめていた。葉は、そんなこととも知らず、片腕を枕にして、眠りつづけていた。友禅の襦袢の袖から、白い滑かな腕が覗いていたが、曲げた肘の付け根などは、円く軟らかく、薄桃色をなし、珠のようであった。

この頃、五味左門が身を隠していた、例の農家の、街道に添った納屋には、陽がなんどりと、長閑のどかにあたっていた。

この辺の農家の誇りの一つとすることに、大きな納屋を持つということがあった。それは、鋤や鍬などの農具を、沢山に持っているというこの証拠になるからであった。それでこの納屋も、土蔵ほどの大きさを持つてい、屋根に近い位置に、四角の窓を一つ穿うがっていた。その屋根に雀が停まっついて、羽づくろいし、その裾を、鼬いたちが、チヨロチヨロと徘徊していたが、これは赤黄色い土壌つちと、灰色の板とで作られているこの納屋を、大變詩的な存在にしていた。

と、一人の武士が、刀の鞘を陽に照らし、自分の影を街道に落としながら、納屋の方へ歩いて来た。伊東頼母であった。頼母はあの夜、敵五味左門を取り逃がしたので、それを探し出し、敵かなわぬまでも勝負しようと、武蔵屋を出いで、府中をはじめ、近所のそちこちを、

今日まで三日間さがし廻った。だが左門の行衛ゆくえは知れなかった。そこで一旦、飯塚薪左衛門の屋敷へ帰ろうと、今この街道を歩いて来たのであった。飯塚家へ帰るといふことは、彼にとつては喜びであつた。恋人の葉と逢ふことであるから。過ぐる夜、あの屋敷の庭で、純情の処女、葉と、手を取り交わして以来、葉が、何んと烈しく、一本気に、頼母を愛し出したことか。その愛の烈しさに誘われて、頼母も、今は、燃えるように、葉を愛しているのであつた。その葉と逢えるのだ！ 頼母は幸福で胸が一杯であつた。武蔵屋での苦闘と、三日間左門を探し廻つた辛労とで、頼母は少し痩せて見えた。頤など細まり、張つていた肩など、心持ち落ちたように見えた。

「や、これは！」

と、頼母は、納屋の前へさしかかり、何気なく窓を見上げた時、驚きの声をあげて足を止めた。窓にも陽があたつていて、明るかつたが、納屋の内部は暗いと見え、窓の向こう側は闇であつた。その闇を背後にして、明るい窓外に向き、一つの男の首級なまくびが、頼母の方へ顔を向けていたのではないか。陽のあたつてゐる窓の枠を、黄金色の額縁きんいろとすれば、窓の内部の闇は、黒一色に塗りつぶされた背景であり、そういう額の面に、男の首級くび一個が、生白く描かれているといつてよかつた。首級くびは、乱れた髪を額へ懸け、眼を閉じ、無念そ

うに食いしばった口から幾筋も血を引いていた。

「首級だーッ」

と、頼母は、思わず叫んだ。と、首級はユルユルと動き、一方へ廻り、すぐに頼母の方へ、ぼんのくぼを見せたが、やがて窓枠からだんだんに遠退き、間もなく闇に融けて消えてしまった。しかし、すぐに続いて、今度は女の首級が一個、ユルユルと闇から浮き出して来、窓へ近寄り、頼母の方へ正面を向けた。やはり眼を閉じ、口を食いしばり、額へ乱れた髪をかけていた。しかし、その首級もユルユルと廻り、頼母へぼんのくぼを見せ、やがて闇の中へ消えた。頼母は全身を強ばらせ、両手を握りしめた。と、またも、窓へ、以前の男の首級があらわれた。

「典膳の首級だーッ」

と、頼母は夢中で喚いた。そう、その首級は見覚えのある渋江典膳の首級であった。（しかし典膳は、三日前の晩に、お浦のために殺されて、川の中へ落とされたではないか！ 何んということだ！ 何んという！ ……）

典膳の首級は、頼母にそう叫ばれると、閉じていた眼を開けた。血が白眼の部分を櫛の
（はぜ）
実のように赤く染めていた。だが、その典膳の首級は、例のようにユルユルと廻って、闇

に消え、それに代わって、以前の女の首級が現われた。

「お浦だーッ」

そう、その首級はお浦の首級であった。

恩讐 まんじどもえ
卍 卍 卍 卍

お浦の首級は、頼母の叫び声を聞くと、眼を開けようとして、まぶた 瞼を痙攣させたが、開く間もなく、一方へ廻り、窓から遠退き、闇へ消えた。とたんに、軟らかい生物の体を、木などで打つような音がし、それに続いて悲鳴が聞こえたが、見よ！ 窓を！ 典膳の首級とお浦の首級とが、ぶつかり合い、噛み合いながら、キリキリ、キリキリと、眉間尺のように廻り出したではないか。

頼母は、夢中で納屋の扉へ飛び付いた。

刹那、納屋の中から、

「丁だ！」という声が聞こえ、それに応じるように、「半だ！」という声が響いた。

頼母は納屋の扉を引き開け、内へ飛び込んだ。開けられた戸口から、外光が射し込み、

闇であつた納屋の内部を昼間に変えたが、頼母に見えた光景は、地獄絵であつた。渋江典膳とお浦とが背後手に縛られ、高く梁に釣り下げられてい、その下に立つた五郎蔵一家の用心棒の、望月角右衛門が、木刀で、男女を撲っているではないか。撲られる苦痛で、典膳とお浦とは身悶えし、身悶えすることに、二人の体は、宙で、縊じれたり捻じれたりし、額や頤をぶつつけ合わせた。そういう二人の顔は、窓の高さに存在した。だから窓の外から見れば、二個の首級が、噛み合い食い合ひしているように見えるのであつた。納屋の壁には、鋤だの鍬だの鎌だのの農具が立てかけてあり、地面には、馬盥だの、だの稻扱きだのが置いてあつたが、そのずつと奥の方に、裸体蠟燭が燃えており、それを圍繞んで、六人の男が丁半を争っていた。五郎蔵の乾兒どもであつた。その横に立つて、腕組みをし、勝負を見ているのは、これも用心棒の小林紋太郎で、その南京豆のような顔は、蠟燭の光で黄疽病のように見えていた。

これらの輩は、戸のあく音を聞くと、一斉にそつちを見たが、

「染八か」「何をしていたんだ」「喜代三はどうした」「いい勝負がはじまっている」

「仲間にはいいいな」

などと声をかけた。

井戸の方へ水を飲みに行った二人の身内の一人が、帰って来たものと思つたらしい。しかし明るい戸口の外光ひかりを背負しよつて立つている男が、染八でもなく喜代三でもなく、武士だつたので、乾児たちは一度に口を噤つぶんでしまった。

頼母に一番近く接していた角右衛門が、真つ先に侵入者の何者であるかを見てとつた。「わ、わりやア伊東頼母！」

と叫ぶと、持つていた櫛の木刀を、真剣かのように構えた。しかしこの老獪な用心棒は、打ち込んで行く代わりに背後へ退き、粗壁あらかべへ守宮やもりのように背中を張り付け、正面に、梁から、ダラリと人形芝居の人形のように下がりに、尚グルグルと廻っている、典膳とお浦と体の横手から、恐こわそうに頼母を見詰めた。

乾児たちは角右衛門の声を聞くと、一齐に立ち上がった。蠟燭が仆れて消えた。

「いかにも伊東頼母！」

「探しているところだ！」

「いいところへ来やがった」

「たたんでしまえ！」

「誘拐かどわかめ！」

「盗賊め！」

乾児たちは口々に喚きだした。

「親分にお知らせして……さよう親分にお知らせした方がよろしい。……拙者一走りして……」と、臆病者の紋太郎は、侵入者が頼母だと知った瞬間、一躍して、乾児たちの背後へ隠れたが、今度はいち早く、納屋から逃げ出そうとして、そう叫びながら、乾児たちを掻き分けて前へ出、頼母の体によつて半分以上塞がってはいるが、しかし尚明るく見えている戸口を狙った。

頼母は、この意外なありさまに度胆を抜かれたが、そのうち自分が、何か誤解されているらしいことに感付いた。

「方々——いや五郎蔵殿のお身内、拙者はいかにも伊東頼母、先夜、父の敵五味左門に邂逅いたしました際には、ご助力にあずかり、千万忝けのうござった。お礼申す。その夜お断わりもいたさず武蔵屋を立ち退きましたは、とり逃がしました左門を探し出そうため。……しかし挨拶なしにお暇いたしましたは拙者の不調法、お詫びつかまつる。……いやナニここへ参りましたのもほんの偶然からで。……さよう、窓から、お浦殿の顔と典膳めの顔とが……どつちみち偶然からで。……それにいたしましても、只今のお言葉、ちと不穩

当！ 合点ゆきませぬ！ ……誘拐者とは？ 盜賊とは？」

と云い云い、頼母は、油断なく四方へ眼を配った。

納屋の血煙り

「吐かすな！」と、首根つ子に瘤のある乾児が叫んだ。「白々しい三ピン！ 何を云うか！ ……親分の恋人、お浦を誘惑し、五郎蔵一家の守護神、天国の劍を持ち出させながら、白々しい！ ……！」

「他人の恋女をそそのかしやア誘拐者よ！」

「刀を持ち出させりや盜賊だ！」

乾児たちは口々にまた喚きだした。

頼母は（さてはそれでか）と思った。お浦と関係など附けたことはなく、附けようと思つたことさえなかったが、お浦の方では、そういう関係になるべく希望んでいたことは争われなかつたし、天国の劍をお浦に持ち出してくるよう依頼したのは、確かに自分なのであるから、乾児たちにそう云われてみれば、言下に反駁することは出来なかつた。

頼母は黙ってしまった。

頼母が困こうじて黙っている様子を見てとつた乾児たちは、

「そこで親分には手前をさがしだし、叩たたつ斬ろうとしているところなのよ」

「いいところへ来た」

「とつ捕つかまえろ」

「手に余あつたら叩たたつ斬れ」

と喚わき出し、

「それを見ろそれを！」

と、頼たのに守宮やもりの刺青いれずみをしている一人の乾児が、梁はりから釣り下げられている典膳ふたお浦たりを

指さした。

「俺おれら仲間の処刑しよき、凄あかるうがな。……手前てまへを捉とえて、こうしようというのが親分の念願

なのさ」

「やっつけろ！」

脇差わきざしを引き抜くものもあつた。

頼母も刀の柄えいへ手をかけ、先方さきが斬り込んで来たら、斬り払おうと構かまえたが、それにし

でもお浦と典膳との境遇が、あまりに悲惨に、あまりに意外に思われてならなかった。

(いずれお浦は、あの後、五郎蔵の手に捕えられたものらしい)

あの後というのは、お浦が左門の紙帳を冠ったまま、武蔵屋の庭から消えた後のことであつて、あの時、紙帳が自然ひとりのように動きだしたのは、その実、その中にお浦がいたのだということは、お浦の衣裳が、次々に紙帳の中から地に落ちたことによつて、頼母にも悟れたのであつた。

(その後どうして五郎蔵の手に捕えられたのであろう?)

(そうして、殺された筈の典膳が、生きていたとは? ……そうして五郎蔵の手に捕えられたとは? ……どこでどうして捕えられたのであろう?)

彼にはこれらのことがどうにも合点いかなかったが、事實は、あの夜お浦と典膳とは、髪川の上と下とで逢つた。岸の上の女が怨みあるお浦だと知ると、典膳は猛然と勇氣を揮い起こし、岸へよじ上り、お浦へ掴みかかった。お浦は相手が典膳だと知るや、悲鳴を上げて遁がれようとした。二人は組み合い捻ねじ合つた。そこへ駈け付けて来たのが、血路をひらいて逃げた左門を、捕えようとして追つて来た五郎蔵達で、二人は五郎蔵たちの手によつて捕えられ、武蔵屋へしよびいて行かれ、そこで糾明された。お浦は容易に実を吐こ

うとはしなかつたが、いわば痛目吟味いために逢わされ、とうとう自分が伊東頼母を恋したこと、頼母の依頼によって天国の剣を持ち出し、頼母に渡そうとし、部屋を間違えて、五味左門の部屋へ行き、紙帳の中へ引き入れられたことなどを白状した。五郎蔵は怒った。自分が想いを懸けていた女が、頼母に心を寄せたことに対する怒りと、「持つ人の善悪にかかわらず、持つ人に福德を与う」とまで云われている天国の剣を、頼母へ渡そうとしたことが、五郎蔵をして嚇怒かくどさせた。彼はお浦を彌なぶり殺しにしようとした。

典膳に至つては、五郎蔵の過去の行状を知つていて、強請ゆすりに来たほどの男だったので、生きていたからには殺さなければならず、これも彌り殺しにすることにした。

こうして惨酷の所業が今日まで行われて来たのであったが、府中しゆくで殺しては人目につき、後々がうるさいというところから、この農家の納屋で、乾兒たちに吩咐いいつけ、その彌り殺しの最後の仕上げに取りかからせたのであった。

突然風を切つて木刀が、頼母の眉間へ飛んで来たので、頼母は瞬間身を反かわした。

「面倒くさい！ 方々、たたんでおしまいなされ！」

叫んで刀を抜いたのは、木刀を投げつけた角右衛門であった。

「そうだ、やれ！」

「なます膾に刻め！」

怒号する声が一斉に湧き起こり、納屋が鳴なり釜かまのように反響した。無数の氷柱つららが散乱するように見えるのは、乾児たちが脇差しを引っこ抜いたからであつた。

やにわに一人の乾児が横撲りに斬り込んで来た。頼母は、右手の壁の方へ身をかわしたが、抜き打ちぎまに、眉間から鼻柱まで割り付けた。

「やりやアがつたな！」

と喚くと、もう一人の乾児が、むこうみずにも、脇差しを水平にし、体もろとも、突っ込んで来た。それを頼母は左へ反わし、乾児が、脇差しを壁へ突っ込んだところを、背後から、肩を背筋まで斬り下げた。

二人を助けて

と、間髪を入れず、三人目の乾児が、

「野郎！」と叫んで、足を薙ぎに飛び込んで来た。

「命知らずめ！」

と頼母が叫んだ時には、もうその乾児の脳天を、鼻柱まで斬り下げ、その隙を狙って紋太郎が、脱兎のように戸口を目がけて逃げだしたのを、追おうともしないで見捨て、昏迷あがつた四人目の乾児が、

「チ、畜生オーツ」

と悲鳴のような声をあげて、滅茶滅茶に脇差しを振り廻し、ヒヨロヒヨロと接近ちかよつて来るやつを、真正面から、肩を胸まで斬り割り、望月角右衛門が、

「拙者、頼母めを背後より……各 《おのおの》方は正面から……」

と叫び、刀を振り冠り、背後へ廻ると見せかけ、その実は、お浦と典膳とが釣り下がっているその足の下を潜り、戸口から飛び出したのをも見捨て、生き残った二人の乾児が、これも戸口から駈け出そうとするのを、素早く前へ立って遮りさえぎ、

「逃げれば斬るぞ！ 坐れ！」

と大喝し、二人の乾児が、ベツタリと坐つたのを睨み、

「脇差しを捨てろ！」

二人の乾児は脇差しを投げ出した。

左門へ立ち向かつては子供のようにあしらわれる頼母ではあったが、本来が勝すぐれた腕前、

博徒や用心棒に対しては段違いに強く、またたくま瞬間に四人を斃し、二人を追い、二人を生擒とりこにしてしまったのである。

頼母はホツとし、大息を吐き、しばらくは茫然としていた。

(恩こそあれ、怨みのない五郎蔵殿の乾児衆を殺したとは……)

武蔵屋で、左門と出会った時、五郎蔵たちに助けられなかったならば、自分は手もなく左門に討ち取られたことであろう！ 五郎蔵殿とその乾児衆とは、自分にとつては恩人に相違ない！ それを、時の機勢はずみとはいえ、先方から仕掛けた刃傷沙汰とはいえ、その恩人の乾児を四人殺したとは……。

(殺生な！) その優しい心から、頼母は暗然とせざるを得なかった。

と、その時、頭上から、

「頼母様アーツ」

と叫ぶ、女の声が聞こえて来た。頼母はハツとし、気が付き、声の来た方を振り仰いだ。半分死ななかばにはいり、ほとんど人心地のなかつたお浦が、今の乱闘騒ぎで、正気を取り戻したらしく、藍のように蒼い顔を、薄暗い梁の下に浮き出させ、血走った眼で、思慕に堪えないように、じつと頼母を見下ろしていたが、紫ばんだ唇を動かしたかと思うと、

「頼母様アーツ……あなた様のために……あなた様に差し上げようと持ち出しました天国の御剣を、残念や、髪川へ落としましてございます。……こればかりが心残り！……死にまする、妾は間もなく死にまする！……いいえ何んの怨みましようぞ！ 想いを懸けましたあなた様のために、五郎蔵親分に鬻り殺しにされて死ぬこそ、妾のような女には分相応！……本望！……喜んで死にまする！ 頼母様アーツ」

荒縄の一端で釣り下げられている彼女であった。肩も胸も露出に、乳房のあたり咽喉のあたり焼き鏝でも当てられたか、赤く爛れ、皮膚さえ剥けている。深紅の紐でも結びつけたように、血が脛を伝わっている。

「頼母殿と仰せられるか、一思いにお殺しくだされい！ お慈悲でござるぞーツ」と叫んだのは、縄の他の端に繋がれた、お浦と並び、釣り下げられている典膳であった。

「おのれ五郎蔵、この怨み死んでも晴らすぞよ！……汝の過去の罪悪、わけても道了塚での無慈悲の所業！ それを俺に剖かれるかと慮れ、瞞し討ちから鬻り殺しにかけおったな！……可哀そうなのは伊丹東十郎！ あいつの悲鳴、今も道了塚へ行かば、地の下から聞こえるであろうぞ、『秘密は剖かない、裏切りはしない、助けてくれーツ』と。……天国の剣を、汝が手に入れたも、この典膳が才覚したればこそじゃ。……その俺を鬻り殺し

！ おのれ五郎蔵オーツ」

ワングリと開けた暗い口から、焰ほのおの先のような舌を、ヒラヒラ出入りさせた。前歯が数本脱けている。引き抜かれたものらしい。爪を剥がされた足の指から、今も血がしたたつてい、その指の周囲を、金蠅が飛び廻っている。

頼母はやにわに刀を揮うと、二人を釣っている縄を切った。

「お浦殿オーツ」と頼母は、地に落ちて来たお浦を宙で抱き止めると、ベタリと坐り、お浦の体を膝へ掻き上げた。「頼母、お助けつかまつるぞオーツ」

恩こそあれ怨みのないお浦であった。この身を恋してくれたこと、なるほど、五郎蔵からみれば、怒りに堪えない所業であつたろうが、この身からすれば、尋常に恋されたままである。憎むべき筋ではない。その恋ゆえに、天国の剣を持ち出してくれたという。感謝しなければならぬではないか。その恋ゆえに、鬨り殺しにかけられたという。助けないでおられようか！ 四辺を見れば、壁に戸板が立てかけられてあつた。

「おのれ
「汝ら！」と頼母は、地べたに坐つて顫ふるえている二人の乾児こぶんを睨みつけ、「戸板かを持って！
……お浦殿とお武家様とを昇かき載せよ！ ……そうして汝ら戸板かを担かつげ」

一団は納屋を出た。

(角右衛門どもの注進で、五郎蔵が乾児を率い、襲つて来るやも知れぬ。何を措いても身を隠さなければ！……では附近ちかくの林へ！)

「走れ！ 向こうの林へ駆け込め！」

戸板の一団は、さつき、五味左門が身を没した同じ林の中へ駆け込んだ。

処女と殺人鬼

道了塚の林の中の紙帳の中で、葉が眼をさましたのは、これより少し以前まえのことであった。彼女は、自分が蝶になつて、春の野を舞いあそんでいる夢を見ていた。野の中に、一ひと本もとの、木蓮の木があり、白絹細工のような花が、太陽ひに向かつて咲き揃つているのを見(美しく清らかで、若々しくて、まるで頼母様のようなことです)と思ひ、一輪の花の中へ分け入つた時、木蓮の花の、倍もありそうな巨大な、そうして血のように赤い蜘蛛くもが、突然、頭上うへから、舞い下がつて来た。

「あッ、蜘蛛が！」と、蝶の葉は叫び、叫んだ自分の声に驚いて眼をさまし、起き上がった。と、狼狽して、紙帳の向こう側の隅へ、飛ぶように身を引き、そこへ、固くなつて坐

った若い、身長せいの高い、総髪せうの武士を認めた。

「まあ」と、葉は云つて、驚きを二倍にしたが、立派なお侍さんが、女の自分の声に驚いて、ケシ飛んで行つたのがおかしく、それに気の毒でもあつたので、「怖がらなくともよろしゅうございますの。……妾わたし、寝呆ねぼけ気て叫んだだけでございますもの」と云い、無邪気に、口をあけて笑つた。

武士——五味左門は、

「ナニ、怖がらなくともよいと。……ふうん」

と、呆れて、まじまじと、葉の顔を見詰めた。

「あッ蜘蛛が」と叫ばれ、眼をさまされた。さすがの彼も、不意だったので胆をつぶし、思わず紙帳の隅へ飛び退がつたまでで、相手を怖がつたのでも何んでもなかつた。怖がるといえ、葉こそ、怖がらなければならぬ筈である。はいつたが最後、たいがいは殺される紙帳の中へはいり、殺人鬼のような当人の左門と向かい合つているのであるから。それなのに、その葉が、「怖がらなくともよい」と云う。「ふうん」と、左門としては呆れ返らざるを得なかつた。

しばらく顔を見詰め合つている二人を、紙帳は、昼の陽光ひを浴びて、琥珀色こはくに、明るく、

蔽うていた。時々、横腹が蠕動し、ウネウネと皺を作ったり、フワリと膨れたりするのは、春風が、外から吹き当たるからで、そのつど、例の、血汐で描かれた巨大な蜘蛛が、数多い脚を動かした。

「まあ」と栞は、驚きの声をあげた。「あなた様は、先夜、妾の家へお泊まりくださいました、五味左門様では？」

「さよう左門でござる。……その際は、お騒がせいたしましたな」

と、左門は、削けた、蒼白い頬へ皺を畳み煤色の唇を幽かにほころばせて微笑した。
(殺人者の左門と知ったら、怖がることであろうぞ) と思ったからである。

事実、栞は、その武士が、自分の屋敷で人を殺した、五味左門だと知ると、慄然とした。
(どうしよう?)

しかし、次の瞬間には、
(妾は、この人に悪いことをしていないのだから、殺される気遣いはない) と、初心の娘らしい心から、そう思った。

それに、自分の寝言に驚いて、紙帳の隅へケシ飛んで行った左門の様子が、いかにも笑止だったので、(この人、それほど悪い人でないに相違ない)

と、思った。

葉と左門とは、しばらく見詰め合っていた。

「一人のお侍様をお殺しになり、もう一人のお侍様の足を斬り落としましたのね。

……でも、よくよくのことがなければ、あのような惨酷むごたらしいことは……」

と、ややあつてから葉は考え深そうな様子で云った。

「きつとあの方達、あなた様に、よくよく悪いことを……」

「それでもござらぬ」

「いいえ、きつとそうだと存じますわ。でも、あなた様というお方、気の弱い、臆病なお方でございますものねえ」

馬鹿のような無邪気さ

「ナニ、気が弱くて臆病？」

左門は、また呆れた。

「ええ、そうでございますわ。それに、謹み深い、丁寧な、善良いお方でございますわ」

「……………」

「女の子の寝言に吃驚^{びっく}りなすって、紙帳の隅へケシ飛んで行ったまま、お行儀よく、膝にお手を置いて、かしこまっておいでになるのですものねえ」

云われて、左門は、自分を見廻して見た。なるほど、瘦せた肩を聳^{そびや}かし、両手をお行儀よく膝の上へ置き、膝をちんまりと揃えて坐っていた。叱られた子供が、姉さんの小言を、かしこまって聞いている格好であった。左門は苦笑した。しかし左門としては、何も葉に遠慮して、そんな態度をとったのではなく、突然の葉の声に驚き、飛び退^ひがった時にそういう姿勢をとり、それをこの時まで持ち続けて来たまでであった。

（それにしてもこの娘は、何んと朗らかで、無邪気なのであろう）

左門は、体を寛^{くつろ}げた。

（いい気持ちだ）

左門は、心が豊かになり、和^{なご}やかになるのを感じた。

「第一、このお家、妾のものとなく、あなた様のものでございますわ。あなた様がご主人様で、妾はお客様でございますわ。そのご主人様が、遠慮するということございませんわ」と葉は云って、膝の上で、長い袖を弄^{もてあそ}んだ。紅色の勝った、友禅模様の袖は、いろいろ

の落花の積み重ねのように見え、それを弄んでいる娘の、白い、細い、柔らかい指は、その花の積み重ねを、出たりはいつたりする、蚕かのように見えた。

「家とは？」

「紙帳のことですの」

「ははあ」

と云つたが、左門は、（いいことを云つてくれた）と思つた。（紙帳こそ、俺の家であり巢なのだからなあ）

また左門はいい気持ちになつた。そこで膝を崩し、手を懐ふところ中へ入れ、ノンビリとした姿勢となつた。

「紙帳といえば、妾がお釣りましたのでございますの」

栞は云いつづけた。

「妾、林を散歩して、ここまで参りましたところ、紙帳が落ちていたではございませんか……最初は、本当は、気味悪かつたのでございますのよ。……でも、見ているうちに、釣りたくなりましたので、釣りましたところ、今度は、はいつてみたくになりました。……はいりましたところ眠くなりました。そこで妾、眠つたのでございますわ……」

「ははあ」と左門は云つたが、さては紙帳は、あの夜、お浦によって、武蔵屋の庭から外へ運び出され、それから、何かの理由で——風にでも吹かれ、ないしは、お浦自身ここまですて持って来て、棄てて立ち去つたのかもしれないと思つた。

(どつちみち紙帳を、ここで取り戻すことが出来たのは幸福だった)

二人はしばらく黙っていた。

ふと、上の方で、ひそかな物音がした。

葉は、顔を上向けた。紙帳の天井に、楓の葉のような影が二個映つてい、それが、ひそかな音を立てて、あちこちへ移動うごつていた。小鳥の脚の影らしい。また二個数が増した。もう一羽、紙帳へ停まつたらしい。四個の小鳥の脚の影は、やがて紛もつれ合あつた。戯あそんでいるらしい。と、二個ずつ離れ、つづいて、意外に高い、でも優しい啼き声が響いて来た。

「テツポ、シチニオイテ、イツツブ、ニシユ」

と、その声は聞こえた。

とたんに、四個の脚の影は消えた。飛び去つたらしい。しかしやや離れたところから、同じ啼き声が聞こえて来た。

「頬ほお白しろでございますわね」

と葉は云つて、眼を細め、左門の顔を見た。

「何んといつて啼いたかご存知？」

「さあ」

「『鉄砲質に置いて、五粒二朱』——と、啼いたのですわ」

「ははあ」

「猟にあぶれたかりゆうど 猟師が、鉄砲をかついで、山道を帰つて来る時、高い木の梢で、ああ啼かれますと、猟師はわこ憤れて来るそうでございます」

「ふ、ふ」

と、左門は、思わず、含み笑いをした。

「その筈でございますわ」と葉は云いつづけた。

「そのように不景気では、今に、鉄砲を質に置いて、五粒二朱借りるようになるぞよ、な」と頼白にひやかされては、猟師としては、憤れて来ますわね」

「憤れますとも」

「でも、頼白は、普通、『一筆啓上仕る』と啼くのだそうでございます」

「物の啼き声は、聞きようによつて、いろいろに取れますわい」

愛すればこそ

「蛙が何んといつて啼くかご存知？」

「さあ」

「久太という小博徒こぼくちうちが、勝負に負けて、裸体にむかれて、野良路を帰って来ると、その前を、郷方見廻りの立派なお侍さんが二人、歩いて行かれましたそうで。……すると、田圃の中から、蛙が啼きかけましたそうで。……何んといつて啼いたかご存知？」

「知るわけがござらぬ」

「『あんた方お歴々、あんた方お歴々』と啼いたそうでございます」

「それも聞こえますなあ」

「久太が通ると、また、蛙は啼きかけたそうですが、何んといつて啼いたかご存知？」

「知るわけはござらぬ」

「『裸体でオホホ』と啼いたそうでございます」

「なるほど、それも聞きとれますなあ」

「久太は怒つて、蛙を捕えて、地べたへ叩きつけましたそうで。……何んといつて蛙が啼いて死んだかご存知？」

「知るわけはござらぬよ」

「『久太ア』と啼いて死んだそうでございます」

「あツはツはツ」と左門は、爆笑した。「『キューター』……あツはツはツ」

爆笑してから、ハツと気がついた。

（俺は幾年ぶりで、気持ちよく、腹の底から、何んの蟠りわだかまもなく、笑つただらう？）

そうして、彼の気持ちは、快く爆笑させてくれた葉に対して、感謝しなければならぬようなものになつていた。

（妾、どうして今日は、こう何んでも、気安く思うことが云えるのだらう？）

と、葉は葉で、自分ながらその事が、不思議なような気がした。（やはり、お父様のご病氣がお癒りになつたからだわ。……そうして、頼母様が、今日あたり、帰つておいでになるからだわ）

——それに相違なかつた。それだから、心が喜びに充ちてい、何んでも云え、何んでも受け入れることが出来、何んでもよい方へ解釈することが出来るのであつた。

また二人は、しばらく沈黙して、向かい合っていた。

左門は、いつか、肘を枕にして横になった。

蕾を持った春蘭が、顔の前に生えていて、葉の隙から葉の姿が、すだれ簾越しの女のように見えていた。葉は、顔を上向け、また、何か想いにふけっているようであった。華やかな半襟の合わせり目から、白い滑かな咽喉が覗き、その上に、ふくよかな円い顔が載っていて、咽喉の形が、象牙の撥ばちのように見えているのも、初々ういういしかつた。

葉は笑った。頼母のことを思つての、「想い出し笑い」であつた。

「葉殿」と、左門は、相手の心を探るように云つた。

「そなた、誰かと恋し合つておられますな」

「ま、……どうして……」

しかし葉の耳朶は紅を注した。

「様子でわかります」

「……………」

「あまりに浮き浮きとしておられる。あまりに幸福そうじゃ。……若い娘ごが、そのように成られること、恋以外にはござらぬ」

「……………」

「栞殿のような、美しい、賢い、無邪気な娘ごに恋される男、何者やら、果報者でござるよ」

「……………」

「相手の殿ごも、栞殿を愛しておられますかな？」

讐敵紙帳の内外

「それはもう……………」と、栞は思わず云つて、また顔を染めた。

「その殿ご、心変りせねばよいが」

「なんの……………決して……………そのようなこと！」

「競争者でも出来て……………」

「競争者でも……………」

と、栞の顔へ、はじめて不安の影が射した。

「さよう、競争者でも出来ましたら、男の心など、変るもので」

「いいえいいえ、そんなことがありますものか！ ……でも、もしや、そんなことにでもなったら……死にまする！ 妾は死にまする！」

「こう云っているうちにも、阿婆あばず擦れた女などが、そなたの恋人——いずれ、しおらしい、初心の栞殿の恋人ゆえ、同じ初心のしおらしい殿ごでござろうが、その殿ごへ、まとい付いて……」

栞の顔色は次第に変わり、眼が、地面の一所へ据えられた。

その様子を見ると左門は、本来なれば、性来の悪魔性が——嗜虐しぎやく性が、ムクムクと胸へ込み上げて来、この純情の処女おとめの心を、嫉妬さしぎと猜疑さしぎとで、穢してやろうという祈願ねがいに駆り立てられるのであったが、今は反対で、

（気の毒な！ こんな純情の処女の心を苦しめてはいけない）と思った。そこで快活に笑い、

「いやいや栞殿、心配はご無用になされ、純情の殿ごなりや、どのような性悪る女であろうと、誘惑の手延ばされぬものでござる。……それにしても、栞殿のような娘ごに、そのようにまで想われる男、果報者の代表、うらやましい次第、何んという名のお方でござるかな？」

「はい、そのお方の名は……」

葉が云いかけた時、紙帳の外から、

「やア、ここに紙帳が釣つてあるわ！ ……やア、左門めの紙帳じゃ！」

という声が聞こえた。

頼母の声であつた。

「左門！」と、その声は叫んだ。「我は伊東頼母、先夜は府中武蔵屋で、むぎむぎ取り逃がしたが、再度ここで巡り合つたは天の祐たすけ！ 父親の敵、今度こそは遁のがしはせぬ！ 出て来て勝負を致せ！」

「頼母様アーツ」

と、その声を聞いて、まず呼ばわつたのは、葉であつた。

「頼母様アーツ、妾、葉でござりまする！ ……今日あたりお帰りくださりませうかと、心待ちに待つておりましたところ！ おお、やつぱりお帰りくださりましたか！ ……それにしたしても変つた所で！ 頼母様アーツ」

と、葉は、叫び叫び、紙帳の裾をかかげ、外へ出ようとした。しかし、その葉は、背後から、左門の手によつて引き戻された。

「伊東頼母氏か。……紙帳の中におる者は、いかにも五味左門、貴殿父上の敵じゃ！ ……が、頼母殿、紙帳の中には、もう一人人ひとがいる！ 飯塚薪左衛門殿の娘葉殿じゃ！ ……いや、驚き申したわ。葉殿に恋人のあること、たった今、この帳中で、葉殿より承つてござるが、その恋人が、貴殿、頼母殿であろうとは！」

左門は、そう云い云い、刀の柄を右手で掴んだが、一振りすると鞘を飛ばせ、蒼光る刀身を、頼母のいると覚しい方へ差し付けた。

「悪縁といえ、よくよくの悪縁でござるよの」と左門は、辛辣な声で云いつづけた。

「貴殿のお父上を討ち取ったばかりか、武蔵屋では、貴殿の恋人、博徒五郎蔵の女お浦という者を、拙者この帳中で。……しかるに、同じこの紙帳の中で、貴殿第二の恋人、葉殿を。……重なる怨みとはこの事！ フツフツ、これでは貴殿、拙者を見遁がすことなりますまいよー！」

悲痛の頼母

「頼母様アーツ」

と葉は、左門の手から遁がれよう遁がれようと身悶えしながら、必死となって叫んだ。

「左門様が、あなた様のお父様の敵などとは夢にも知らず、先刻さきほどから、紙帳の中で、物語りいたしましたは真実ではござりますが、何んの貞操みさおを！」

「それは真実じゃ！」

と、左門は、意外に真面目の声で云った。

「葉殿は、純潔じゃ。……それから……」と云ったが、云い止めた。

しかし、やがて決心したように、誠実のこもった声で、

「先夜、武蔵屋で、お浦と申す女子を手に入れたよう申したが、これも嘘じゃ！ ……拙者に関する限り、お浦という女は純潔じゃ！ ……本来、拙者は女嫌いだな。いわば女性嫌忌性なのじゃ！」

(それにしても)

と、左門は、自分で自分を疑った。

(どうして、こう、俺は素直な気持ちになつたのである。……先夜は、頼母めを苦しめようために、手を触れさえしなかつたお浦という女を、手に入れたなどと偽いつわり云つたのに。……いまに至つてそれを取り消すとは)

——左門には、その理由がわからなかったが、しかし、その理由は、朧というような、本当に無邪気な、純な処女と、罪のない、子供同士のような話をし、腹の底から笑ったところが影響し、彼の心が、人間本来の「善」に帰ったからであるかもしれない。

「動くか、頼母！」

しかし、突然、左門は一喝し、グルリと体を廻し、紙帳の、側面の方へ向き、刀を差し付けた。

「紙帳の内と外、見えぬと思うと間違うぞよ。……紙帳の中にいる左門こそ、不動智の位置にいる者じゃ。左へも右へも、前へも後へも、十方八方へ心動きながら、一所へは、瞬時も止まり居坐らぬ心の持ち主じゃ。眼光は、紙背に徹するぞよ！……嘘と思わば証拠を挙げようぞ。……汝、今、紙帳より一間の距離へだたりを持ち、正面より側面へ移ったであろうがな。……現在は同じく一間の距離を持ち、紙帳の側面、中央なかばの位置に立ち、刀を中段に構え、狙いすましておろうがな。……動くか！」

と、またも大喝し、左門は、グツと左へ体を向け、紙帳の背面へ刀を差し付けた。

紙帳は、二人を蔽うて、天蓋のように、深く、静かに、柔らかく垂れていた。縦縞のように、時々襞が出来るのは、風が吹きあたるからであろう。

ここは紙帳の外である。――

頼母は、刀を中段に構え、紙帳から一間の距離を保ち、紙帳を睨にらんで突っ立っていた。全身汗を掻き、顔色蒼褪め、眼は血走っていた。お浦と典膳とを戸板に載せ、五郎藏の乾児二人に担がせ、ここまで走って来た頼母であった。見れば、林の空地に、見覚えのある、五味左門の紙帳が釣つてあつた。驚き喜び、宣りかけたところ、意外も意外、恋人朧が、その中にいて、声を掛けたとは！……それが、殺人鬼のような左門の手中にあつて、身うごきが出来ずにいるとは！

これだけでも頼母は、逆上せざるを得なかつた。その上、劍技にかけては、段違いに優れた左門によつて、紙帳の中から、嘲弄されたのである。頼母は文字通り逆上した。

（父の敵の左門、討たいで置こうか！ 恋人の朧、助けしないで置かれようか！）

思うばかりで、体はほとんど自由を欠いていた。眼前の紙帳が、鉄壁のように彼には思われた。鉄壁を貫いて、今にも、左門の劍が、閃めき出るように思われた。腕が強こわばり、呼吸がはずみ、足の筋が釣つた。それでも、彼は、隙を狙うべく、紙帳を巡つた。帳中の左門によつて、見抜かれてしまった。

手も足も出ないではないか。

常磐木と花木と落葉樹との林が立っている。鳥が翔け過ぎ、兎が根もとを走り、野鼠が切り株の頂きに蹲うすくま居り、木洩れ陽が地面に虎斑を作っている。

そういう世界を背後に負い、血痕斑々たる紙帳を前にして、頼母は、石像のように立っていた。差し付けた刀の切っ先を巡って、産まれたばかりらしい蛾が、飛んでいる。

と、その時、

「頼母様アーツ」

と呼ぶ、凄愴の声が聞こえて来た。

頼母のいる位置から、十数間離れた、胡頹子ぐみと野茨くさむらとの叢の横に、戸板が置いてあり、そこから、お浦が、獣のように這いながら、頼母の方へ、近づきつつあった。頼母様アーツと呼んだのは、お浦であった。彼女の眼に見えているものは、紙帳であり、彼女の耳に聞こえたものは、頼母と左門との声であった。武蔵屋の紙帳の中で、二度まで気絶させられた怨みある左門が紙帳の中にいる！ その左門は、自分にとっては、救世主とも思われる頼母様の親の敵だという！ おのれヤレ左門、怨みを晴らさで置こうか！ 懐かしい頼母様！ お助けしないでおられようか！ ……一人には怨みを晴らし、一人には誠心まごころを捧げると、息絶え絶えながら、彼女は、紙帳の方へ這って行くのであった。

殺気林に充つ

お浦は、獣のように這つて進んだが、渋江典膳は、よろめいたり、膝を突いたり、立ち木に縫つたりしながらも、さすがに立つて、この時、道了塚の方へ歩いていった。

そう、彼は、ここまで運ばれて来て、ここが、道了塚附近の林であることを知るや、

(この負傷では、どうせ命はない。では、せめて、数々の思い出と、数々の罪悪とを残している道了塚で、息を引き取ろう。……東十郎への罪滅しにもなれば、懺悔にもなる)

とこう思つて、そつちへ歩きだしたのであつた。

歩くにつれて、足からも手からも血がしたたつた。

しかし彼が道了塚まで辿りついたなら、南無妙法蓮華経と刻られた碑にもたれ、天国の剣を放心したように握り、眼を閉じ、首を傾げ、昔の記憶を蘇生らせようと、じつと思いに耽つている、飯塚薪左衛門の姿を、見かけなければならぬだろう。

そう、薪左衛門は、そういう姿勢で、この頃、道了塚の頂きに坐っていた。

彼の顔には苦悶の表情があり、彼の体は不安に戦っていた。白髪には陽があたり、銀の

ように輝いていたが、その頭は、高く上がりそうもなかった。

人間の思考の中に、盲点というものがある。その盲点の圈内にはいった記憶は、奇蹟的事件にぶつからない限り、思い出されないといいことである。何故薪左衛門が、来栖勘兵衛と、この道了塚で決闘したか、その理由の解らないのも、その盲点に引つかかっているからであるらしい。

そうして、さつき聞こえて来た、塚の下からの悲しい叫び声、

「秘密は割かない、裏切りはしない、助けてくれーッ」

という声の主の何者であるか？ 何んでそう叫ぶのか？ それらのことの解らないのも、盲点の圏内に、その記憶が引つかかっているかららしい。

ところで……広々と展開ひらけている耕地を海とし、立ち連なっている林を陸とすれば、道了塚は、陸に近い、小島と云ってよく、その小島にあつて、陸の林の一方を眺めたなら、林の縁を、人家の方へ一散に走って行く、二人の人影を見たであろう。戸板おを昇き捨て、素早く逃げ出した五郎蔵の二人の乾兎こぶんであつた。二人の走って行く様は、檻おから解放された獣かのように軽快であつた。

と、その二人の走って行く方角の、十数町の彼方あなたから、此方こなたを目差し、二十人ほどの一

団が、林へ駆け込んだり、耕地へ出たりして、走って来るのが見えた。

松戸の五郎蔵と、その乾児たちであった。

五郎蔵の左右に従っているのは、角右衛門と紋太郎とで、この二人の注進により、五郎蔵は、頼母によつて、自分の乾児たちが殺されたことを知り、復讐のために乾児を率い、農家の納屋へ馳せつけた。乾児たちの死骸が転がっているばかりで、頼母の姿も、お浦、典膳の姿も見えなかつた。母屋の門口で、種を選り分けていた老婆に訊くと、戸板を担つた三人の者が、林の中へ駆け込んだと云う。

(頼母が、お浦と典膳とを戸板に載せ、生き残つた俺の乾児に担がせ、逃げたのだ)

と、五郎蔵は察した。怒りと、嫉妬とが彼を狂気のようにした。

「どこまでも追っかけ、探し出し、頼母、典膳、お浦、三人ながら叩つ殺せ！」

こうして一団は林へ駆け込み、こつちへ走つて来るのであつた。乾児の中には、竹槍を持つている者もあつた。もう性急に脇差しを抜いて、担いでいる者もあつた。武士あがりの、逞ましい顔の五郎蔵は、額からも頤からも汗をしたたらせ、火のような息をしながら、先頭に立って走っていた。

殺気は次第に道了塚と、その附近の林とに迫りつつあつた。

それなのに、紙帳の中の、何んと、今は静かなことだろう！ 左門の声も葉の声も聞こえず、咳しわぶき一つしなかつた。

頼母は、そういう気味悪い沈黙の紙帳を前にして、石像のように立ち尽くしていた。構えている刀の切っ先が顫えているのは、彼の心が焦慮している証拠であつた。

（何故沈黙だまっているのだろう？ 何が行われているのだろう？ ……葉はどうしているのだ？ ……いや葉は何をされているのだろう？）

恋人の葉が、殺人鬼のような左門と、紙帳の中にいる。二人ながら黙っている。何をされてきているのだ？ もしや咽喉でも絞められて？ ……

これと思うと頼母の腸はらわたは搔むしきられるようであつた。

必死のお浦

この時、遙かの林の奥から、喊声こゑが聞こえて来た。五郎蔵たちの一団と、戸板を置き捨て、逃げて行つた二人の乾児めくりあとが邂逅あひ、二人の乾児によって、頼母と、お浦と、典膳との居場所を知つた五郎蔵たちの揚げた声であつた。

「逃がすな！」 「もう一息だ！」

二十数人の一団は、藪を廻り、木立ちを巡り、枯れ草を蹴開き、無二無三に走った。

「いたぞーッ」

という叫びをあげたのは、先頭切っていた五郎蔵であった。

「左門などには眼をくれるな！ 頼母とお浦と典膳とを仕止めろ！」

こう五郎蔵が叫んだ時には、長脇差しを抜いていた。

悪罵と怒号とが林を揺すり、乾児たちの抜いた、二十数本の脇差しが、湾に寄せた怒濤が、高く上げた飛沫しぶきのように白光つた。そう、五郎蔵たちの一団は、紙帳を背後にし、この時ようやく這い寄り、足へ縋り付いたお浦を、縋らせたまま、蒼白の顔色をし、刀を構えて立つた頼母を、引つ包んで討ち取ろうと、湾のように左右に開き、立ち向かったのであった。

「頼母様アーツ」とお浦は叫んだ。「妾ゆえに、お気の毒なこの憂き目！ ……想われたあなた様の因果！ さぞ妾が憎いでございましょう！ ……一思いにその刀で、妾をお殺しくださりませ！ ……あなた様に殺されましたら、本望の本望！ 頼母様アーツ」

頼母は切齒し、

「この場に臨んで、何を繰り言！ 放せ足を！ ……一大事の場合、邪魔いたすな！」
足を上げて蹴り、蹴られて、紙帳の裾にまろ転び寄ったお浦を、帳中から手が出て、引き入れた。

瞬間、白刃が、十数本、頼母に降りかかった。

それを頼母は、左右前後に、切り、防ぎ、そうして退き、ジリジリと退き、松の木の幹に背中をもたせ刀を構え、大息を吐き、八方へ眼をくばり、

（俺は、これから、どうなるのだ？）

と思つた。

この頼母の心境こころは、地獄さながらであつたが、帳中へ引き入れられたお浦の心境も、地獄さながらであつた。

——ここは紙帳の中である。

お浦は、左門へ、むしやぶりつこうとしていた。

「おのれ、
汝、左門ーン」

それは、血を吐くようなお浦の声であつた。

「汝のために、武蔵屋で、紙帳の中へ引き入れられ、気絶させられ、悩乱させられたばかり

りに、頼母様に差し上げようと思つた天国様を川へおとし、そればかりか、五郎蔵に捕えられ、『俺を裏切り、頼母へ心中立てした憎い女！ 鬻り殺しにしてくれろ』と、昨日まで府中で責め折檻^{せつかん}、今日はいよいよ息の根とめると、百姓家の納屋へ戸板でかつぎこまれ、……そこを嬉しや、頼母様に助けられ、ここまでは連れられ遁がれては来たが……汝、左門ンーン……汝とは何んの怨みもないこの身、部屋を取り違えたが粗忽^{そごつ}といえは粗忽……そのような粗忽、いまして、放してさえくだされたら、何んの間違ひもなかつたものを！ ……汝の悪逆の所業から、それからそれと禍いを産み、頼母様を五郎蔵に怨ませ、アレアレあのように紙帳の外では、五郎蔵めに頼母様が！ ……」

胸はあらわ、髪は崩れ、頸には、折檻された痕の青あざがある。——そういうお浦が、怨みと怒りで血走つた眼を据え、食い入るように、下から、左門を睨み、地を這い、じりじりと進み、武者振りつこうとしているのであつた。

純情の二人の女

左門は、右手に、抜いた関ノ孫六の刀を握り、それを、お浦へ差し付け、左手では、紙

帳の裾をかかげ遁がれ出ようとする葉の帯を掴んでいた。

「お浦、事情を聞けばまことに気の毒、さぞ左門が憎いであろうぞ！　が、今は甲斐ない
繰り言！　過ぎ去った事じゃ！　……」

と云つたが、抜き身を地へ置くと、その手を頤の下へ支い、眉根へ寄せたがために、藪
睨みのようになって見える瞳で、つくづくとお浦の顔を見詰め、

「これまで以前の拙者なりや、その方より紙帳へ近附いたからには憂き目を見たは自業自得と、突
つ放すなれど、いま現在の拙者の心境ではそれは出来ぬ。気の毒に思うぞ！　詫び申すぞ！

……さりながら一切は過ぎ去つたこと、繰り返しても甲斐はない！　……今後は贖罪あ
るばかりじゃ！　……お浦、そちのその重傷では、生命取り止むること覚束ないかもし
れぬ。そこで云う、こんじよう今生唯一の希望を申せ！　……左門、身に代えて叶えてとらせる
！」

「希望!?　……唯一の、今生の希望!?!」

と、お浦は、すでに天眼になりはじめた瞳、小鼻がにわかにな落ちて、細く険しくなつた
鼻、えぐ剝られたように痩せ落ちた顚顚や頬、そういう輪廓を、黒い焰のような乱髪で縁取
り、さながら、ほんにや般若の能面を、黒ビロードで額縁したような顔を、ヒタと左門へ差し向

けたが、

「おおそれなら、頼母様のお命を！ 才、お助けくださりませ！ ……五郎蔵の乾児大勢に、ああ取り囲まれては、所詮助からぬあのお方のお命！ ……お助けくださらば海山のご恩！ ……あなた様への怨みも消えまする！ ……左門様アーツ」

「左門様アーツ」

と、するとこの時、もがいて、ようやく、左門の手から遁がれた葉が叫んだ。

「妾からもお願いいたしまする！ ……頼母様のお命お助けくださりませ！ ……、聞けば頼母様、五郎蔵一味大勢の者に取り囲まれ、ご危難とか！ ……おとおお、あの物音が、頼母様討とうの物音とか！ ……掛け代えのない大切の頼母様、才、お助けくださりませアーツ」

乱れた衣裳、髻千切れた髪、蒼白な顔、嵐に揉まれる牡丹桜とでも云おうか、友禅の袖の袖口からは、緋の襲着がこぼれ、半分解けた帯の間からは、身悶えするごとく、鴉色の帯揚げがはみ出し、髪へ掛け鹿の子の布が、蠟細工のような耳朶のあたりで揺れている態など、傷ましく哀れではあったが、尚美しさ艶かしさを失わない女の姿であった。

「十二、掛け代えのない大切の頼母様？」

と、お浦は、はじめて栞へ眼をつけたが、

「汝わりやア何者？ ……見ればまだ小娘！ ……それなのに、妾の、頼母様のことを！ ……」

気も遠々に、次第に地面へ伏し沈もうとする体を、またも猛然と揺り起こし、しかし、立ち上がる気力はなく両手を地に突き、栞の方へお浦は這い寄るのであった。

「さては汝おのれは、頼母様に、横恋慕をしてこのお浦から……」

栞も今は一生懸命、胸を反らせ、膝を揃え、膝の上へ両手を重ね、毅然とした態度となつたが、

「横恋慕などとは穢らわしい、そなたこそ誰じゃ？ そなたこそ横恋慕！ ……妾はこの土地の郷土飯塚薪左衛門の娘栞！ ……頼母様とは将ゆくすえ来を誓約ちかつた仲！ ……邪よこしまの恋などではござりませぬ！ ……それを横恋慕などと！ ……」

「吠ほぎくな小娘！」

と、お浦は、南国に住むという傘からかさ蛇へびが、敵に襲いかかるように、ユラユラと背延びをし、両手を高く上げたが、

「命取られるまでに折せつ檻かんされ、颯なぶり殺しにかけられたお浦、それも頼母様のため！ これが邪よこしまの恋か！ ……おとおお、これが邪よこしまの恋か！ ……恋？ なんの！ 恋なもの

か！ おおおお、恋などという生やさしいものは、妾にとっては、遠い昔の物語！ ……
 眞実まことの人間に復活かえろうと、久しい間、男嫌いで通して来たものを！ ……恋？ それも
 邪よこしままの恋？ ……何んの何んの頼母様は、わたしにとつては恋以上のお方！ ……救世すくいぬ
 主し！ ……おおお、でも、この妾の心！ ああやつぱり恋かしら？ ……恋なら恋で
 ままよ！ その恋ひたむきにとげるまでよ！ ……吠ほぎいたな小娘！ 頼母様とは将来を誓ちか
 約かつた仲と！ ……まことなりや、その仲裂かいで置こうか！ ……汝おのれを殺してエーツ」
 と、バツと蔽おほいかかろうとした。

紙帳の外は修羅場

瞬間、白光が、二人の間を裁断たちきつた。

地に置いてあつた抜き身を取り上げ、左門が二人の間へ突き出したのであつた。

「待て！ ……さりながら、純情と純情！ ……ハーツ」

と、太い息をした。

五郎蔵の鼻ひいき屑を受けていながら、五郎蔵を裏切り天国の剣を持ち出し、頼母に渡そうと

したこと、邪まの所業しわざには相違なかつたが、生命をかけての頼母への執着ぶりから云えば、お浦の想い、純情といわずして何んだらう。

左門のような人間をして、腹の底から笑わせた葉の無邪気さ！ その葉の頼母への恋が、純情であることはいうまでもなかつた。

その純情と純情とが、狭い紙帳の中で、今や噛み合おうとしているのであつた。

(俺には扱い兼ねる)

左門は太い息をしたのである。

「葉殿」

と、やがて左門は云つた。

「拙者、先ほど、阿婆あばず擦れた女などが、そなたの恋人へ付きまとうやもしれずと申しましたな。……お浦こそその女子！ ……しかし、そなたの、頼母殿を想う念力強ければ、お浦など、折しゃくぶく伏ふくすること出来ましょう！ ……弱ければ、折伏されるまでよ！ ……お浦！」

と、お浦を、不愆ふびんそうに見詰め、

「そちの頼母殿への執着、浅間しいともいえれば不愆ともいえる！ ……しかし思え！

そちの命は助からぬやもしれぬ。死に際を潔うせよ！ …… 葉殿へ恋を譲れ！ …… そこまで強い想い、譲るは辛いであろうが、譲れば、かえつてそちの煩惱、まず第一に救われるであろうぞ！ …… 葉殿も救われ、頼母殿ものう。 …… 葉殿は無邪気な処女、頼母殿を、荒んだ仇し女などに取られるより、まだしも葉殿に譲った方がのう。 …… さりながら、女の世界での出来事は、男の世界からはうかがいしること出来ぬわい！ そちたち委せ！ …… おさらばじゃ！」

刀を引くと立ち上がり、紙帳の側面へ身を寄せたが、

「二人ながら安心いたせ！ 二人の希望を叶え、拙者、五郎蔵はじめ、五郎蔵の乾児どもを、斬つて斬つて斬りまくり、頼母殿の命はきつと救う！ …… 注意いたせ！」

と、左門は訓めるように云つた。

「二人ながら紙帳を出るな！ …… 紙帳こそは拙者の家、わが城砦、この中にそちたちいる限りは、拙者身をもつて護つてとらせる！ 出たが最後、拙者関係らぬぞ！」

幾多の悲劇を経験した紙帳は、またも悲劇を見るのかというように、尚睨み合っている二人の女と、今や紙帳の裾に蹲居り、刀を例の逆ノ脇に構え、斬つて出さずべき機会を窺い、戸外の物音を聞きすましている左門とを蔽うていた。頼母によつて斬られた五郎蔵の

乾児たちの血が、新しくかかつて、古い血の痕の上を、そうして左右を、新規に深紅に染め、それが、線を為し、筋を為し、円を描き、方形を形かたちづく成り、流れ凝り、紙帳の面貌おもては、いよいよ怪異を現わして来た。

が、紙帳の外は？

ここ紙帳の外は、修羅鬪争の巷であった。

頼母は既に紙帳の側から離れ、ふたたび立ち木の幹へ背をあて、群がり寄せ、斬りかかろう斬りかかろうとする五郎蔵の乾児たちを睨み、自分もいつか受けた数力所の負傷きずで、

——斬った敵方の返り血で、全身朱あけに染まり、次第に迫る息を調べ、だんだん衰える氣力を励まし励まし、……

そういう頼母の眼に見えているのは、正面乾児たちの群の中に立ち、彼を睨んでいる松戸の五郎蔵の姿であった。

憎悪にくしみに充ちた五郎蔵の眼がグツと据わり、厚い唇が開いたと見てとれた瞬間、怒号する声が聞こえて来た。

「憎いは頼母、親の敵に邂逅めくりあったという、義によって助太刀してやったところ、恩を仇に、お浦めをそそのかし、天国の剣を持ち出させたとは何事！ 息の根止めずに置かれよ

うか！ やア乾児ら、うろうろいたさず、頼母めを討つてとれ！ ……おおお、お浦め、紙帳の中へ引き入れられたまま、いまだに出ぬぞ！ ……紙帳の中には左門がいる筈、その左門め、武蔵屋でも、同じ紙帳の中へ、お浦めを引き入れて……許されぬ左門！ やア乾児ら、左門めを討つてとれ！ ……典膳めの姿が見えぬぞ！ 典膳めはどうした？ ……俺の過去などと申して、あることないことを云い触らす瘦せ浪人！ 生かしては置けぬ！

喚きちらし、地団駄を踏む五郎蔵の心境も、苦しいものに相違なさそうであった。

「やあ汝ら手分けして典膳を探し出せ！」

声に応じて数人の乾児が、木立ちを潜つて走つて行く姿が見えた。

「やア松五郎！」と怒鳴る五郎蔵の声がまた響いた。「紙帳を窺え！ 紙帳の中を！」

外光の中で見る紙帳の気味悪さ！

左門の任侠

今は中からは人声は聞こえず、
まわり 周囲の、さけびこえ 叫喚、どなりこえ 怒号、けんげき 剣戟の響きを嘲笑うかのよ

うに、この、多量に人間の血を浴びた長方形の物像は、木立ちと木立ちとの間に手を拵げ、弛んだ裾で足を隠し、静かに立っている。吸っても吸っても血に飽かないこの怪物は、これまでも随分血を吸ったが、今日こそはそれにも増して、充分に吸うぞというかのように、静かな中にも胴顛いをさせている。そう、微風につれて、ゆるやかな弛みを作ったり、幽かな襞を作ったりしているのであった。裾の一所に、背を光らせた蜥蜴がいて、這い上がろうとし、短い足で紙帳を搔いているのも、魔物めいていて不気味であった。

と、その紙帳目掛け、松五郎なのであるう、一人の乾児が、抜き身を引つさげたまま、仲間の群から駈け抜け、走り寄るのが見えた。が、その体が紙帳へ寄り添ったと見えた瞬間、悲鳴が起こり、丸太のようなものが一間ばかり飛び、足を股から斬り取られた松五郎が、鼠煙火のように地上をぶん廻り、切り口から、龍吐水から迸る水のように、血が迸り、紙帳へかかるのが見えた。

すぐに紙帳の裾がパツクリと口を開け、そこから身を斜めにし、刀を袖の下にした、瘦せた長身の左門が、ソロリと潜り出て来た。

「出たーッ」

と、五郎蔵は、自分が襲われたかのように叫んだ。

左門は紙帳を背後にし、頬の削けた蒼白い顔を、漲る春の真昼陽に晒らして立ち、少しまぶしそうに眼をしばたいた。

「出た！ 本当に出た！ 左門が！」

立ち木に背をもたせ、五郎蔵とその乾児たちとを睨んでいた頼母も、紙帳を出た左門を認め、声に出して叫んだ。悪寒が身内を氷のように走った。

（絶体絶命！ ……俺はここで討たれるのか！）

大勢の五郎蔵の乾児たちを相手に斬り合うだけでさえ、今は手に余っていた。そこへ、いよいよ、自分より段違いに腕の勝れた左門が現われ出たのであった。勝ち目はなかった。

（残念！ 返り討ちに逢うのか！ ……葉殿を眼の前に置きながら、返り討ちに！）

眩みかかった彼の眼の、その眼界を素走って、五郎蔵の乾児数人が、左門へ襲いかかって行くのが見えた。と、その乾児たちを無視したように、左門の豹のような眼が、頼母の方へ注がれたが、

「頼母氏！」

という声が聞こえて来た。

「紙帳の中の二人の女子——葉殿とお浦との純情に酬いるため、二人の希望のぞみを入れ、拙者、

貴殿へ助太刀つかまつるぞ。……ただし、拙者と貴殿とは讐敵かたき同士、恩に着るに及ばぬ、恩にも着せ申さぬ！……五郎蔵！」

と左門の眼が五郎蔵の方へ向いた。

「武蔵屋では、よくも拙者に手向かいいたしたな！ 今日返礼！ 充分に斬るぞ！」

「黙れ、犬侍！」

五郎蔵は躍り上がり躍り上がり、

「想いを懸けた俺の女を！ ……それを汝おのれ、よくもよくも！ ……汝こそ犬じゃ！ ……

やア野郎ども犬侍を叩つ殺せ！」

声に応じ、竹槍を持った乾児が、左門眼がけて走り寄ったのが見えた。と、左門の姿が無造作に一方に開き、竹槍の柄を掴んだ。と思う間もなく、槍を掴まれた乾児が、よろめいて前へ出たところを、脇下から肩まで払い上げた。

「野郎ども一度にかかれ！」

怒号する五郎蔵の声に駆り立てられ、三人の乾児が左右から斬ってかかった。

「頼母氏見られよ！」

と、左門の声が響いた。と同時に、一人の乾児の斬り込んで来た脇差しを迎え、それよ

り速く、その脇差しの上へ、自分の刀を重ねるように斬り付け、乾児の眉間を頤まで割り、「これぞ我が流における『陽重の剣』でござるぞ！ ……先ほども紙帳の中より申しましたとおり、貴殿の剣法いまだ未熟、なかなかもつて拙者を討つこととなりますまい。 ……されば拙者の剣法を仔細に見究め、拙者を討つ時の参考となされい！」

と呼ばわり、もう一人の乾児が、味方が討たれたのに怯え、立ち縮すくんでいる所へ、真一文字に寄り、肩を胸まで斬り下げ、

「頼母氏、今の斬こそは、我が流における『青眼破り』でござるぞ！ 相手、青眼に付けて、動かざる時、我より進んで相手の構えの中へ入り、斬るをもってこの名なでござる！」
と大音に呼ばわった。

左門の俠骨

いまだに立ち木に背をもたせ、五郎蔵の乾児たちと立ち向かっていた頼母は、眼に左門の働きを見、耳に左門の声を聞き、茫然とした気持ちにならざるを得なかった。それは悲喜交こもこもの感情ともいえれば夢に夢見る心持ちとも云えた。左門が自分の味方として現わ

れ出て来たことは、何んといつても頼母にとつては有難い嬉しいことであつた。しかし討たねばならぬ父の敵から助けられるということは、苦痛くるしみであつた。とはいえ現在いまの場合においては、その苦痛は忍ばなければならなかつた。もし五郎藏一味に自分が殺されたならば、左門を討つことが出来なくなつてしまふからである。今は、何を措いても、五郎藏一味を殲滅せんめつするか追い払うかしなければならなかつた。それには左門からの助太刀は絶対に必要のことであつた。

頼母は勇氣とみに加わり、今までは守勢の身であつたのが、攻勢に出、疾風のように五郎藏の乾兒どもの中へ斬り込んだ。

胆を奪われた乾兒たちが狼狽し、散つて逃げた時、

(葉殿は?)

と、こういう場合にも、危険に曝さららされている恋人のことが心に閃めき、頼母は、逃げた乾兒どもを追おうともせず、身を翻えすと一気に、紙帳へ駆け寄り、左門の立っている位置とは反対の、紙帳の裏側に立ち、紙帳を背にし、もう追い縋つて来た五郎藏の乾兒六、七人を前にし、構え込んだ。

五郎藏の乾兒たちは、今は、二派に別れて立ち向かわなければならぬことになつた。

十数人の乾児たちは、左門へ向かった。

と、この時、左門の高く呼ぶ声が聞こえて来た。

「頼母殿、心得てお置きなされ！ 敵大勢四方よりかかるとも、一方へ追い廻せば結局は一人でござるぞ！ すなわち殿陣しんがりの一人が敵でござるわ！」

この言葉を証拠立てるためらしく、左門は突き進むと、左端の一人を斬り斃し、戻りの太刀でもう一人を斬り斃し、狼狽した乾児たちが紙帳を巡って右手の方へ逃げるのを、隙かさず追い、逃げおくれた一人を、肩から背骨まで斜めに斬り下げ、紙帳の角を廻って尚追った。逃げた乾児どもは、頼母のいる紙帳の裏側まで来、そこに集まっていた七人の仲間とぶつかつた。頼母に向かつていたその七人の乾児どもは、逃げて来た十数人の仲間の渦中に捲き込まれ、これも狼狽し後から左門が追って来るとも知らず、これは左手の方へ逃げだしたが、血刀を振り冠つた左門の姿を見ると、仰天し、悲鳴を上げ、四方へ散り、紙帳から離れた。その乾児どもを追って、左の方へ走り出した頼母は、パツタリ左門と顔を合わせた。

「左門氏、ご助力、忝けのうござる！」

「黙らっしゃい！」

と左門は喝した。

「貴殿と拙者とは讐敵同士！ 恩には着せぬ、恩にも着たもうな！」

「……………」

もう二人は別れていた。

左門に追われて逃げた十数人の五郎藏の乾児たちは、紙帳の角から少し離れた^{あた}辺りで一団となり、左門を迎え撃つ姿勢をととのえた。しかし左門は物の数ともせず、駆け寄ると、^{まえ}以前と同じく、左端にいる一人を斬り斃し、返す刀で、もう一人の乾児を斬り伏せ、これに恐怖した乾児どもが、ふたたび逃げ出したのを、紙帳に接近した位置を保ちながら追ったが、ふと、紙帳越しに、頼母の方を見た。頼母は乾児どもに包囲されてい、一人の乾児が背後から竹槍で、今や頼母の背を突こうとしていた。左門はやにわに小柄^{こづか}を抜き、投げた。小柄は、紙帳の上を、飛び魚のように閃めき飛んだ。

頼母は、背後で悲鳴が起こつたので、振り返って見た。竹槍を持った男が、咽喉^{のど}へ小柄を立て、地面をのたうっている。事情が悟^しれた。

「左門氏、あぶないところを…………お礼申す！」

「貴殿と拙者とは讐敵同士……………」

と左門は、逃げおくれた一人を、背後うしろざまに斬り伏し、

「恩に着るな、恩にも着せぬと申した筈じゃ！」

「……………」

この時まで五郎蔵は、乾児たちと離れて立ち、乾児たちの働きを見ていたが、左門と頼母とに、乾児たちが見る間に、次々に斬つてとられるので、怒りと恐怖と屈辱とで躍り上がり、頼母眼掛け駈け寄ろうとしたとたん、

「オ、親分ーン」

という声が、林の中から聞こえて来、一人の乾児が木の間こまをくぐって走って来た。

「テ、典膳めは、道了塚の方へーッ」

「おおそうかーッ」

と、五郎蔵は応じたが、

「典膳だけは、俺の手で！ ……そうでないと、安心が！ ……」

道了塚の方へ走り出した。

謎解かれる道了塚

この頃典膳は、道了塚まで辿りついていて、彼の肉体も精神も弱り果て、息絶え絶えであった。彼は塚の裾の岩へ縋り付いて呼吸を調えた。彼にとつて道了塚は、罪惡の巢であり仕事の拠点であり悲惨慘酷の思ひ出の形見であった。彼は眼を上げて塚を見上げた。二十年もの年月を経ておりながら、この自然物は昔とほとんど変化がなかった。岩は昔ながらの形に畳み上げられてあり、苔も昔ながらの色にむしており、南無妙法蓮華經と彫刻まられてある碑も、昔ながらの位置に立っていた。その碑面が春陽を受けて、鉛色に光っているのも昔と同じであった。

彼は懐かしさにしばらく恍惚うっとりとなり体の苦痛を忘れた。しかし彼は、すぐに、碑に体をもたせかけ、手に抜き身を持った老人が、放心でもしたように、茫然と、塚の頂きに坐っているのを認め、驚き、尚よく見た。

「あッ」と典膳は思わず声を上げた。

それは、その老人が、昔の頭、——二人あつた浪人組の頭の一人の、有賀又兵衛であつたからである。

「オ、お頭ア—ッ」

と、典膳は悲鳴に似たような声で呼びかけた。

「有賀又兵衛殿オーツ」

——有賀又兵衛……現在の名、飯塚薪左衛門は、昔の、浪人組の頭目だった頃の名を呼ばれ、愕然とし、毛をむしられた鶏のような首を延ばし、声の来た方を見た。

彼の眼に見えたものは、塚の裾に、塚の岩組から、栓かのように横へはみ出している小岩、それに取り縋っている全身血だらけの武士の姿であった。

「誰じゃ？」

と云いながら薪左衛門は、立てない足をいざ躦らせ、塚の縁の方へ身を進めた。

「渋江典膳にござりまする。……二十年以前まえ浪人組栄えました頃、組の中におりました、渋江典膳にござりまする！」

「渋江典膳？ おお渋江典膳！ ……存じおる！ 存じおるとも！ 組中にあつても、有力の人物であつた！ ……来栖勘兵衛と、特に親しかつた筈じゃ」

「さようにござりまする。私は来栖勘兵衛お頭の秘蔵の腹心、伊丹東十郎氏は、有賀又兵衛お頭の無二の腹心として、組中にありまして、重く使用もちいられてござりまする」

「伊丹東十郎？ ……おお伊丹東十郎！ ……覚えておる覚えておる！ わしに一番忠実

の男だった。……どうして今日まで思い出さなかったのでしょうか？ ……おおそういえば、さつき聞こえて来たあの声、『秘密は剖かない、裏切りはしない、助けてくれーッ』と云ったあの声は、まさしく伊丹東十郎の声だった。……おお、俺はすっかり思い出したぞ。

……あの時、二十年前、甲州の鴨屋方を襲い、莫大もない金銀財宝を強奪し、帰途、五味左衛門方を訪れ、天国の剣を強請り取り、それを最後に組を解散し、持ち余るほどの財を担い、来栖勘兵衛と俺と、そちと伊丹東十郎とで、この道了塚まで辿って来、いつもの隠所へ、財宝を隠匿したが……」

「その時私は、勘兵衛お頭の依頼により、素早く天国の剣を持ち逃げして、林の中へ隠れましてございます」

「財宝を隠匿したが、その時突然勘兵衛めは、伊丹東十郎を穴の中へ突き落とし、『此奴さえ殺してしまえば我らの秘密を知る者はない』と申しおった」

「深い穴の底から聞こえて参りましたが、東十郎の叫ぶ『秘密は剖かない、裏切りはしない、助けてくれーッ』という声でござりました。……林に隠れておりました私の耳へまでも、届きましてござりまする」

「おのれ不埒の勘兵衛、従来、奪った財宝を、百姓ばらに担がせて運び、隠匿した際に

は、秘密を他へ洩らさぬため、百姓ばらを、財宝と一緒に、穴の中へ、切り落としたことはあるが、同じ仲間を、穴へ落として生き埋めにするとは不義不仁の至り、直ちに引き上げよと拙者申したところ、突然勘兵衛め、拙者に切り付けおつた」

「あなた様が刀を抜かれ、勘兵衛めと立ち合われるお姿が、林にかくれおりました私にも見えましてござります」

昔の同志、今の讐敵

「ああようやく、私の記憶は蘇生^{よみがえ}つて来た。……ああ、これが、道了塚で勘兵衛と決闘した原因だったのだ。……決闘の結果は私の負けだったが」

「あなた様が股を勘兵衛に斬られて倒れられたお姿が、木の間^まごしに見えましてございませ^す」

「彼奴^{きゃつ}の方が以前^{まえ}から私^{わし}より強かったのだからなあ。……彼奴は私の倒れるのを見て、林の中へ駆け込んで行った」

「勘兵衛お頭は私めを連れまして立ち去ったのでございます。……それから数日経ちまし

た夜、勘兵衛お頭には私を連れて、ここ道了塚へ参り、穴倉を開き、財宝を取り出し、持ち去りましてござります」

「それだのに彼奴め、過ぐる年、私の所へ参り、財宝と天国の剣とを奪ったのは私であろうと云い懸かりを付けおった」

「それもこれも、勘兵衛めの過去の罪悪を知っておる者、今日日では、あなた様と私とただ二人だけというところから、難癖をつけて、あなた様を討ち取ろうとなされたのでございましょう」

「その私はどうかというに、浪人組を解散して以来、ずっと古屋敷に、隠者のように生活していた。日課とするところは、道了塚へ行つて、我々の罪悪の犠牲になった人々の菩提を葬い、懺悔することだった。……私の心は日に月に陰気になって行つたものだ」

思い出多い過去の形見を、身に近く持つているということは、多くの場合、その人を憂鬱にし、衰弱に導くものである。たとえば、亡妻の黒髪を形見として肌身に付けている良人が、いつまでも亡妻の思い出から遁がれることが出来ず、日に日に憂鬱になり衰弱して行くように。……薪左衛門が、過去の罪悪の形見の道了塚を附近ちかくに持ち、そこへ日参したということは、彼を憂鬱にし彼を衰弱させたらしい。

「衰弱している私の所へ、博徒の頭、松戸の五郎蔵と成った勘兵衛が来て、私を威嚇したのじゃ、典膳よ、恥ずかしながら私は、その時以来今日まで発狂していてのう」

「又兵衛殿オーツ、私はその勘兵衛のために、髑り殺しにかけられ、コ、このありさまにござりまする！」

「全身血達磨だるま！ どうしたことかと思つたに、勘兵衛めに髑り殺し!! ……どこで? どうして?」

この時嘲笑うような声が聞こえて来た。

道了塚の縁起

「髑り殺しには府中でかけた! 理由か? 強請りに来たからよ」

それは五郎蔵であつた。林から抜けて、典膳の後を追つて来た五郎蔵であつた。年にも似ない逞ましい足をからげた衣裳の裾から現わし、抜き身をひっさげ、典膳の背後に立つていた。

「又兵衛!」と、五郎蔵は、典膳などには眼もくれず、はだかつた襟から、胸毛の生えて

いる肉厚の胸を覗かせ、鷲わしのような眼をヒタと塚の頂きの薪左衛門へ据え、呼ばわった。

「久しぶりで、妙な所で逢ったのう。……さて、くどい事は云わぬ、ここで逢ったを幸い、始末をする！ 典膳と一緒に」

「……………」薪左衛門は、五郎蔵を認めた瞬間顔色を変えた。恐怖で蒼褪めた。しかし、五郎蔵の言葉の終えた頃には、口もとに、皮肉の微笑を漂わせていた。

「又兵衛」と五郎蔵は、相手を呑んでかかった、悠々とした声で云いつづけた。「俺とお主とは、昔は兄弟分、随分、仲もよかった。そうして現在いまでも、大して怨恨うらみを持ち合っているという訳でもない。二十年前ここでお主と斬り合ったのも、東十郎を殺す助けるの意見の相違からに過ぎなかった。その後お前の屋敷へ訪ねて行ったのも、実はお主がどのような生活くらしをしているか知りたかったまでよ。だからよ、何もここでお主を討ち果たす必要はなさそうだが、だがやっぱり討ち果たさなければいけないなあ。というのはこの男の悪い例があるからよ」と、はじめて典膳の方へ眼をやり、抜き身の峰で、典膳の肩の辺を擲や揄ゆするように叩いたが、「俺アこの男へは相当の手当をし『これまでの縁だ、今後はお互いに他人になろう、顔を合わせても挨拶もするな』と云って、二十年前に別れたところ、二、三日前に、みすばらしい風をして、俺の賭場どころへやって来て、昔のことを云い出し、強

請りにかかった。……そこで俺は思うのだ、いつお主が、隠者のような生活から脱け出して、俺を強請りに来はしまいかとな。この虞おそれをなくすにやア、お主をこの世から……」

「黙れ！」と、薪左衛門ははじめて吼ほえた。「黙れ勘兵衛！　そういう汝こそ、この劍の錆になるなよ！」

薪左衛門は、手に捧げていた天あまくに国の劍の鐔つばの辺を額にあて、拝むような姿勢をとったが、

「これ勘兵衛、汝は今、二人の間には、命取るような深い怨恨はないと申したな、大違いじゃ！　拙者においては、この年頃、命取るか取られるか、是非にもう一度この道了塚で、汝と決闘しようものと、そればかりを念願ねんがんといたしておったのじゃ。そうであらうがな、浪人組の二人頭として、苦楽を共にし、艱かんなん難を分け合った仲なのに、いざ組を解散するとなるや、共同の財宝を汝一人で奪い、天下の名刀を奪い取り——ええ、弁解申すな！　典膳てんぜんよりたつた今、事情しっかい悉皆聞いたわ！　……のみならず、それらの悪行を、この薪左衛門にかずけようとした不信の行為！　のみならず、辛酸を嘗め合った同志を穴埋めにした裏切り行為！　肉を喰うも飽き足りぬ怨恨憎悪が、これで醸かもされずにおられようか！　……持つ人の善悪にかかわらず、持つ人に福德を与うと云われておるこの天国の劍が、我

が手に入ったからには、汝と我との運命、転換かつたと思え！ かかつて来い勘兵衛、この天国の剣で真つ二つにいたしてくれわ！」

五郎蔵は、むしろ啞然とした眼付きで、春陽を受けた剣が、虹のような光茫ひかりを、刀身の周囲に作つて、卯の花のように白い薪左衛門の頭上に、振り冠られているのを見上げたが、「ナニ、天国の剣？ ……どうして汝の手に？」

と、前後を忘れ、ズカズカと塚の裾の方へ歩み寄つた。

と、その時まで、塚の真下に、小岩を抱いて、奄々えんえんとした氣息で、伏し沈んでいた典膳が、最後の生命力ちからを揮い、胸を反らせ、腰を蜒うねらせ、のけ反つた。とたんに五郎蔵の悲鳴が起こり、同時に彼の姿は地上から消え、彼の立っていた足もとの辺りに大きな穴が開いた。

天智天皇の七年、高麗国こまのくにの滅亡するや、その遺民唐の粟ぞくを食むことを潔しとせず、相率いて我が国に帰化し、その数数千に及び、武蔵その他の東国に住んだが、それらの者の長おさ、剽盗ぞくに家財を奪われるを恐れ、塚を造り、神を祭ると称し、塚の下に穴倉を設け、財宝を隠匿かくした。

これが道了塚の濫觴はしまりなのであつて、勘兵衛、又兵衛の浪人組どもは、その塚を利用し、

強奪して来た財宝を、その穴倉の中へ、隠匿したに過ぎなかった。栓のように見えていた小岩は、穴倉の上置きの際石を迂らせる、槓こうかん桿かんだったらしい。その槓桿を動かしたがために、穴倉の口が開いたのらしい。

「う、う、う！」

という呻き声が、塚の縁から、穴倉の中を見下ろしている薪左衛門の口から起こった。

因果応報

その穴倉の中の光景は？ 白昼の陽光ひが、新しい藁束のように、穴倉の中へ射し、穴倉の中は、新酒を充たした壺のように明るかったが、頭でも打ったのか、仰向けに仆れ、手足をバタバタ動かしながらも、立ち上がることの出来ない五郎藏の姿が、負傷した螳螂かまきりかのように、その底に沈んで見えていた。でもその彼の、頭の辺や足の辺や左右やに、白く散在している物像ものかたちは何んだろう？ 人間の骸骨であった。それこそ、この穴倉の秘密を、世間へ知らせまいため、強奪した財宝を運ばせて来た百姓どもを、そのつど、浪人組の者どもは、この穴倉の中へ斬り落としたが、その百姓どもの骸骨に相違なかった。今、尚、

立ち上がろうとしてもがく、五郎蔵の足に蹴られ、三尺ぐらいの白い棒が、宙へ躍り上がったが、宙で二つに折れて地へ落ちた。股の付け根からもげた骸骨の脚が、宙でさらに膝からもげたものらしい。また、すぐに、五郎蔵の手に刎ねられ、碗のような形の物体が、穴倉の口もと近くまで舞い上がって来たが、雪球ゆきだまのように一瞬間輝いたばかりで、穴倉の底へ落ちて行つた。髑髏どくろであつた。一体の、完全に人の形を保っている骸骨が、穴倉の壁面かべに倚りかかつていた。穴倉を出ようとして、よじ登ろうとして、力尽き、そのまま死んだものと見え両手を、壁面に添えて、上の方へ延ばしていた。仔細に眺めたなら、その骸骨の足もとに、鞆たもとの腐ちた両刀が落ちているのを認めることが出来たろう。武士の骸骨である証拠であり、最後に犠牲になつた伊丹東十郎の骸骨に相違なかつた。その骸骨へ、もがいている五郎蔵の手が触れた。と、骸骨はユラユラと揺れたが、すぐに、生命を取り返したかのように、グルリと方向を変え、傾き、穴ばかりの眼で五郎蔵を見下ろしたかと思つと、急に五郎蔵目掛け、仆れかかつて行き、その全身をもつて、五郎蔵の体を蔽い、白い歯をむき出している口で、五郎蔵の咽喉の上を蔽うた。

恐怖の聲が、道了塚の頂きから起こり、つづいて、氷柱つららのようなものが、塚の縁から穴倉の中へ落ちて行つた。穴倉の中の光景を見て、気を取りのぼせた薪左衛門が、天国の剣

を手から取り落としたのであった。

この時典膳の体が、小岩を抱いたまま、前方へのめり、それと同時に、穴倉の光景は消え、地上には、もう穴倉の口はなく、そのあつた場所には、新しく掘り返されたような土壌と、根を出している雑草と、扁平の磐石と、息絶えたらしい典膳の姿とがあるばかりであった。

そうして道了塚の上では、穴倉の地獄の光景を見たためか、神霊ある天国の剣を失つたためか、ふたたび狂人となつた薪左衛門が、南無妙法蓮華経と刻つてある碑の周囲を、墓のように這い廻りながら、

「葉よーッ、来栖勘兵衛めが、伊丹東十郎に食い殺されたぞよーッ、葉よーッ」と、叫んでいた。

その葉は、林の中で、紙帳を前にし、頼母に介抱されていた。葉を介えている頼母の姿は、数カ所の浅傷と、敵の返り血とで、蘇芳でも浴びたように見えてい、手足には、極度の疲労から来た戦慄が起こつていた。

（敵は退けた。恋人は助けた！）

しかし彼は、それをしたのは自分ではなくて、大半は五味左門であることを思った。

(その上私は、あやうく竹で突き殺されるところを、左門に助けられた)

塑像そぞうのように縫り合っている二人の上へ降りかかっているものは、なんどりとした春陽であり、戦声が絶えたので啼きはじめた小鳥の声であり、微風に散る桜の花であった。そうして二人の周囲に散在ある物といえ、五郎蔵の乾児たちの死骸であった。

苦行者か殺人鬼か

頼母は、ふと、眼を上げて見た。左門が、乾児たちの死骸の中に立ち、もう血粘ちのりをぬぐった刀を鞘に納め、衣紋えもんをととのえ、腕組みをし、紙帳を見ていた。その姿は、たつた今しがたまで、殺戮さつりくをほしいままにしていた人間などとは見えなかった。顔色はいつもどおり蒼白かったが、いつも煤色の唇は赤くさえあつた。目立つのはその眼で、それには何かを悲しんででもいるかのような色があつた。何を悲しんでいるのであろう？ 頼母は左門の視線が紙帳に食い入っているのを見、自分も紙帳を見た。

紙帳は、血によって、天井も四方の側面がわも、ことごとく彩色いろどられていた。そうして、古

い血痕と、新しい血痕とによって、怪奇な模様を染め出していた。すなわち、塔のような形が描かれてい、堂のような形が描かれてい、宝珠のような形が描かれてい、羅漢のような姿が描かれてい、仏のような姿が描かれてい、卍のような形が描かれているのであった。

それは、諸法具足を象徴した曼陀羅の模様であった。血で描かれた曼陀羅紙帳は、どころ所切り裂かれ、いまだに血をしたたらせ、ノロノロとしたたる血の筋で、尚、如来の姿や伽藍の形を描いていた。

（諸法を具足すれば円満の境地であり、円満の境地は、一切無差別、平等の境地であり、この境地へ悟入はいつた人間ひとには、不平も不安も不満もない。そういう境地を模様で現わしたものが曼陀羅だ。……この紙帳の内と外とで、俺は幾十人の人を殺したとか。……また、この中で、父上も俺も、どれほど考え苦しみ、怒り、悶え、憎み、喜び、泣き、笑ったとか。紙帳こそは、父上と私との、思考かんがえと行動おこないとの中心であった。……その紙帳が、曼陀羅の相を呈したとは？）

考えに沈んでいる左門の前で、血曼陀羅の紙帳は、微風に揺れ、皺を作ったり、襞ひだこしらを拵えたりしていた。

(少くも曼陀羅の境地へ悟入るには、思考と行動とが同伴わなければいけないらしい。…
…少くも俺は、この紙帳の内と外とで、善悪共に、思考え且つ行動つたのは事実だ)

さつき紙帳へ停まつて啼いていた頼白でもあろうか、一羽の頼白が、矢のように翔けて来て、紙帳へ停まろうとしたが、鮮血の赤さに驚いたのか、飛び去った。

(紙帳が曼陀羅の相を呈したのは、この中で思考え行動つた俺の行為が、曼陀羅の境地へ悟入る行為であつたと教えてくれたのか? ……そんなことはない! ……では、将来曼陀羅の境地へ悟入るようにと啓示してくれたのか?)

左門はいつまでも佇んで考えていた。

やがて左門は頼母の方を振り返つて見た。

頼母は、葉に縫られたままの同じ姿勢でいた。

「頼母殿」と左門は穏かな声で云つた。「貴殿には拙者は討てますまい。少くとも現在の^{いま}のお心境では。……その心境拙者にはよく諒解^{わか}ります。……さて拙者お暇^{いとま}つかまつる。拙者どこへ参ろうと、この血曼陀羅の紙帳を釣つて、起居^{おきふし}いたすでござりましょう。……それで、拙者を討つ心境となり、劍技^{わざ}においても、拙者を討ち取るだけにご上達なされたら、いつでも訪ねておいでなされ。……紙帳武士とお尋ねなされたら、大概は居場所わか

りましようよ。……拙者いつでも討たれて進ぜる」

それから、足もとに、今は肩息になつているお浦を見下ろしたが、

「不幸な女」と呟いた。「不幸にしたのは私わしじゃ！ 償いせねば！ ……死なば、わしの手で葬ろう。生き返らば……いや、わしの力できつと生きかえらせてみせる！」

紙帳で、死骸のようなお浦の体をつつみ、それを抱いて、左門が歩み出したのは、それから間もなくのことであつた。

林の木々は、左門の左右から、左門を眺めているようであつた。遙かの行く手に、明るく黄金色に輝いている箇所ところがあつた。林が途切れて、陽が当たっている箇所らしい。その光明界を眼ざして左門は歩いて行くように見えた。しかし、その向こうには、小暗い林が続いていた。でも、その林が途切れれば、また、陽光の射した明るい箇所があるに相違ない。でも、それへは、また、暗い林がつづく筈である。光明ひかりと暗黒やみの道程みちすじ！ それは人ひと生の道程でもある。光明と暗黒の道程を辿つて行く左門の姿は、俯向いていて寂しそうで、人生の苦行者のように見えた。

（父上のご遺志だ。わしはどうあろうと、どこまでも、奪われた天国の剣を探して、手に入れなければならぬ）

こう思つて歩いて行く左門であつた。

しかしその天国の剣は、道了塚の穴倉へ落ちて、ふたたび地上へは現われない筈である。天国が地下へ埋もれたことを知つておるものは、一人もないのであるから。たった一人知つている薪左衛門もふたたび発狂して、一切意識を失つてしまったのであるから。

絶対にとげることの出来ない希望のぞみを持つて、永久諸国を流浪するであろう左門の姿は、だんだん小さくなつて行つた。

山查子さんざしの藪の中から、その左門の姿を恐ろしそうに見送つてゐるのは二人の武士であつた。片眼をつぶされた紋太郎と、片耳を落とされた角右衛門とであつた。

「こう醜い不具者かたわものにされましては、将来このさき生きて行く気もいたしませぬ」と怨めしそうに云つたのは紋太郎であつた。しかし角右衛門は案外悟つたような口調で、

「いやいやこの刀傷がものを云つて、今後はかえつて生活くらしよくなるぞ。我々は、松戸の五郎蔵親分に腕貸しいたし、刀傷を受けました者でござると、諸方の親分衆のもとへ参つて申してみやれ、頼み甲斐ある用心棒として、厚遇されるでござろう」

「なるほどのう」

「左門は我らに生活の方法みちを立ててくれた菩薩じゃよ……こんなご時世、食えて行けさえ

したら御おんの字じやからのう」

——菩薩、苦行者、左門の姿は、遙かの彼方かなたで、この時、カツと輝いて見えた。光明世界へ——林が途切れて、陽光の射し溜まっている箇所ところへはいったからであろう。

やがて左門の姿は見えなくなった。

暗い林の中へまたはいったからであろう。

しかし、その向こうには明るい世界が！

青空文庫情報

底本：「血曼陀羅紙帳武士」国枝史郎伝奇文庫22、講談社

1976（昭和51）年6月12日第1刷発行

初出：「富士」講談社

1939（昭和14）年9月～12月の中絶、1970（昭和45）年「血煙天明陣」桃源社に付

載して完結公刊

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：阿和泉拓

校正：門田裕志、小林繁雄

2005年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

血曼陀羅紙帳武士

国枝史郎

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>